中央公論

第拾五年
第七號

佛蘭西ジヤン、ジヤツク、ルソウ著
日本 山口小太郎君 島崎恒五郎君 共譯

訂正再版

エミール抄

洋裝全一冊
正價金七拾五錢
郵税金拾貳錢
郵劵代用一割增

ルソウの名著「エミール」は、教育學界の一大寶典として又一大文學として久しく學者間に推重せられ、此書一たび世に出でゝ以來、歐米各國は爭ふて自國語に翻譯し教育學説の爲に無數の法門を闢けり、我邦教育家間に於ても、時々其説の一班を引用すと雖も、完成なる譯書無き爲め、其全豹を窺知る者蓋し少きが如し本書は「デーンハルト」の獨逸譯と「ペーン」の英譯とに據りたる者にして附錄として「リンドナル」の「ルソウ」傳及び「エミール」の略評を添へたれば教育學説の大根底を養はんとするの諸君は座右に一本を缺く可らず請ふ購讀あらんことを

新刊

足立栗園編述

神社通覽

全一冊
大和綴美本
定價金四拾五錢
郵税金六錢
郵劵代用一割增

本書は世上一般をして神社に關する知識を得せしめ且は神職を奉ぜらるゝ諸氏の參考に供せん爲に神道發達史研究の材料中より其萃を拔き神社の由來、二十二社の御事、諸國 宮の御事、神社靈社の御事、緣起ゝ詑宜、歷世の神事歷世の神勅神職の沿革、名稱及職掌、神祭の御事、維新後の變革大要、及び是に關する法令古今の祝詞及祓に就いて編述せる者なれば、神社に關する重なる事蹟は一目して知ることを得べけん、神官諸氏は固より歷史家教育家其他苟も神社に就いて國民敬神の要を知る所あらんとする者希くは一讀せよ

發兌 東京市神田區美土代町二丁目 開發社

印度大饑饉義金募集の檄

飢て食なく、たゞ死の到るを竢つ、人生の悲慘、斯くの如く甚しきものあらんや、骨肉路に斃れて相救ふを得ず、怨恩枕を並べて彼の蒼を仰ぐ、人生の悲慘、斯くの如く甚しきものあらんや、我が佛教の祖國印度の地、年、凶にして五穀實らず、妻は子を抱て飢に泣き、夫は妻を顧るに遑なくして歔欷暗涙に咽ぶ、老ひたるは若きを呼び、若きは老ひたるを呼ぶ、子は親を助けんとして力盡き、親は子を助けんとして力盡く、餓莩累々、道に普く、野に徧く、兒女童幼の食を求めんと欲して呼ぶ聲叫ぶ聲も今は力少なに、空く怨を呑んで既に他界の鬼と化し去りしもの其數幾千なるを知らず、万死に一生を得んが爲に、天に哭し地に哭する生靈約五百万、」彼等の運命は風前の燈よりも危し、嗚呼悲慘

哭すれども答へなき天地、英國は見るに忍びずと爲して既に救助義金二十万ポンドを彼の地に送り獨逸も亦五十万マークを彼の地に送れり、蕞爾たる暹羅、亦五千ルーピーを醵出して彼れに送る、米國も亦慈善家の大集會を開きて義金募集に着手せりと傳ふ、夫れ、人道の通義、佛教の要旨は、自他等く救ひ、怨恩並び劬るに在り、恩を禽獸に及ぼし、情を無緣の衆生に致す、これ佛陀の吾人に訓誨し給ふ所にあらずや、佛陀の訓誨に依り、人道の通義に依り、生を此土に托して國威を列強に輝かさんとする吾人、其佛教の祖國、印度の慘狀を聞いて誰れか同情一掬の涙を濺かざらん

爲聞く、印度の地は物價低廉、一人一日の救助金は僅に金四錢を以て足ると、一日一錢を蓄へば四日にして一人を死地より救ふを得、仰き冀くば大方の志士よ義人よ、其佛教を信ずると信ぜざるとに論なく、其一日一人を救ふに足ると十人百人を救ふに足るとに論なく、應分の資を投して以て彼の憐むべき無告の窮民を賑へ、

一 義金は多少を論ぜず雖成る可く四錢以上たるべし
一 義金の送付は來る八月三十一日を限りとす
一 義金送付者の芳名は反省社へ御送金の方は中央公論に廣告して領收證に代ふ
一 義金は佛教主義雜誌連合會の名を以て印度に送付すべし
一 反省社へ御送金の方は駒込局宛にせられたし

七月十四日

佛教主義雜誌社聯合會

中央公論

本號目次

社論

出兵の意義

所謂文明國人が常に人道仁義を口にしながら、一度國と國との關係に於て所謂外交の術を逞くするに當ては、人道仁義の聲を發すること愈大なると共に、人道仁義の實を去ること愈遠く、食言と暴力との外に殆んど一の見るべきものあらざらんとするは今日の國際道徳なるものにして、最近の大外交家と稱せられたるヂスレリーも、ナポレオンもビスマークもゴルチヤコフも要するに皆大なる食言虛僞の徒たるに過ぎざりし也。

所謂文明國人の間に於てすら已に是の如し、況んや彼等か基督敎已外の國に對し、殊に彼等の所謂劣等國未開半開の國に對して、譎詐百變その弱きものは暴力を用ひて之を威嚇し、その强きものは甘言を啗はして之を懷柔し、あらゆる蠻行を悉くしてその豺貪狼饕の欲を縱にせんとするは亦怪しむに足らず、英國か印度を取りたる、露國か亞細亞諸方を侵蝕したる、獨乙がサモアを奪ふたる、其他アフリカに於て、南洋に於て、東方諸國に於て、是等及び是等已外の諸國が領土を拓開し、勢威を樹立する、所謂白人膨脹の歷史を考ふるに悉く皆纂奪攘竊の歷史にあらざるなし、而して特に是等劣等諸國に上帝の福音を宣傳すと稱す、各國派遣のキリスト敎傳道師の如きものが、其本國政府の不正不義の行動を看過して、其成す所に一任するのみならす、寧ろ率ね彼等をして却てその非を遂けしむるの大々導火を與ふるか如きものあるに至ては尤も怪しむ可きの次第に属す、要するにキリスト敎國の道德、白人の所謂人道仁義なるものに於て、吾人は大なる疑なき能はず。

今や東方の土耳機と稱し、世界禍亂の動機を以て有名なる淸國に在ては、義和團匪徒の蠢起せるあり、之か

鎮壓の爲に送られたる清國の官兵は、却て亂徒に與みして人を殺し、家を燒き、獨逸公使の如きは已にその兇刄に仆れ、その他北京在留の各國公使、及ひ外國人の安否すら今に至るまて確かなる能はず、而して政府は已に排外守舊の徒の手に歸し、團匪に通して盛に排外的挑發を試み、その亂暴狼藉なる、清國は殆んど無政府の狀を呈し、禍亂の及ふ處、或は全帝國を擧けてその慘に罹らしむるも知る可らず、此際清國各地に數多の居留民を有し、商賣貿易及び政事軍事上に於て、尠からざる關係を有する各國政府か、各々大兵を遣送して、目下の紛糾に應せんとするは各國政府の任務として素より然らざる可さる處にして、各國强大の文明的兵力は、能く烏合の亂徒を掃蕩し、政府を攘略して要路に事を執る排外守舊の一類を壓伏し、日ならすして秩序を恢復せしむへきは疑ふを要せすと雖も、而も恢復已後の善後策なるものに至ては果して如何なるものなるか、左なきだに老大國が各國虎視耽々の間に在るもの既に久しからずとせず、各國は翹足して競て時變の到るを待ちつゝあり、一宣敎師殺戮の故を以て膠洲灣を奪ふが如き、傍若無人の行動をなして憚からざるものあり、矧んや東洋平和の下に能く吾國より遼東半島を奪ひ、而も舌端未だ乾かざるに、早くも却て之を自家の手中に收むる有道國君子國あるに際し、清國が今回の如き未曾有の大變を惹起し、各國政府を驚動し、各國政府に損害を與へたる是の如し、各國政府か有効の辭柄を具へて、巨大の要請を爲し來る、期して待つ可し、嗚呼恢復後の清國なるものは實に夫れ寒心すへきの至ならずや。

吾國は不幸にして東方に國し、此半死の老國と纔かに一葦帶水を隔てゝ、その興廢消長に於て利害の關係する處太だ尠少に非す、矧んや東洋平和の爲として已に彼か如く甲午の役を敢てし、清國は爲に大に衰弱を加へたるの看すら之れあり、殊に同文同種の國民として兩國の交誼は戰後特に一層の密接を加殖し、清國一部の有力者及ひ改革者と稱するものにして、吾國に依て大になすあらんとするもの近來其數を加へんとするの

今日、空しく之を各國爭奪の機に附し、看す〳〵その亡滅に一任せんとするか如きは、吾國たるものか、之を一國の利害に見、之を人情の上に見、到底忍ぶ能はざる處にして、飽くまでも人道仁義（各國の所謂人道仁義に非す）の標幟を明かにしし、一方に於ては各國の不當不義の要求を裁斷し、一方に於ては四百餘洲保全の道を講し、能く此老大國民をして進歩發達の域に向はしむるもの實に吾國が自國の爲め東洋の爲め世界の爲め、亦人道仁義の爲め避く能はざるの一大天職なりと覺悟せざる可らず。

然れども吾國が能く其天職を悉くして遺憾なからんとするには、素より政府及び國民に於て、大信仰あり、大義氣あり、主義あり、方針ある可きは勿論、之と共に清國の爲めに大なる犧牲を供して悔ひざるの決心を要す、各國が今にして盛に兵を進めんとするもの、獨團匪の爲のみに非ずして、大なる要求の辭柄を作らんとするに在り、之に依て彼等は皆曰はんとす、吾國は是の如き損害を蒙りたり、是の如き大兵を派遣したり、故に是の如き要求を爲すべし、彼が如き報償を望まざる可からずと、彼の公使を失ふたる獨逸皇帝が、嚇怒大に出征軍人を勵策したるが如き、其の眞意の在る所何人も之を揣摩するに難しとせす、此間に於いて吾國たるものが新進の一小微國を以て、屹然各國不當の要請を論擊し、清國の爲めに將た東洋の爲めに、有力なる發言を爲さんとす、抑も知らず何等の力に假らんとするか、若し何等の勞力もなく何等の犧牲をも爲さずして、漫然人道仁義を口にするのみなりとせんか、誰か亦た之に首肯するものぞ、吾人は此點に於て吾國か遲延なから大に兵を發し更に大に發せんとするを贊せずんば能はず。

蓋し吾政府が始め大兵を派するに躊躇したるもの、吾人と雖も其意を諒とせざるにあらず、世論の往々にして出兵に反對せるも亦理由の聞く可きなきに非ず、爾れども是の如きは吾國が各國に伍して大なる私慾を遂けんとするに於てのみ、狡兎死して獵狗烹らる、空しく犬骨を折て已まんとするを恐るゝか爲のみ、若し吾

國にして苟も正理人道を標榜し、清國扶殖の外、亦何等の私念を有せざるものとなすか、大に出兵するに於て何の躊躇するものある、矧や各國か齊しく此事を以て吾に要請するものあるに於てをや矧んや北京在留の吾公使を始め吾居留民及び各國公使居留民等は方に團賊包圍の底に救護を絶叫し居るものあるに於てをや、吾國の兵を出す二万三万多々增可にして、出兵することと愈多くして吾國の同胞及び各國文明國民の救護に於て悉す處愈全かる可く從て吾國の世界列國に對する勢力地歩に於て愈强大を致さん、是の如くして一旦團匪全く蕩平し、清國に對する各國の要求雨の如く下るの間、獨り吾國の要求する所は土地に非ず、償金に非ず、却て各國不當の要求を撤せしむるに在り、清國を根本的に革洗して進歩改善の道程に上らしむるに在りとせんか、その公明にして正大なる各國の狂暴を以てするも如何にして吾發言を拒否し得んや、是の如くして倘聽かざるものあるか吾國たるもの天下を公敵として爭ふも何の畏るゝ所あらん、矧んや或る一國の如きに於てをや宜しく進て一蹴し去るべし、假令ひ若し不幸にして一敗地に塗し、吾國二万方里を焦土となすも仁を以て仁を得たり義を以て義を得たり、上下五千万人衆に於て素より悲しむ可きなし、矧んや十二師團の陸兵を悉くし二十万噸の軍艦を擧けて粉韲し去るも亦遺憾とする所にあらざるべし、吾人が吾出兵を贊するの意義全く茲に在り、而して是れ吾日本國民か所謂文明國人の爲めに、人道仁義の意義を明釋し去るの好機會にあらざる可らず、吾軍隊吾外交の當局、吾政府、吾國民か今回の事變に於けるの責務豈にそれ大ならずとせんや、爾れども若し夫れ事の茲に出つるものあらずして吾國政府たるもの所謂白人的外交の詐術を弄し仁義を皮にし平和を毛にし彼の豺狼飽くなきの徒と馳逐して倘尨たる此の四百餘洲の腐肉團を爭はんとするか、その結果の如何に拘はらず吾人か今論定せんとする所の問題に非ず。

吾軍隊の行動

吾人前論に於て吾大兵を出したるの正義の爲め公道の爲たる所以を陳述したり、吾國の淸國に於ける始めより怨恨あるものにあらずして、兩國の交誼は戰後一段の接密を加へたるは疑ふ可らざる事實也、それ唯疑ふ可らず淸國扶殖の任務を遂成せんが爲に玆に兵を出し大に團匪の兇暴を壓伏せんとするのみ。

然り而して各國聯合軍の間、例の人種的宗敎的反感の促す處、時に或は傍若無人の蠻行を敢てするものなき能はず、是の如き場合に當て、さなきだに血氣に逸し易き、吾下級の兵士などが、事理を辨ぜずして徒らにチャン／＼打つ可し、豚尾殺すべしとて、動もすれば義軍の主旨に反するの行動をなすが如きあらば、吾軍隊の名譽を毀損するのみならず、吾國民の意旨に於て大に背違せるものあり、遺憾の至りとなす可し、假令ひ各國軍人等にして果して野蠻の行動をなすが如きものあらば吾軍隊は宜しく之を妨沮し彼等をして能く文明軍の文明軍たる所以を守らしむべし、即ち是れ吾軍隊の出征したる本務たるものに非ずや、

紀律嚴正尤も名譽ある吾軍隊に向て是のごとき言を爲す、寧ろ杞憂に屬せん、杞憂を知て尚杞憂するもの、亦是れ國を愛するの至情のみ、吾出征軍の將校及び兵卒の諸氏庶は一顧の勞を吝むことを爲さゝれ。

（已上二文七月十日）

印度の飢饉

印度飢饉の慘狀は增其聲を大にし來る、苟も人類同情の淚あるものは決して雲烟視し能はざる處にして、吾國朝野の人士が漸く義捐募集の運動を見るに至りたるは尤も賀せざる可らざる處となす。

蓋し今回の飢饉は千八百九十七年、即ち吾明治三十年、風害不作の結果大飢饉を惹起したるより引て今日に及びたるものにして、その區域太た廣く、殆んど吾國人の數と同しき四千余万に垂んとする人民が死に瀕し

飢渇を絶叫し居るものにして、其の慘の太しき前古未曾有と稱せらる、而して幸にして印度人の生計の低卑なる尤も少許の金額を以つて能く救濟の目的を達すべし、即ち吾帝國大學に留學し、今や母國の慘狀を救ふに汲々たる、ロマカント、ライ及びブランシンク兩氏の發したる檄文に見るに、

四錢を寄附し玉はゞ以て一日一人の命を救ひ得べく、壹圓にて一ヶ月間一人を救ふべし、貳圓の高は一人を次期の收穫時まで救ひ、拾圓は夫妻及その兒を救ひ、貳拾圓は一家を悉く死地より助け、百圓は五家族を全く救助し得べし

と以て如何に些少の金錢が、大なる慈善を價し得可きかを知るべし、一日一人の命を救ふ可き四錢の金は、小學兒童も之を寄附するを難しとせず、矧んや一夕の饗宴に數百金を消耗して、吝まざる富豪の徒に於てをや、百圓二百圓の義捐は蓋し一擧手一投足の勞に過ぎざるべし、已に西洋諸國に在てすら汲々として之が救護に怠らずと云へり、宗敎上學問上將た地理上由來尤も深厚の緣因を有せる吾國民たるものにして、如何ぞ亦慈善の紅淚を濺へて、能く可憐無告の窮民を活かさんとはなさゞる。

或は曰ふ、印度國民の飢饉は殆んど年々のことに屬し、加ふるに窮民の數は常に數千餘万に上り、その慘狀の區域も太だ廣大にして、吾國民を以て之に應せんとするは、恰も熱石に滴水を灑くに異ならず、且つや吾國民が義捐する處のものは之を諸外國人に比對しては九牛の一毛にだに價せず、却て吾國の面目を損せざらんや、寧ろ已むに如かずと、嗚呼何たる暴言ぞや、その區域の廣漠たる其窮民の夥多たる、吾人の義捐は熱石の一滴たるや否やは吾人が今にして考ふべき問題に非ず、吾人は唯人類として此死に瀕する無告の國民に對して大なる慈善心を滿足せんが爲に及ぶ限りの力を悉くして之を救濟せんとするのみ、矧んや救濟の金額の如き多々增可なりと雖も吾國が外國に及はざるは悲しむべし、而も是が爲に已むと已まざるとは一國の恥辱に於て孰か大なる矧んや一圓二圓の義捐すら尙多大を救ふに餘りありと云はずや、吾人小許の義捐にして果して國の面目を害すとせんか吾人は面目を顧慮す

るに暇あらず、甘してその國辱を敢てせん也、論者の暴言素より一厘の價値なし、唯吾人及吾國民は此際貧弱なりと雖もその慈善心及び慈善力に於ては敢て西人の後に落ちざるを表旌するを忘る可らざる也。

吾人か目下の救濟に對するの意見や已に是の如し、而して更に偉大に考ふへきものなき能はす、即ち印度國民は果して是等の天災より永久脱却する能はさるもの也や如何是也、米國「評論の評論」の記者の記する處によるに曰く、

印度は面積合衆國の半に足らざるも人口は其の四倍にして大約三億万也、彼等は相對的に一も制造業の食を求む可きものを有せす、專ら稼穡を以て生計を營なまざる可らす、地方によれば一方哩一千の人口を容るゝ所あれども、ほかに東漂西泊一定の住居なく豐穰の年に在てすら憐む可き生計をなすもの幾百万なるを知らず、而して平年に在て一般に眞に全國人を養ふに必要なるものは稍々多分の食料を得可し、されど印度收獲の運命を決すべきものはモンスーン也、初夏の西南風の常に雨を帶ぶるものを濕モンスーンといひ、冬期の東北風を乾モンスーンといふ、此等の定期雨にして若し其時を失せば北部地方の冬春兩季の大麥小麥及び豆類の南部の米稷等の發育を妨くる也、今年の饑饉は是より起り其慘狀尤も太し、最も古く記錄に存するものは千七百七十年の飢饉にして、已後殆んど十年毎に一を回見ざるなく、英國政府は九年毎に二回の旱魃を、十一二年毎に一回の飢饉を、一世紀毎に一回の現今の如き大飢饉を豫期せりと

之によりて之を見るに、印度國民の社會的狀態として是の如き天災は豫期して誤らさる處なる可しと雖も、英國政府なるものにして果して若し誠心誠意人道的眼光よりして三億万の亡國民人を扶殖し、能く生ける光明を仰望せしめんと想ふか、印度人惰弱にして無氣力なりと雖もヒマラヤの麓、ガンゼスの濱、何ぞ又綠野千里花薰し、鳥歌ふの樂園たらしめざるを知らんや、素より英國政府は學校を設けざるに非ず、衞生に注意せざるにあらず、電信を架し鐵道を敷かざるにあらず、矧んや飢饉條令を發布して、數千万の金を投して餓民救濟の勞を取らざるにあらず、然れども英國政府及び英國々民たるもの、果して人道の大義により、親切と誠實、涙と血とを以て之を施設しつゝあるか、陽に然りと稱して陰に然らざるに非るなきか、印度人は惰弱也、偏見也、迷妄也、導て文明の大道に步す可らざるものありとするか、其をして愈惰弱ならしめ、愈迷妄ならしむ、英國政府たるもの果して罪の分つべきもの

あらずとするか、蓋し是れ飢饉救濟をいふものか進て更に大に研究すべきの問題に非ずや。

是に於てか吾人は印度に尤も關係多き吾國の佛者及び各宗の本山當路諸氏に熱望す、宜しく速かに視察員を印度に派遣し、先づ飢饉の狀勢を目擊せしめ、更に進て大にその依て起る原因、及び結果を考察せしむ可しと、その三億の廢人を勵覺して、果して文明的活人たらしむか如きは素より徐々として世界輿論の勃動と英政府の反省に待たざる可らずと雖も、日本佛教者が今日に在て其慘狀を目擊し、その源因結果を研究し置くは今回の義捐を募集するに於て、將來印度問題を解釋するに於て、尤も必要の一事也と信せずんばあらず、然り而して吾國の佛者而も各宗本山を代表したる幾十の僧徒か既に佛骨奉迎と稱して印度咫尺の地に航しなから、此の大慘狀の視察を心頭に上したるものすら之れなく空しく歸途に就きたるは人道の大義を辨せざるの失體として世の宗教家博愛家の攻擊を遁る能はざる所なるべしと雖も、過て改むるに憚からず、今に於て事倘遲しとせず、宜しく一日も速かに吾人の所謂視察員を派遣し內大に義捐募集に悉す可きもの、獨り印度が教主釋尊の故國たるのみに非ず、人道の爲め公義の爲め、吾國各宗本山及び佛者の避く能はざるの一大責務なりと云ふ可きなり。既に一片枯骨の爲には彼か如き巨万の金錢と人力とを徒費して顧みざる吾國の富み且つ裕かなる佛者及び各本山は、此の印度四千餘万の死に瀕し飢を叫ぶ活如來を救助するに於て、亦必ず吾人を滿足せしむるあらん。（海外新潮參照）

夏日と職工

梅潤霽を放ち、天地漸く熱す、官吏學生富豪貴紳の徒か万斛の涼味を趁て青山白水の間に逍遙するは將に今より始まらんとす。

吾國人の避暑は疑問也、吾國の暑氣は或る一類の人に對して果して避けざる可らざる程に太しきものなりや否や吾人の常に疑問とする所なり、爾れとも若し果して避暑せざる可らずとするか、各種工塲の職工の如き

は宜しく先づ其惠を被らざる可らざる者にあらずや。」

彼等は一年三百六十五日、元日と除夜と其他の數日を除却しては殆んど一日の休息をも得ずして、不潔なる空氣を呼吸し、陰暗なる工場の底に營々屹々として老の到るを知らざる也、嚴冬の凛寒素より苦しかる可しと雖も、三伏の烈熱の如き殊に堪ゆ可らざるものあらん、依て以てその健康を害し、不治の痼疾にかゝり、若しくは中道に夭折するもの亦夫れ幾干ぞや、而も彼等にして倘殊に一日の休息だも敢てせざる所以のものは一日の休業は以て彼等が一日の衣食を奪ひ、二日の休息は以て二日の衣食を奪ふに餘りあればなり、その情に於て寧ろ大に憫れむ可きものあらずとするか。

されば彼等職工が雇主として、各種の大工場を有する富豪紳商と稱せらるゝものにして、果して自ら恕して其實情の存する處を察せば、長夏三伏彼等をして能く數日の休放を樂しましむるに於て敢て大なる犠牲にもあらざらん、爾らざるも尚一周若しくは二三周日を限りて午後の工業のみにても休止せしむる如きとあらば彼等職工の快感は蓋し彼の函嶺の翠を吸ひ、大磯の雪濤に放浪する者に比して更に大なる者あらん。

唐の大宗の聯句に曰く、人皆苦㆓炎熱㆒、吾愛㆓夏日長㆒、薫風自㆑南來、殿閣生㆓微涼㆒と、東坡見て以て美ありて箴なしとなし、更に四句を加ふ、曰く一爲㆓居所㆑移、苦樂永相忘、願言均㆓此施㆒、清陰分㆓四方㆒と是等職工の雇主たるもの、青山の隈、白水の濱、炎塵到らざる所、果して自ら夏日の長きを愛するを知らば、盍ぞ又た一掬の清涼を分てその可憐の職工に及ばざる。

論説

英國工場法の大要

河上翠陵

余は幾たびか「萬朝報」の紙上に於て、當局者が工場法の制定を怠るの兆あるを咎め、速に其の調査を終了して、次回の議會には必ず工場法案を提出すべきを論ぜ

り。曩きに農商務省は數萬圓の工場調査費を第十四議會に要求したるも、議會は之を削減して、七千三百圓となせり。七千三百圓の調査費實に少きが如きも、徒らに調査を名として工場法の制定に遲々すると我が當局者の如くんば、余は寧ろ七千三百圓の調査費だも多きに過ぎざるかを疑ふ者なり。今や當局者が七千三百圓を以て調査しつゝありと稱する所は實に左の數項なり。

（一）工場及び寄宿舍の危害
（二）工場寄宿舍及び職工の衞生
（三）職工に關する調査
（四）外國に於ける以上諸點に關する狀況
（五）外國に於ける工場に關する法令及び既設幷に其必要を生じたる事情殊に立法又は施設當時の工業工場及び職工に關する學者及び實際家の論說
（六）我國に於ける工場制度に關する立法施設

當局者が果して眞面目に熱心に忠實に、以上の六項目を調査せんと欲するや否やは、且らく之れを問はざるも、彼等の所謂調査なる者が徒らに日を曠うし久きに亘りて、其の結果や每々「大山裂けて一鼠出づ」の觀あるは、余の常に遺憾とする所なり。且夫れ、當局者が調査せんとする右の六項目は大抵二三年前に政府が一たび調査したる所に屬す。今日に於て再び之を調査する果して何の必要かある。否、之を調査するの必要、決して之れ無きに非ざるも、先づ工場法を制定して然る後に、其調査を續行する亦可ならずや。只、調査を口實として、工場法の制定を怠ると今日の如くんば、余は寧ろ調査の不必要を唱へんと欲する者なり。余が今茲に英國工場法の大要を畧述して當局者の參考に供し、又世人の注意を乞はんとするは、聊か工場法制定の料に資せんと欲するなり。

歐洲諸國が始めて工場法を制定したる年代を擧ぐれば左の如し。

英吉利	千八百二年
瑞西	千八百十五年

普魯西　千八百三十九年
佛蘭西　千八百四十一年
墺太利　千八百五十九年
獨乙聯邦　千八百六十六年

即ち英國の工場法は最も古くして、最も長き歴史と沿革とを有せり。而して英國が諸國に先じて、工場法を制定したるは、其工業の發達に於て亦諸國に先じたるに依らずんばあらず。蓋し前世紀の末葉より、英國の工業界は徐々として一新紀元を開くの氣運に向へり。諸種の機械が工業に應用せられたるの結果、工業上に重きを爲す者は人の腕力に非ずして、機械なるが如きの觀あり。是に於てか、射利貪婪なる資本主は、賃銀の高き成年勞働者よりも、賃銀の少き幼兒に及女子を用ゐるの利益なるを觀て、爭て少年及び婦女を傭ふに至れり。而して資本主等が幼工及び女工を使役するや、毫も其の身躰健康の如何を顧みずして、過度の勞働に服せしめ、晝夜之を酷役して、殆んど之を犬馬視せしかば、其結果や、婦人の健康を害し、少年の夭折を來し、職工の家庭を紊亂し、弊害百出して底止する所を知らず。而して當年最も英國に熾なりし工業は實に木綿及び絨毛の二製造業にして、此の二業に從事せる幼工女工の數亦最も多かりしなり。是に於てか政府は法律を以て木綿、絨毛の製造所を監督し、以て幼工女工の健康、道德を保護するの必要を認め、千七百九十六年に衞生委員數名を擧げて工業界の狀況を調査せしめ、終に千八百二年に至りて「**衞生及道德條例**」なる一法律を發布せり。此法律の目的たる、專ら幼工及女工の健康道德を保護するに在りて雇主に負はしむるに、左の如き七項の責任を以てしたり。

(一) 毎年二回工場の白壁白戸の塗替を爲す事
(二) 毎年新衣一揃を徒弟に給與する事
(三) 工場に新鮮なる空氣を流通せしむる爲め適當の窓及び戸を供ふる事
(四) 特別の場合を除きては徒弟の夜業を止むる事
(五) 徒弟一日の勞働は十二時間を超ゆべからざる

事

(六) 讀書、習字、算術を徒弟に敎ふる事

(七) 寄宿舍に於ては男女の徒弟を同居せしめ、又は一個の寢臺に二人以上の徒弟を共臥せしむべからざる事

此の七項は衞生道德條例の主要なる規程にして、彼の貪婪殘忍なる雇主が、是によりて一大恐慌を來したるや明なり。只此法律の適用せらるゝ範圍極めて狹く、其規程亦甚た單純なりしは、聊か遺憾とする所なきに非ざりしも、英人が能く時勢の必要を察し、法文の躰裁に拘泥せずして、此の法律を發布したるは吾が當局者の須らく鑑むべき所に非ずや。今や我邦に於ける紡績工場、燐寸工場等に於ける幼工女工の狀態は一世紀以前英國の木綿、絨毛製造所に於ける幼工女工よりも更に憐れむべき者あり。而かも當局者は徒らに口を調査に藉りて、這の憐れむべき幼工女工を保護するに踟蹰するは、抑も何の心ぞや。

千八百二年の衞生及び道德條例が、規程簡短にして、適用の範圍狹隘なりしは既に述ぶるが如し。此の條例の適用せられたる工場は僅に左の三種のみ。

(一) 木綿及び絨毛の製造所

(二) 三人以上の徒弟を使役する工場

(三) 二十人以上の職工(徒弟に非ざる)を使役する工場

此の三種の工場を外にしては、勞働者の狀態如何に憫れむべきも該條例は之を保護する能はざりしなり。是を以て此法律は久しからずして追加補正せられ、爾來幾多の追加的條例の發布せられたる者殆んど四十回の多きに上りしかば、煩雜にして毫も秩序なく組織なく、殆んど讀むに堪へざるに至れり。是に於て政府は此等の條例を一括して、別に整頓せる法文を編成するの必要を認め終に千八百七十五年に至り委員を撰みて、編成の任に當らしめ、千八百七十八年に至りて始めて其編成を終り、玆にヴィクトリヤ第四十一年第四十二年法律第十六號を以て製造所及び工場條例を(Fa-ctoryaus Workshof Acts) 發布したり。其後千八百八

十三年及千八百九十一年に於て此法律に多少の修正を加へたれども、大躰に於ては千八百七十八年の條例を基礎とし之に千八百三十三年の法律（ウィルリアム第四世第三、四年法律第百三號）を加へたる者を以て現行の工場條例となす。請ふ之より進んで、現行法の規程が如何に勞働者を保護するかを説かん。

現行英國工場法は施行の便宜上、其司配すべき工場を區別すると左の如し。

（一）製造所(factory)
- 織物製造所(textile factory)
- 非織物製造所(non-textile factroy)

（二）工場(workshop)

（三）家庭工場(domestick workroom)

織物製造所と云ふときは、單に織物のみを製造する工場を指すが如きも、實際は然らずして、蒸氣力、水力又は其他の强力なる機械を應用して、綿、絨、麻、麻苧類、絹、陶器等を製造する所を稱して織物製造所と曰ふ。**非織物製造所**とは、織物製造所よりも微力なる機械を用ふる者を曰ふ。此區別は明瞭なる標準あるなく、到底理論を以て之を明に區別する能はず。只法律を適用するに當りて適宜に之れを區別するのみ。次に**工場**とは機械力に依らずして專ら手工によりて物品を製作する所を曰ふ。終りに**家庭工場**とは營業者自身の家に於て家族のみの勞力を以て製作を行ふ者を曰ふ。

英國工場法を適用すべき工場の種類は右に述ぶる所の如し。次に此の法律を施行するの機關は**工場視察官**なり。倫敦に中央視察官廳ありて、之に中央視察官を置き、更に各地方に地方視察官を置く。而して視察官の職權は（一）製造所若しくは工場と認めたる場所に晝間立入り、又は男女を使役する場所に晝夜の別なく立入り、撿査を行ひ、（二）條例が必要とする證書、告示書、其他の文書の撿閲を製造所主又は工場主に求め、必要ある場合には之を謄寫し、（三）幼工の健康を診斷せしめ、又は職工の負傷等を臨檢せしむるの任を帶ふる證明醫を任命し。（四）十六才未滿の勞働者にして現に製造所に使用せらるゝも、視察官に於て、病氣等の爲め

就業に適せずと認むるときは、七日以内に之を解傭すべきことを、傭主に命じ、(五)證明醫が就業適任證書を作成するに當り、幼者の出生證書に依らずして身躰の撿査を爲し、爲めに該證書に記載せる年齢に誤謬あることを認むる場合には、視察官は之を無効と宣言する等なり。視察官は此の職權を執行するに當りて妨碍を加へらるゝの虞ある時は警察官を同伴するを得るなり。夫れ工場法が實際に功を奏すると否とは、實に視察官其人を得ると否とに依るのみ。故に視察官を撰むに當りては周到の注意を用ゐさるべからず。英國の條例が工場所有主と親戚の關係ある者若しくは工場主と直接に利害の關係ある者を以て、視察官と爲すを禁ずるは、視察の公平を保つに於て最も當を得たる者なりと信ず。(未完)

丈山の渡らぬあさを涼みかな　其角

古社寺保存について

水谷仙次

緒言

古社寺保存を説くの要は漸く去り、既に其保存の方法につきて、論評を下すべきの時となりぬ。而も其事の擧げられてより茲に數年、早く結了を告げたるもの二三に出づ、今にしてこの方法を難ぜんが如きは、あまりに迂濶なるの誹を免れじ。然れども、吾人は寧ろ吾人をしてこの誹を忍ばしむるに至りしを、切に悲まざる能はず。蓋し、其の保存の意見につきては、世間また吾人と要を同じうする者あり、或は現在の保存法に慊らずして、亦吾人も見を異にする者あり。從て往々この方法につきて、批判を加へたるもの少からざりしと雖ども、その局に當れる者は、未だ大いに耳を世論に傾くるの寛あるものなく、また眼を義理の精透に注くの明なきもの多ければ、枯息、彌縫をこれ事とし、專任といはるゝ建築家は、たゞ自己の研究と、其職の

安きとを偷み、徒らに名利の獨占を企てゝ、國家人文の最大遺品を如何にするの念なし。げに天平の標品たりし南都新藥師寺は、本來の古式に還へすてふ美名の下に、全然破却、改築の厄に遭へるに非すや。されどかゝる解躰的事業は、其局に當る者自身にとりて、非常に興味あり、また利益あると、猶醫か難治の大患に接し、屍躰の解切によりてうる所多きか如し、もとよりその治と屍とには全きを期す可らず。如是研究的方法は、その所謂古社寺幸保存の意義に於て何如あるべき。かつて唐招提寺の金堂も破られ、藥師寺の東塔もこぼたれつ、法隆寺の解躰亦邇かきにあらんとすと、吾人何ぞ迂濶の謗を辭して、口を緘むるものあらんや。

古社寺保存の意義如何

古社寺保存の方法を難せんとするに先だち、其保存すべき意義を明にせんとするは、蓋し要なき事といふ可からず。世には往々之れに美術的見解をのみ下し、其藝術の標範として、古社寺、古器物を保存すべしといふ者あり。げに美術の範となし工藝の規となすに足るべき者は、國家千載の至寶、開明の英とし、文化の華として一日も其保護を緩ならしむ可からざることと、言を竢たず。然れども古昔人文の開化を察し、もしくは風俗嗜好の徵證を覓め、或は文献の徵する所に相まちて、更に史蹟を明らかならしめんが如きも、亦たこの古器物、古社寺の貴重せらるべき所以ならずとせず。もし強ちに、美術的遺品の保存をのみ滿足せしむるが所謂現在須急の保存方法なりといへば、吾人は單に美術的、非美術的といはず、更に猶一層洪汎なる意義に於ての、古器物、古社寺保存を說かざる可からず。保存會のとる所頗る明晰を缺けりと雖も、幸に未だこの偏癖には陷らざるがごとし。

また別に時代に執着するものあり、曰はく、推古寧樂の時代のもの保存せざる可らず、平安朝のものまた然り、鎌倉足利猶とるに足る、德川に至りては多く破毀すべきものありと。この說はやがて古建築に於ける後

世の補修除却說となり、轉して破壞的、解躰的營繕となり、また大佛殿ぶちこわし說等となる。元より寧樂平安の朝に於ける者の如きは、遺品頗る稀にして、其保存の急なること、數多き後世の者とは全然同列にしきかたき事情ありと雖ども、決して之を破壞し去るの要ある可からず、然るに何ぞ甚たしき推測の補修を施し、妄りに時代の一致を云々して、後年の修營を掛け其失點と、不備の跟跡とを模糊の間に葬り去らんとするが如き、これらの保存法が、果してよく古社寺を保存すべきの本意に乖かざるやは、吾人疑を容れざらんと欲するも能はざる所なり。

要するに、古社寺古器物を保存するの眞意義は、國家の最大なる紀念として、國民の至重なる生命として、永遠にその文化を傳へ、また古物學、史學に一徵證を與へ、之を研究し、之を攻覈し、之を基礎として更にこの種の學術を大成し、文明史にます〳〵光明を能ふる者、猶史料の蒐集が大に史學に研究の問題を與へ、ます〳〵光輝を放ち來らしめんとするが如き耳。

古社寺保存の方法如何

其保存の方法は、須らく尤も忠實に、尤もありのまゝに、而して毫も研究的、斷定的の跡を顯はさしむ可からず。蓋しそは史料の散逸し去らざる前に於て、之を蒐むるの要あるが如く、現在の古物、古建築にして之を頽敗に至らしめずんば可なるのみ。之に向ひて直ちに一技師、一學者の下に考證的改良を施さしむるの危險なるは、猶史家をして自由に、古記錄古文書の改竄を企てしめんが如くならずや。

而も現今の古社寺保存會に於ては、其補修保存の方法につきて、如何はかりの確實なる成算と、目途とを有するや、之れ吾人の尤も聞かんと欲する所なり。多く蒐め、廣くとり、國寳、或は保護物の名稱を與ふるのみを以ては、未だ其職責を空ふせざるに由なからん。たゞそれ保存會にとる處は、多く集むるの兩點に於てや、吾人の意を得たる者ありといへども、其補修の上につきて、或は時代に執着するの傾あるが如く、また

時に形狀の如何をいふて、樣式を顧みざるが如きものなしとせず、かくの如きはよく古建築を保存するの方法に於て、些少の遺憾を期すべきにあらさるか、この無方針なる保存會なればこそ、考證的、研究的修補を行はしめて、何言をも云ひ得ぬなれ。或は所謂保存會なる者は、物の斷定にあづかるを以て、能事了れりとなすか、保存會豈其保存の方針を定め、その建物箇々につきて修補の程度を考察し、豫め技師をして恣ならしめざるの權能なくして可ならんや。もしまた一寺一社の保護せらるべき程の建造として、單獨に之か修補をなさんとする場合に當りても、保存會は完全なる規程を設け嚴重に其修繕、改築の方法を講せざる可らず。

然れどもその意外なる、所謂專門家中に於ては、この忠實なる、ありのまゝなる、臆斷的、研究的ならざる方法を以て、迂愚なる手段とし、學問的ならずと笑ひ、飽までも其の考證的改修の必要を叫ひ、自己研究の犧牲に供せしめんとする者多し、もとよりかく史資に資入變更を加ふるが如き事業は、須らく愼重なる學者の德義としても、猶之を企つ可き者に非るが如しと雖ども、今現に之を云ひ、之をきゝ、また之を行ひつゝあるを如何せん。

されど吾人は決して研究を斥くるが如きものにあらず、現存のものは、そのまゝに保存し、古式はかくあるべし、かくあらざる可からざる的推測は、之を學說として別に存すべく、而してまた後人に研究の資を存し、其考證の精確と公明とを欲するなり。もし更に一步を進むれば、天智推古の古建築にして、後世に改修せしもの、もしくは破補せしものにして、今其舊形式を傳へず、之を破却し去る程の研究を了りしとせば、そは已に古式新式明瞭となれるもの、學說は之を研究の結果とし、雛形製圖をして別に珍聚館に襲藏せば、永く其効勞を空くせざるに足らん。敢て万金の國帑を費し、其實物につきて剝奪改築するの要あるを知らず。而も猶更に研究を重ぬれば、或は未發の事實を生せずといふべからず、ましてや其所謂古式の幾分をして明ならしめたるは、この現存の不具的建物なるに於

てをや。されど頑迷なる諸子は、到底耳を之に傾くるの勇なからん。希くは諸子が、その推測的方法と斷定的考證とを以て、徒らに古式の一致を稱へ、剩さへ一切後人の研究史料をも湮滅し、國民を勞し、國寶を傷け、謬誤を後世に傳ふるの汚名を蒙らすんば幸なり。

吾人は更に一例を設け、保存會員に向ひまた、世の有識者に對し、批判的獨斷的考證が、如何に恐る可き者なるかを一言せん。

名高き大和法隆寺なる卍くずしの高欄の如き、全く支柱の力士アトランテスの如きは實に學者間の疑問たるものなり。特に其高欄は或者は其樣式決して推古時代の者に非ず、これ黄檗建築の齎らせる明式にして、桂昌院時代の修補にかゝる者なりと云ひ、或者はまた、之れ必ず推古の物たるべし、もし法隆寺の建築にしてこの高欄を除き去らんか、其格好の調和に於て一大失點を生すべし、法隆寺を建造するの技量ある者が、この失點を敢てしたりしとは到底吾人の信しうべき所にあらずと。蓋し、一見其高欄のあまりに明風にして、柱にエンタシスある希臘印度式には、何の調和も致す者あらず、三月堂に同式の高欄あるのみを以ては未だ容易に推古式を肯定せしむるに足らざるが如し。而も後者の論する所や、牽强の嫌なきに非るも、建築の性質上尤もなる理由なり。されはまた此中間に立ちて、一說をなすの餘地を生す、則ち曰はく高欄は其當時に於て必ずや設けられたる者なるべしと雖ども、現存の者は恐らく後世の補修にかゝる所なりと。此の如きは何れを眞とし、何れを非とすべき。恐らくこれ未決の問題として、永く考證研究を重ぬるの要あらん、而もこれ法隆寺の保存には寸毫の關係なきのみ。吾人の所謂尤も愼重に現狀を保持するを以て足れとす。保存の緩急はその頽敗を量尺とす、學術問題と、保存の施設とはかゝる方面に於て、毫も關係なき者たらざる可からず。

而してこの混亂を敢てしつゝあるは、現今の保存方法なり。もし法隆寺の修繕にして、高欄推古論者に會へば、幸にして遺存せらるべく、明式論者に對すれば破

却しさらるべく、更に中間論者に遭へば、考證的、捏造的高欄を新設せらるゝに至る可し。史的問題は元より多數によりて決すべきに非ず、大家の説亦往々にして誤謬なきを保せず、後學の者時に的確の辯なしといふべからず。共に信すべき學者間の異説を、某一派の考察に左右して、保排せしむる考證的保存方法は、如何ばかり無謀にして突飛なる、局にあたらぬ人はこの一例に於て必ずや思半ばに過ぐるものあらん。而して大なる弊害に至りては、こゝに一々枚擧するの遑あらざるなり。

危險、無謀かくても猶よく、保存の名目を冠するに足るべきか、技師の自己的なる、沒分曉なる實に責むべき者ありといへども、保存會の不忠實なる、更に大いに甚しきものなしとせんや。

古社寺保存の結果如何

終に臨み、既に保存の功を丁へたる、新藥師寺につきて、少しく言ふところあらん。南都新藥師寺は、夙に天平建築の遺品として、後世多くの改修を經たるにも拘らず、猶昔日の風貌を窺ふべきものあるにより、大いに古物學者間の貴重する所たりしなり。而して一朝所謂保存の厄難に遭ひ、その手始めとして着手せられ、今は全然天平の古式にかへれりと颺言せらる。其看る者が、形狀のいたく舊觀に異りしに驚きて、種々の批難を加ふるが如きは、元より內外俗輩の言、之をきくの用なかるべしといへども、吾人はその斷定の盛なるに荒膽を拉がれずんばあらず。

例の筆法によりて、新藥師寺のとりくずしは、足利の蓑股なりとて剝き去られ、鎌倉の向拜なりとて壞ちすてられ、梁は何、椽は何とて改められたる者、實に其數を知らず、或は、他の同式のものなりと云ひて、或は三月堂の裝飾に倣ひ、唐招提寺の斗拱を模し、以て考證を重ぬると稱し、却りて其徵據の資料をして單調ならしむるに想到せず、特に其巴瓦唐草瓦の模樣の如き古代新藥師寺のものを求めたるに非す、いふ所の古瓦天平文樣を集め、別に考定したる所なりといふ。雖

かよくこの改築をきゝて、呆然たらざる者ぞ、鎌倉時代に修補せし向拜は、げに天平の古代を窺ふに些少の効なからん、然れども其形式の上に於ては、却りて向拜を存せしに若かず、玆に於て鎌倉時代の修補が元形を維持するてふ上に効少かりしと雖ども、其同時代の手工を見、また意匠を察する點に於て、決して興味なき者にあらず。之れに反し、其同式なるの故を以て三月堂の虹梁を模し來り、唐招提寺の斗拱を模するが如きは殆ど無用の閑事のみ、是を研究せん者は其實物につきて觀察するに足れりとす、まして新に瓦面の紋樣を構造せしが如き、これ好事者流の玩弄に非れば、考究の麁漏、横着ならずして何ぞ。吾人は恐る其内部小屋組等の構造には、必ずや豫期せざりし多くの手法に遭遇したらんを。

よしまた暫く一歩を研究的修補に讓らんも、かゝる抽象的改築が、幾干の貢獻を學術界に與ふるやは、たゞ識者の判ずるに任せんのみ。

あゝ、辛ふじて千百の星霜を經たる古建築は、漸次甲技師の推古式となり、乙學者の天平式と化し了らんかな。

雜録

月男の説

上田敏

沙翁の嬉劇あまたあるうち、瓊瑤の氣、おのづから其上を吹きて、飄逸のさま殊におもしろきは「夏の夜の夢」なれど、曲中ところ／＼亞典の俗象を點じて、下谷の滑稽を雜へたるも妙趣の一なり。三幕第一場、亞典郊外の森に、商工の徒、茶番狂言の下浚にとて集ひたる時、「ピラマス、シスビイ、月夜のあひびき」を演ぜむと定め、いろ／＼のおろかしき準備ありしうち指物師スナッグのいふやう、愈々興行の其夜は月夜なるべきか。機屋ボッタムせきこみて、早く暦を、暦を、月夜を見て呉れ、月夜を見て呉れといふに、大工のクインスこそ落つきたれ。げに其夜は月夜なりと答ふ。

ボッタム又いふやう、さらば舞臺の大窓をひらきて、月影を入るればよし。クインス一計を案じて曰く、仰の如し。さなくば、たれか柴を負ひ、提燈を下げ來りて、われこそ月光を代表したれと申さばよからむと。此塲の滑稽を極め、下民の無智を表して眞に迫れるは、誰も知る所なれど、何故に柴を負ひ、提燈さげたる男が、月光を代表するかに就ては、月男の傳説を知らずして解するべからず。

月のなかの黒影は、物負へる人の如し。誰家の薄命の子が、さびしくも冷たき氷輪のおもてに、孤影をうつして、甲斐なき懺悔を地上の民に示すは。彼の國の傳説をは此影の前生を舊約の書中に求め得たり。「民數紀略」十五章三十二節に曰く、以色列の子孫曠野に居る時、安息日に一箇の人の、柴を拾ひあつむるを見たり。是に於て其柴を拾ひ集むるを見たるものども、之を摩西とアロン及び會衆のもとに曳きたりけるが、之を如何になすべきか、未た示を蒙らざるが故に、之を禁じ錮めおけり。時にヱホバ、摩西に言ひたまひけるは、其人は必らず殺さるべきなり。全會衆、營の外にて石をもて之を撃つべしと。全會衆、すなはち之を營の外に曳きいだし、石をもて之を撃殺し、ヱホバの摩西に命じ給ひし如くせりと。今歐羅巴の子守謠にいふ月男は即ち此安息日の守を破りし罪人なり。而も舊約書中一言の月に及べるなし。

「中世奇話」の著者ベアリング、グウルドは此月男を以てアリヤン民族の古傳と爲し、北歐の傳説を擧げて其證とす。北歐羅巴の物語には、マアニ即ち月は、ユウキ及びビルと呼ぶ童男童女を奪ひ去て、シムルの竿にゆひつけたるセグルの吊桶にて、ビエルギルの井に水くましむ。二人の子、此竿、及び吊桶は今に地上より窺ひ得べしと傳へ、瑞典の農民は、今日もなほ月中の黒影を以て水桶かつきたる二人の童男童女とし、夫の子守謠にジャックとジルは御山を越て、水くみにいった。ジャックは轉で、頭を割て、ジルもあとからひっくりかへって仕舞たとあるも皆傳説の形を異にせるものにして、ユウキ（ジャック）ビル（ジル）の二子は、原と月

の盈虚を說明する傳說に過ぎざりしなり。然るに北歐の迷信は、はじめ偷奪の行を月其物に付けたるも、俗說はやうやく之を月中の影に移し、童女の形忘れられて、童男のみとなるに至りても、汚名のみはとこしへに殘りぬ。さるほどに童男長じて成人となり、水桶もまた柴の一束に變じ、基督敎の傳播するに隨て殊に新敎國に於ては、之を「民數紀略」中の罪人と同視するに至りしなり。

支那の傳說に據れば、月のなかに桂樹あり、高さ百丈ばかり。人ありて常に之を伐れども、其創やがて合す。此人の名を呉剛といふなりと。されどこれも月男の一說ならむか。邦俗月中の黑影を以て杵もてる兎の臼に向ふなりといへは、印度の古傳より出たる如し。釋尊むかし形を兎に變じて猿狐と共に棲みける時インドラ其傳を試みむとて、餓たる老人に化して、食を乞ひたるに、與ふべきもの更に無かりしを、兎は施物なくて老人を歸さむことのつれなきを思ひ、自ら火に投じておのが肉を供しぬ。インドラ乃ち德に感じて之を月中に移せりと。印度に於て月と兎とを關係せしめたるは佛說のほか古傳數多ありて、かの禽獸譬喩談の祖といふへき「パンチヤタントラ」三卷第一話、智慮ある兎の話はベアリング、グウルドの書に引用せられたり。されど墨西哥の傳說も亦月中の黑影を說明して、神が月に向て投じたる兎なりといひ、西藏にもグルランドにも、同一の傳說行はるゝを參照すれば、未だ輕々しく速斷す可からざるなり。又諸邦の古傳には日月を以て男女とし、從て月中の黑影を其間に起れる葛藤の結果となせるもの多し。例へはヒマラヤ山中のカシヤ種族の傳說に據れば、昔し一人の男ありしが、繼母に情を寄すといふ大罪を犯したる時、灰を投げられて今日の如き黑影を生ぜりとし、又エスキモウ種族の傳說には、日月をはらからの男女とせり。男なる月ある夜ひそかに女なる日に對て、いかゝはしき振舞ありしに、日はいそぎて曲者の面に灰を塗りおきたれば、後に月の所業なることを發見して、空に逃れ去りぬ。されば月のおもてには其時の灰のあとを殘したりと。

傳說の研究の興味は斯るはかなき兒童の迷信に關しても豐なれど、此學に獨創の見を出し、未知の材を資するは博覽强記の才と、長日月の研鑽とを要するものなり。而して神話學の研究法に就て、わが夙に奉ずる所は、タイラア、ラング等の唱道する人類學說にして、常識も賛し理性も嘉みする此精緻なる學風こそ最も信を措くに足れるものなれ、今にして言語學說の糟粕をねぶる人は佛蘭西になにがし僧正が戯れに、ナポレオンの一生を日光神話と說明したる文を繙きて可なり。

帝室と文學

齋藤綠雨氏談話
時文記者筆記

こは記者が綠雨氏を其病床に訪ふて、特に聞き得たる談話の要領なり。近刊の『新小說』に出でたる同氏の文壇保護說と關聯する所勘なからず、併せ讀みたらば殊によかるべし。

文壇の保護とか、待遇とかいふ事について、近來種々の說が出るが、畢竟それも不振の爲めで、不振の原因を說きつくした揚句が、さうなつたんだらうと思ふ。

私も提出者の一人だが、保護とか待遇とかいふと、直ちに金錢の意味、生活の意味に解してゐる者が多い。私は報酬の事に就て、別に論ずるつもりで居るが、今度の『新小說』に出てゐる保護奬勵策を讀んで、矢張左樣いふ意味からの誤解も出やうし、元來保護を受けるものか、受けないものかの議論も出やうと思つて居る。私のは重に今の時勢と云ふ上から立言したので、文士といふ事が無論自分といふ事ではない。文學に限らず、凡ての物の狀態から見て、西洋の例だの理屈だので、今の時勢を律しやうとするのは無理ぢやないか。保護といふ事を言出した上は、最早社會の實際問題に一步這入つてゐるわけで、現在の文學及將來の文學に對して、効果のあると認められる丈の、保護策なり奬勵法なりがあつたら、それを行ふやうに力めてもいゝではないか、まさか文壇に居る人は間違へもしまいけれど、文壇以外の人は、私が今保護奬勵案を出したからと云つて、現在の文士が寢て食ふ爲めに出したのでないことは、能く承知してゐてもらゐたい。『新小

說』の談話の中にも斷つて置いたが、無論私のは方便だ。方便でも夫が將來の功益になつて、文學發達の道行に力を與へることなら、かまはないと思ふ。私の出した策は金がなくてできる策でないけれど、帝室から御手當を貰ふといふのが目的でなくつて、競爭製作をさせやうといふのが目的だから、事情が今直ぐに許さない迄もどうか、さうなればいゝといふ事を私は眞面目に思つてゐるのだ。

元來私が帝室といふ事を考へたのは、保護說中に述べた理由の外に、すべて帝室に於て遊ばされることは、常に一國の模範となり、儀表となり、本源となつてゐるからで、或論者は社會の尊敬心といふ事をいふが、今の社會は文學といふものゝ趣味を能く理解しないのだから、假令文士が身命をかけて何か試みたところで、趣味を解さない社會に尊敬される筈がない。たま〲解する人があつても、夫は無勢力、無資力の人で、厚遇したくとも厚遇の出來ない人達だ。さういふ人達を相手の社會なのだから、先づ帝室にお願申して、模範を示して戴くより外はない。社會は必ずそれに啓發せらるゝだらうと信ずる。私の建てた競爭作案若くは之に似たやうな方案が、今直ぐに行はれないまでも、文學といふものに對して、從來よりはもつと進んだお考へを、帝室に於て持たせられてもお宜しいやうに私は思つてゐる。現在帝室の文學といへば、和歌より外には何もあらせられぬ御樣子で、鬚の白い、皺の多い、頭の外側よりは內側の奇麗に禿げた有德人を召させられて、御歌所といふものが設けさせられてあるばかりだ。急激な論者は、御歌所廢止を唱へてゐるさうだが、是は全く御廢止なさらずとも、漸次に御擴張遊ばして、帝室は帝室の文學寮といふやうなものを置かせられたらよからうと思ふ。此處に私が文學といふものは、無論小說に限つた事ではない、歌もよからう、新躰詩もよからう、凡て廣い意義の文學寮といふものに遊ばされたい。時と金とがなければ、手の着けられないものがまだいくらもある。日本の文學が上に衰へて、下に昌へたといふは誰でも知つた事で、早い例

が源氏物語はどこで作られたものであらう、何處で珍重されたのだらう、紫式部が博文館へ賣つた原稿では決してなかつた。要するに、私は文學の保護といふ事を除けて考へても、一日も早く、帝室に文學寮といふやうなものを置かせられて、然るべきものだと思ふ。あまり立入るのも畏れ多い事だから、帝室のことは此處で措いて、さて今の上流社會と稱する者の事も少し言はう。今の上流社會といつたら、實に驚き入つたもので、朝野ひつくるめて、文學趣味などは絶無とも言ふべき有様だ。勿論文壇に籍を置くものゝ中にも、自分は何をしてゐるのか、自分で知らない人さへある位だから、他界の人をさう責めるのは無理かも知れないが、昨今のやうに頻りに他界から口を入れるやうになつては、一應言ふだけの事は言はねばならない。先づ當り前なら、此上流といふのが、智慧もあつて、お錢もあつて、文學の發達といふやうなことに直接でなくとも幾分の便りになる筈のだが、それがまるで、文學はおろか、只の文字さへわからないのだから、文士の尊敬などゝ云ふ事は、此連中に對しては、夢物語のやうなものだ、だから、夫を望むといふよりは、敎へてやるといふやうにでもしなければ仕様がない。今の顯官とか、紳商とかいふやうな人で、文學を解する人はと云つたら、誰と答へることは出來ないぢやないか、僅に一二あつて、鳥渡いへば末松さんとか、西園寺さんとかいふやうな方々もあるが、それとても文壇自身に進んで來た今から見ると、どうも趣味の點が違つて居るやうに思はれる。其餘の成上り紳士達に至つては、講談の筆記位ゐしか解する力がない、其中でちよつと立勝つたといふのが、江戸時代の草双紙を知つて居る位のことだ、だから、文學と云へば、詩か歌位に心得てゐて、七言絶句の一つも作れば、あれは學者だねといふが、併しそれも尊敬するのでなくつて、遠ざける前置ともいふべしだ。文學は末技だなどゝいふ語があるので、何處迄もそんなものだと思つて居るが多い。當世政治家流の人々は、皆其仲間だ。今の小說の舞臺が狹いとか、小さいとか、理屈らしいことを云ふから、

能く〳〵聞いて見るとそれは小說の中に志士の居ない位ゐが議論の落だ。戀愛ばかりが小說だとはいはないが、小說は東洋の安危とか、列國の意向とか、そんな事ばかり列てできるのではない。得て政治家流の人々は、露國がどうの、英國がどうのと、地球儀を手玉に取るやうなことを應接所で言ひつけて居る癖があるから、さういふことでなければ、大きいとも、廣いとも、思はないらしい。小說家だつて世界の形勢とか、政治上の革新とかを知らないのぢやないけれど、是をたゞ陳列した文では、小說にはならないのだから仕方がない。斯の如き誤解者の僞りの抱負を代辯するのが、小說家ではない。もつと文學に對してシンミリした考を持つて居てくれねば、文士の立ち場といふものが今の時世では無い譯だ。それでもう一面、上流社會には別の誤解がある。それは幾度もいつたことだが、今でも小說といふものを、草双紙か、人情本同樣に思つてることだ。江戸時代の作者は、多く幇間のやうなもので、大家の權高を取り卷くとか、金持の隱居について歩くとかいふやうな事をして、其間に御機嫌とり半分に本でも作つて、自分で幇間たることを甘んじて居た。其お蔭で、今でも小說といへば草双紙、小說家といへば幇間、それを讀んだり、披げたりすると、何だか賤しいやうに思つて居る人があつて、これが存外今の文壇に障碍を與へて居る。先日來文士の交際について辯ずる人があるが、文士だつて交際を好かないのではない、交際の必要を知つては居るが、一方へ行けばまるで理解しないし、一方へ行けば幇間のやうに心得られるし、其中を不承して交際するといふことは、一時は出來やうが、長く出來ることではない。そこで、自然世の中を離れるやうな形になり、世の中は愈々作家に離れるやうな形になる。私の考では、其罪は社會にあるか、文士にあるかといふと、身贔負か知らぬが、社會の方に多くあるやうに思ふ。今の作家は、作家自身としては修養もせねばならないし、生活もせねばならないし、生噛りの奴からは、注文的評論に會はなければならないし、而してまるで解らぬ奴に對しては、誘導

し寧ろ開拓せねばならない。隨分つまらない位地に居るものだ。併し幸に保護論とか優遇論とかいふことが、世間に聞え初めたから、此機を外さず、文壇の内と外とに向つて、大に力めなければならないと思ふ。こゝ二三年文壇沈滯の理由の中には、日清戰爭の影響といふことが大分あつた。戰後の膨脹とか云つて、錢勘定は大分やかましくなつたが、文學の詮議などはまるで棄てられた。それは戰に勝つたのだから、此勢ひで小説を讀まうといふよりは、まあ一杯といつた方が尤もだつたのだらう。今又丁度淸國に捫着ができて、此影響が再び文壇に來るかも知れないが、それは今からの文士の覺悟次第で、どうにでもならうから、私が『新小説』に云つたやうに、大同團結でないまでも、大に文學の勢を張らねばならない。

詩と禪

行々子

詩は寺言なり、禪離るべからず、禪は單示なり、一語以て空觀を了すべし。

古にして淡至味なり、簡にして明淨理あり、五言を貴ぶ所以

五言を賦するもの丶尤も了知を要すべきもの一、曰く簡短にあらず

古人曰く唯守格律揣摩聲病詩家之常若時出度外縱橫放肆外如不整中實應節時又非造次所能也と余は寧ろ彼を舍て此を取る、一意流水自然妙あるに如かず

流水去る、白雲來る、去來到頭是空、空裏有物即是詩

詩境超脱するもの快心一片曰く、掛席幾千里名山都未逢泊舟潯陽郡始見香爐峯、正に是れ雲破れ月來るの時、眞如皎々たり

亦知る、生死の關を打破して逍遙自得するもの詩を解せざるも詩人、即禪

詩人にして禪を知らず、其詩下品、禪者にして詩を知らず、其詩小乘

禪道に參するもの最上乘に從ふべし、詩門に入るもの

正法眼を具すべし

詩人の書齋宜しく一枝の花を插むべし、虛飾にあらず、以て機を忘る、一爐の香を焚くべし、無用にあらず、以て神を養ふ、神定り機息み寂として瞑坐の時、松露一滴、詩興忽動、一句自成、即妙

萬卷圖書堆裏に坐して左顧右眄徒らに典故の搜索に忙殺俗了せらるゝもの却て一笑、自然妙を語るに足らず

糟粕を嘗め、唳唾を拾ふ、一賤奴のみ、維摩の室唯一床而して萬有、風月來往天地自ら別なり

惡詩百篇にして大家、可捨、妙篇數首にして名家、可取、家數の大小論するに足らず

今の大家小人にして俗なり、古の名家君子にして雅なり、品性の修養なきは詩人の一大缺點

其詩を許するに諛辭を以てす、嘔吐百斛、一服の清涼散を欲すること久し

其人に崇らすに寃罪を以てし互に地位を爭ふ、詩人即市人

寄語す、天下の詩人先づ坐禪工夫して煩惱を脫離すべし

海外新潮

海外大勢

●亞細亞の分割

英國人ブラック氏五月の發刊の『第十九世紀』に「亞細亞に於ける英國の版圖」と題する論文を寄せ英政府が絕へて其の根據を南方亞細亞に固むるの策を講ざるを非難し露國が今や將さに全通せんとするシベリア鐵道に藉りて覇を北方に唱へんとするを稱揚せり

方今西部亞細亞に於て最も人目を惹くべきは獨逸が益〻威勢を小亞細亞及びメソポタミヤに振ふに至れるにあり而して同國が豫言せる如きバグダッドより波斯灣に達する鉄道の開通は決して英國の異議を挾むべきものにあらずとはブラック氏の主張する所なり英國が眞の勁敵を以て目すべきは露國なり英國政府にして若し露の威力を抑へんと欲せば唯埃及より支那に至る南方亞細亞通路を開くの一手段あるのみ即ち英の爲めに計るに宜しくアレキサンドリアよりシナイ半島及び北部波斯を橫ぎりて波斯灣頭に達し更に東部波斯及びバルーチスタンを經英領印度の國境を貫きてブルマーに至り延て支那に入り揚子江岸に沿へる一大鉄道を布設すべし

カブチン、メーハン氏曰く亞細亞の分割は東と西となり行動は北と南となり簡潔にして要を盡くせる言といふべし露國が波斯灣に據りて其の立脚地を固むるは正さに英國の東方と西方領士との中間に一楔を施すものなり速に露の進行を壅塞せざれば是れ南亞を横斷する英國鉄道の開通を妨くるものなり「支那に於ける西方策略は取りも直さず鉄道策略なり」とサクスベリー氏の此の言にして果して眞ならば吾人は西方亞細亞に於けるも亦た然りと道ふを憚からざるなり

ブラック氏はカルゾン氏とともに英國が須らく支那に於ける其の利害の範圍を確定すべきを論し露國が一歩たりともベンダ、アッバス又はチエーリバールの方面に進行することあらば極力之を沮遏すべきを説けり氏は又た曰く

波斯及びアフガニスタンに於ける此等の露國行動の相一致するは英國の最も忌むべき所なり是れ明かに露國が苟も機を得れば咄嗟にしてヘラットを陷ゐれんとするを證し且つ能ふ丈け波斯の領域を蠶食せんとするの野心を示すものなり波斯今や國債を露國に負へども其の南部諸州の全然露の欄外に立てるは何故ぞや是れ往時より英露兩國間に南部波斯は前者の勢力の下にありといふ一條の默約（勿論確乎たる訂盟とは稱し難けれども）存するに由るなり吾人は常に其れをして永く湮滅に歸せざらしめんことを忘るべからず

アフガニスタンに在ては少くともアミーアの存立する間は更に危難の恐るべきものを見ざるべし近來ケッタとライスタン商業の其の緒に就けるは印度及び外國商社合働の結果にして目下バルーチスタン、波斯に達する電線を架設するの議あり然れども英國の爲めに萬全の計といふべきはナイル河より楊子江に至る一大鐵道を通ずるにあり尤も此れに由て益すべき方面の極めて雜多なるがため勢として其れ等の間に利害の衝突を惹起すは到底避くべからざるべし是れ唯一の困難なりブラック氏の概算によりれば該鐵道を通ずるの資四億ポンドに出でざるべく「倫敦及び西南鐵道」の下にあるべし氏は速に其の調査委員を撰任すべきを以て結論せり

●尼加剌瓦運河案協議の延期

去る五月二日米國衆議院は三十五票に對する二百二十五票の多數を以て尼加剌瓦運河開鑿議案を可決し之に一億四千万弗の經費を充てたるも元老院は之に反して二十一に對する二十八の多數を以て該案の討議延期せんことに決せり其の理由は彼の英國との未決條約及び運河委員の報告によりて觀るも未だ之を議題に上ぼすの時機に到らずといふにあり是れ諸新聞紙の皆な認知する所なり費府『インクワイラー』は曰く運河案が少くとも其の主要の目的の係はれる丈にても元老院のために重きを措かるゝこと未だ曾て渝らざるは何人も之を疑はざるべしされど凡そ事物には之れが時を得せしめざるべからず而して吾人の該案を協議するの時機猶ほ未だ熟せざるなりと夫れ尼加剌瓦運河開通事業の必須にして一人の之を非するものなきは今更いふ迄もなくバルチモーア『ヘラルド』は例へ如何なる故障の蟠まるあらんも唯其の着手の日を後れしむるの外何等の結果をも生ぜざるべく畢竟これが完成を見るに至らんこと復た論を待たずと道へりクリーブランド『プレーン、ヂーラー』は曰く來る十二月議會の再び招集さるゝに當り諸多の材料の據て以て確乎たる判斷を下すべきものを得べければ燥急に事を處し去らんよりは靜かに其の時を俟つの穩かなるに若かずと維府『タイムス』は元老院の擧動を評して健全にして成算あるものといへり又た曰く

尼加剌瓦運河案延期に對する投票の多數を占めたるは吾人の施措の妥

當を缺げり云々の非難を抑止するものと謂ふべし本案は一現存條約と更に他の討議中にして未だ元老院の批准を經ざる一條約と太だ相抵觸するものなり禮を吾人の友邦に失せず之を待つに當然の道を以てせんと欲せば須らく此等の兩條約を廢棄せざるべからず

吾人の友邦とは即ち英國なり元老院の內外を問はず漫りに侮辱を英國に加へて以て自ら快とするもの多けれども是れ米國人民の意嚮に非ざるのみならず抑も亦たへー、ポーンスフォート條約を訂結せし政府者の目的に非ざるなり運河案の延期はアドミニストレーション及び禮儀と威嚴との勝利なり又た至誠にして眞に時事を憂ふるものゝ勝利なり彼の輕佻事を慮らざるもの（吾人は毫も元老院議員モルガン氏の如きを意味せず氏の運河事業に關する熱心と勤勞とはまさに時に及んで其の效果を收むべし）與もに爲すあるに足らずと

●英國海軍の眞相

南阿事變の漸きに其の落着を告ぐるや倫敦『タイムス』は筆を極めて英人が終局の勝を制せるを祝し兼ねて彼の此の戰を以て世界の一有力者としての英國の存立を危くするものなりとなせし者を嘲笑したり然るに近日に至り英の國務大臣等暗に說をなして曰く英國は早晩他の力其の虛威を凌ぐに足るべきものと容易ならざる葛藤を生ずべきを豫期して可なり英國たるもの宜しく自ら顧みて其の海軍の情勢が果して其の陸軍に勝る勝ありや如何を推究すべしと「海戰に於ける甲鐵艦」の著者ウヰルソン(H.W.)氏が『第十九世紀』雜上に論ずる所英人をして寧ろ寒心せしむべきものあり其大要に曰く

方今獨逸が其海軍力を以て隱然牛耳を中央歐羅巴に執り更に戰艦整備の資を國外に徵集せしが如き大に英人の警戒を加ふべきものなり而して不幸にも英國の兵備は猶ほ未完の境に彷徨するにあらずや船艦凡そ三十七隻現に築造中なりと號すれども吾人は之を裝ふに必須なる兵甲を以てするの難きを聞けり唯だ稍々人意を强くするもの海軍局が其の經費を調達しつゝありとの報告あるのみ吾人は十分の船工を有せざるなり當さに一八百九十九年中に築造すべき五隻の軍艦も未だ全く効を竣へざるなり獨逸人の戰艦を築造するや吾人と略ぼ同類の資を投ずれども佛露兩國人と等しく其の更に迅速なるは吾人の企及する能はざる所なり佛國北方艦隊七隻の中に就き全然近世式によるもの二他も同樣に改造してその木工の部分を取除けり然るに英艦十隻の中一の近年の作に成るものなく且つ兵火に燃え易きこと殆んど松脂に類するは是れサンチアゴ戰爭の證示せる所なり之に加ふるに其の重々しき砲器を發射するに一の無煙火藥を以てするものなく甚しきに至りては未だ先込砲を廢棄せざるもの猶ほ一隻あり吾人の砲器は性質と功力と兩ながら遙かに佛國のに劣れり吾人の北方艦隊には石炭船なく修覆船なく十分の巡洋艦なく其の速度も亦た佛國に數等を輸するものあり又た海峽艦隊の凡べて近世式によるは何人も之を知れども當今絕へて一隻の巡洋艦を有せざるなり此れと地中海艦隊ともに木造の大部分を保存せる戰艦の多きに居るは事實なり嘗て西班牙人は速に這の部分を除去せざりしが故に兵火のために戰艦三隻を失ひしが是れ皆な英國の築造に係る者なりき而して火に耐へざること「インファンタ、アリヤ、テレサ」號と一般なるもの今日猶ほ甚だ多し支那近海に在ても吾人の艦隊は寬に露國に拮抗すること能はざるなり

吾人は又た痛く補助巡洋艦の不足を感ず獨逸は近頃二隻を完成し更に三隻の築造中にして其の速度の大なること英艦の一も及ばざる所と稱す此等の獨艦は商船を破壞するに殊大の功力を現はすへく吾人は今絕

へて之れを捕獲すへき者を有せざるなりと
最後にウヰルソン氏は厲聲一番して曰く
老朽用に堪へさる船舶を含有することが吾が英國艦隊の如く夥多なるはなし是れ事實の毫も爭ふべからざるものなり甲鉄艦の三十乃至四十年を經且つ戰時に當り著大の價値あるかの如く依然として舊式の先込砲を保存するもの果して他國の艦隊に之を見ることを得へきや近日歸來せる英艦五十三隻中無功力なるもの十六或は七に上ること市井の民安んぞ之に想ひ及ばんや請ふ吾人をして是等無用の長物を一掃に付せしめよ廣くは吾人の地位の何の邊にあるかを知了するに幾からんと
倫敦『アウトルック』は異樣の意見を述べて曰く
樞要の問題といふべきは吾人が十分なる艦隊を有するや否やに在らずして材器ある一指令官其の人を有するや否やにあり如何ばかり完備せる艦隊を提ぐるも其の指令官にして無能任に適せざらば則ち能く爲すなかるべし彼れの强大なるは適々以て此の薄弱なるを致すに足るのみ兩者地を易ふるも亦た然るは徃時ネルソンの明證せし所なりと
『アウトルック』は軍事上より視て新聞紙の最も愛國的なるものにして佛國砲器を英國に優れりとは思惟せず却て佛國軍艦の其の「砲器多きに失せる」を示摘せり是れ英人が嘗て米國及び獨逸軍艦に與へたると同一の評語たるは猶ほ人の記臆に存すへし
佛獨露三國の海軍技師は常に英國艦數の他の上に在るを口實とし以て海軍擴張の認可を得んことを求むれども英國艦隊は今や列國の爲めに鼎の輕重を云々せらるゝの命運に陷ゐり「ハーカリース」、「サルタン」及び「ネルソン」、號の如き十年以來海軍技師輩の好笑柄となり了はれり『セントピータアスブルグ新聞』も他の大陸新聞と齊しく英國が其の戰艦を操縱するに足るへき十分の兵員を有せざるを斷言せり是れ英國新聞の亦た屢々論辯して餘力を遺さゞる所なり倫敦『スペクテートル』曰く吾が同胞をして諸外人と同じく英國海軍の眞相を認識せしめんは實に當今最善の務なりと

◉歐米諸國の炭況

輓近世界鐵工業の進歩駸々乎として殆んど其の底止する所を知らざるが如きは職として列國が競うて各自の海軍力を强盛にせんことを努むるに由るは復た言ふを須ゐざるなり是に於てか石炭の需要も隨て亦た巨大なるを致せるは必然の數なり南阿戰爭の端を開くや英國が石炭の必要を感するの切なるは古來其の比例を見ざる所にして諸外國の注文も一々之に應せざるの道なく遂に合衆國をして輕視すべからざる一競爭者として始めて歐州の石炭市場に出現せしむるの已むを得ざるに至れり獨逸の製造家は先に同國よりルール及びウッペル地方に多額の供給炭を仕入るべき特約を結びしが其の消費する所每月五万噸に上るべしと稱せらる事情此の如くなるを以て一時石炭の缺乏が世界全國に及ぼすべき影響の頗る容易ならざることと次文を參看すれば自ら明なるべし
三十年間に於ける石炭產額の增加左の如し

	一八六九より 一、〇〇〇噸	一八九九に至る 一、〇〇〇噸
英國	一〇二、九四八	二二〇、〇〇〇
合衆國	二八、二五八	二〇五、〇〇〇
獨逸	二五、七〇四	一三〇、〇〇〇
佛國	一三、三三〇	三五、〇〇〇
白耳義	一二、二九八	二四、〇〇〇
墺太利	三、六〇〇	一五、〇〇〇

露　國	五一〇	一三、五〇〇
英國殖民地	七五〇	一五、〇〇〇
日本其他	五〇〇	六、〇〇〇
合計	一八七、八九八	六六三、五〇〇

英國の石炭輸出は現に五千万噸にして將來恐くは六千万に上るならんとされどこれその極限なるが如し而るに需要は更に大なり鋼鉄の需要を生ぜることと最も夥しきは殊に之に起因せずんばあらず今や世界到る處石炭の價格ば十より百パーセントに騰れり滊車滊船及び諸工業場より普通屋舍に至るまで石炭を使用ずるの盛なる今日の如きなきは復た呶々を待たざれども別に油其の他の燃料五六万噸を消費するも猶ほ不足を告ぐる所あるは豈に驚くべからざらむや。

獨逸技師フレッヒ氏曰く

英國は前途多世紀に亘りて十分の產額を有し獨逸は廉價を以て供給を英國及び墺太利に仰ぐことを得るが故に殆んど未だ其產炭地に着手せず合衆國も數百世間總て其の要する所を辨ずべく支那及び露國も幾千年を經るも尙ほよく供給するに足るべき石炭を產出すべしと

されば材料其の者の鈌乏に基因する石炭の拂底を來すが如きことは万々之れなかるべし

英國獨逸墺太利及び佛國に在ては米國に於けるが如く同盟罷業を過止するに兵力を以てすれば世の物議を招くこと必せり之れに加ふるに此等の諸邦にては正當に國外輸出の利率の節減することも其の鉄道制度の非認する所たり歐州に於ける石炭拂底の原因を繹ぬるに主として同盟罷業の抑制に失敗せるにあり『第十九世紀』の一記者は左の如き事實を擧げて曰く

ナタル及びケープ、コロニーの坑夫は英國の召集に應じて軍に從へり此れとボーア人が久しく英領炭坑を占有し後ち之れを破壞せりとの兩事實は影響を市場に及ぼすものありき英國坑夫は短時間の勞働を以て(其の爲す所隨て小なるや否やは疑ふべけれども)高賃銀を受け居れり而して英國炭坑の往日に劣るは爭ふべからざる事實なり獨逸は現に石炭の拂底に苦しみ坑夫の勞働時間を縮め其の賃銀を貴くしたるも產額益々減少するの傾向あり墺太利にては先きに坑夫五万人の同盟罷業を誘起せしことありき南部佛蘭西にては坑業家能く外國石炭の輸入を防ぎたり云々

●極東に於ける日露兩國

多年日本に滯在せる英人ゼーチス、マルドッチ氏は『北米評論』誌上に露國近頃の行動を論じて其の島帝國及びそが極東に於ける地位に關すること鮮からずとし又た露國が孜々として旅順口の堡砦を固くすることを勉め過去二年間に巨額の糧食と軍用品とを同港に送遣せるを注視せり如何にも旅順口は將來露國海軍の最も形勝の地たらんとするものゝ如し氏は更に詳說して曰く

何れの時季に自由に且つ容易に外洋に出帆するを得べきは唯だ旅順口よりするあるのみ這般の事情は自ら吾人をして何の故に露國がかく大に其の太平洋艦隊を擴張せんとするかを了解せむ現今日本と相對峙して同艦隊は極めて薄弱なり其の三隻の軍艦も到底富士矢島敷島諸艦の敵に非ざるなり日本軍艦の速度十八乃至十九ノットなるに反して一万〇九百六十噸の「ペトロパヴロヴスク」號及び一万〇二百噸の「ナパリン」號は孰れも僅かに十六ノットのみ「サツソイ、ベリキー」號の如きも亦たその上に出でず一等巡洋艦に在ては常磐淺間二艦は十分に「ロシア」及び「ルリック」號と相拮抗するに足り二等巡洋艦及び更に小

噸數の戰艦に在ては日本の露國を拔くこと啻に數十等のみならざるなりされど露國が將さに別に軍艦八隻と一等巡洋艦六隻とを極東に派遣せんとするの報道にして若し虛傳に非ざれば其の兵力爾後復た日本の後に落ちざるべし

露國は極東に於ける其の兵力の劣れるを補はんが爲めに翹首してシベリヤ鐵道の全通を遲つものに非ず一千八百九十四年より八年に至るまでに同國は義勇艦隊によりて凡そ五千八千の兵員を東送し歸國せしものは二万人に過ぎず且つ近來大に派遣の數を增加し今や露兵の東部シベリヤ及びマンチユリアに屯するもの無慮十一万と號す之に加ふるに鐵道布設工事のため露國工夫のマンチユリヤに移住するもの亦た陸續として斷えず該工事は日に着々其の步を進め旅順口は既にミユークデンと聯絡せられ開通哩數五千を越えたりこれよりチンガン及びクライト、アモン山脈を攀ぢて隧道を通ずるの艱難を經一千九百二年にして工事全く功を竣ふべし是に由りてこれを觀れば露國が一時跡を朝鮮に拂うて日本と相軋轢するを避けしは行動の最も巧なるものと謂ふべし

露國が近來再び活動を鷄林に試みつゝあるは世評の喧しき所なれどもマルドツチ氏は左程重きを之れに置かず而して日本を以て其の地位を同半島に保持せんことを決したる者とせり氏は曰く

されど一の確として動かすべからざるものあり何ぞや日本現內閣が戰を欲せざるは明かなれども左りとて默々として「ニッシ、ローゼン」記錄條件の荷も破毀せらるゝを坐視するものに非ざること是れなり該記錄は日本が經濟と工業との兩方面に於て朝鮮を征略すべき一篇の准許狀なり晩近日出國が同半島にこの目的を遂げ且つ其の商權の擴作を圖らんとする活氣の頗る顯著なるは恰も馬關條約によりて支那に得たる商業上の利益を多く度視外すると相反ぜり自由に朝鮮に於ける其の正當の權利を發展し「ニッシ、ローゼン」記錄の認可せらるゝ間日本は應さに滿足するなるべし日本人は槪して感情に激すること最も烈しきを常とすれども其の外交の衝に當るや由來冷靜沈重一事荷もせざる底の態度を執れり且つ今後と雖も十二分の道理あるにあらざれば輕々しく難を外國と構ふことを求めざるべしと

●今世紀の末葉に於ける國民教育

博士ニコラス、マレー、バトラー氏シカゴ國民教育會監督部の集會に臨席し今世紀の末尾に於ける教育の情勢を摘論し一々肯綮を穿ちたり氏は曰く吾人は今や兩樣の勢力の到る處として活動せざるなきを見るなり何ぞや曰く進化及び個人主義是なり此等の二主義は相調和して毫も相抵觸することなく以て個人の修養を促かし其の力量を增さんことを勉め同時に個人をして人道の利害と普通生活に密接せしめんとせり方今最も廣く行はるゝ撰擧制度は實に個人主義の一結果に外ならず且つあらゆる程度の諸學校が須らく相待ちて爲すあるべきこと及び諸種の學問が皆な同等に認められんことを世の主唱して止まざるはやがて教育界に於ける進化主義の現存を明證するものと謂ふべし

世界屈指の國々が教育の爲めに巨萬の財を糜するに吝ならざるは全然國政的立脚地より觀て如何に重きを之れに置くかを察するに足るべし近刊の『アウトルツク』に揭けたるバトラー氏の所言を引用せんに

國政的立場より視且つ斯かく形づくれる教育を以て必須にして瞬時も缺くべからざるものとするは各文明國民の揆を同くする所なり現世紀中に教育なるものが明かに國家の一職分となれるは施與としてにあら

ずして義務としてにあり是に於てか趨勢の然らしむる所教育公費も今や巨大なるを致すに至れり合衆國にありては普通學校のみに投ずるもの毎年二億万弗に上り一人に付き二弗六七に當れり是れ一千八百九十年の調査に係るインヂアナ又はミシガン全州の富の凡そ十分の一を占むるものなり英國及び愛蘭にありては總額八千八百万弗を踰え一人二弗二〇の割合なり佛國は約そ五千八百万弗にして一人一弗六〇の割合なり獨逸は一億〇八百万弗餘にして一人二弗强の割合なりされば世界の先導者たる此等の四大國民が人口總數殆んど二億一千万を以て年々教育の爲めに費す所四億五千万弗を越ゆること頗る多きを見るべし而して合衆國が年々普通學校に投ずる資金は英佛獨の三國が其の有力なる海軍に費す所と正に相匹敵し佛獨二國が其の强大なる陸軍に費つ所の五分の四に垂んとし一千八百八十年に於ける合衆國政府の通常支出の上に出づること實に數百万なり因て知る一千八百七十年以降殆んど三倍の増加をなし三十年間に人口一に付き一弗七五より二弗六七に學生一人に付き十五弗二〇より十八弗八六に上れることを

海外雜纂

◎南阿事變に關するモムゼン及びマクス、ミュラー兩氏の論戰

英杜戰爭の南阿に開始せらるゝや世の之を是非褒貶するもの頗る多きも中に就き最も人の耳目を聳動せるを有名なる獨逸の老史家テオドール、モムゼン氏と牛津大學教授にして科學者たるマクス、ミュラー氏との論戰なりとすミュラー博士も血統上獨逸人なること其の名の示すが如く未だ嘗て英の邪を邪とし獨の正を正とするを憚からざる人なり今博士は杜國を非毀して戰爭の當さる然るべきを辯疏して倦まず獨逸新聞紙の英國に對する論難攻擊は博士の最も懊惱する所にして遂に書を伯林の『獨逸評論』に寄せ以て其の意見を獨人に公にせしが議論寧ろ激越に趨るの嫌なきにあらず英國の擧動を誹譏して已まざるモムセン博士はすかさず返書を同誌に揭げマ氏が獨人の偏見を矯めんとするの誠意は之を嘉すれども氏の論理と歷史と兩つながらその謬れるを攻擊し一歩を進めてブライス其他の英國錚々の士の意見を引證してマ氏は英國人自身よりも更に英國的に失せりと斷言せり

ミュラー博士の說に曰く

英國政府及び人民の行動は全躰より觀て最もその當を得たりといふの外なし英國の素と戰を欲せざりしこと嘗てそれが準備をなさゞりしを推せば昭乎として火を覩るが如し英國は飽くまで平和を期望せしなり夫れ開戰の宣言をなせしものは誰ぞや劈頭第一英の領土を侵せしものは誰ぞや從來の保有權を維持せんがために英國は當さに叩頭平伏以て和議を容るべきか面のあたりボーア人の恣に奴隸を驅役し戰を土蕃と搆へウイトランド人を虐ぐること畜類に劣るを覩ながら空しく彼の爲すに任すべきか英人安んぞ唯々として之を默過するものならんや其の逭殺の擧に出づるは固より怪むに足らざるなり

英國のトランスバール保護權は之を正當と見做すべきか然り此れ一千八百十四年ヒンナ會議の約定に得たる所なり爾時南阿殖民地は始めて國際條約の治下に歸し英國の南阿保護權は歐洲列國の是認する所となりき然るに奴隸問題に關する一場の紛議は破裂して一千八百三十六年

ボーア人の叛謀となりたる共和國玆に建立せられたり而して英國は同地の移住人を己れの臣民と見なし兵力を以て新共和國を合併せしは毫も越權の施置に非らず降て一千八百四十八年英國は更にピンナの決議に據りてオレンヂ全州を占領し其の配下に歸せし地赤道を下ること二十五度の邊に及びまた四年にしてサンド、クリハー會議の結果として英國はバールの那方に於ける內政に干涉するの權利を失ひしも其の保護權の舊に仍りて之を保持せり此れ亦たオレンヂ自由國にも當てはむることを得べく諸殖民地は可成寬大なる自由を許されたれど一國民としての獨立は未だしなりき

一千八百十一年及び一千八百八十四年の兩條約によりボーア人の得る所頗る大なるものありしも前者は唯之れに內面的獨立を與へしに過ぎず英國の專治權は渝はる所なく爾後專治權なる名目は之を徹したれども猶陰然その實權を握れること往日の如くなりき而してボーア人は一時之れに甘んぜしも一千八百八十四年後忽ち件の條約に違反して大に其の領分を擴めんとし剩さへ同條約の制限を無効に歸せしめんことを謀れり是に於てか新移住者を待つこと悖逆殆んど言語に絕し外國より獲たる財貨は悉く之を戰鬪準原に使用しウイトランド人に迫て叛旗を擧げしめたり彼のゼームソンの亂の如きものすら主としてプレトリア政府の無道に原かずんばあらず

斯かゝる反謀を企圖し殊に傭兵を使役するに至ては何人も之を辯護せんとするものなかるべし然れども平靜に且つ長時日の間に爲されたるトランスバール反逆及びその戰鬪準備に就き一考すれば少くともゼームソン變亂の何たりやを解すべし世人皆な英政府が此の愚擧に連累せりと思惟すれども苟もサリスベリー氏を知るものは其の無稽の虛說に過ぎざるを了すべしチエムバーレン氏の荒も久しからずして之を霽ぐの機到るべきなり人或は英國を目して貪婪飽くなしとなせども一たび事實の眞相を看破せば必ず其の非を悟らん英國は現に其の欲望よりも寧ろ多分の邦土を領せり何を苦んでか更に他を略せんことを試みんやされども英國は重大なる責任を南阿に負へり戰はずして退くこと能はざるなり假りに英人竟に敗績すとせんも權利は兵力よりも重く且つ尙ぶべし列國に嫉視せられ群邦に猜忌せらるゝも彼れは將さに毅然として天下に聲言せんとす敵多ければ譽高しと

モムセン博士は曰く人動もすれば獨逸は佛國に雷同せりといへども是れ論ずるに足らず獨逸の英を抑へて杜を揚ぐるは其の是非正邪の觀念に出づるに非ずして何ぞやと博士は南阿事變を以て兩様の文明の戰とし第十六世紀と第二十世紀との爭としミユラー博士の見解の甚だ眞面目ならざるを駁擊せり又極めて森嚴なる調子を以て英國の失態を責めて曰く

他國民を支配するは抑も業の美なるものにあらず且つ之を執るに事々物々必ずしも常に其の法を得るにあらず然りと雖目下の場合に於て英國の施措は決して恕すべからず其の正道を無視し文明の最高等法廷——滿天下仁人義士の輿論———の爲めに有罪を宣告せらるゝの擧はこれを責むるに一歩も假借すべからず(下畧)

博士は更に詳論して曰く英國はボーア人を支配するに嘗て專制權を以てせずと主張すれども是れ遁辭のみ獨人孰れか之れに瞞まされん夫れ蕞爾たるボーア共和國の海を環らし他と海を隔て到底眞成の獨立を得ること能はざるはまた疑ふべからず而るに英國は自ら進で之に書面的獨立の精神を鼓吹し之れと條約を訂し其の內治に容喙せざらんことを誓へりされば宜しく常に其の盟約を確守すべきは强國としての義務なり然るに今英國の政畧を注視するに徹頭徹尾是れ孤弱援なき者を酷待するの好模型なり其の一擧一動は多く譎詐なりといはんよりは寧ろ狂愚なりといふの當

たるに若かざるなりミユラー博士の觀る所は事實の皮相のみウヰイトランド人が叛逆を强ゐられたりとは博士の唱ふる所なれどもゼームス、ブライス之を駁して曰く彼の特權問題は自然に落着せしなるべく且つウヰイトランド人の生命財產は十分に其の安全を保持し一物の之れに危害を加ふることなかりき故に博士の說は謬れりと又たサリスベリー氏の毫も間然すべきものなきは勿論なりと雖ゼームソンを目して博士の如く唯一箇の盜賊に過ぎずとするは英人すら多く之を肯ぜざるべし彼の事件の爾後の處置を考察せし者は殊に博士の言の欺けるを知るべし博士はチエムバレーンを庇護すること頗る力むといへども是れ亦た信ずるに足らず英國政府たるもの速かに有罪者を處罰して是非曲直を天下に明かにする所なかるべからずと

モンゼン博士は結論して曰く戰を欲せしは英國人民に非ずして英國政府なりしことは余も亦た認知する所なり英國の準備を缺ぎしは戰爭にあらずして其の急激と暴逆とにありボーア人の戰鬪準備をなせしことは如何にも疑ふべからざれども是れ避くべからざりしなり彼等は英國政府が財政上の利害關係より必ず已れに危難を加ふべきことを先見せしなり孰れか復た敢へて彼等を非難するの理あらんや之を要するに英國はその赫々たる靑史の上に一大汚點を印したりと謂ふべしと

●印度の饑饉

古來饑饉の印度人民の最大厄難たるは夙に世の知る所なれども其の殘害を逞しくすること本年の如きは蓋し稀なるべし吾人は左に去月發刊の米國『評論の評論』より其の慘狀の一般を譯述すべし

今や死に瀕するもの四千万に上り之に加ふるに度の大小こそあれ常食の不足に困むもの二千万を越えたり合衆國と略ぼ同數の生民が一命を支ふるの食を獲ず老若男女溝壑に轉死するもの日に數千に及ぶとは米人の能く想像する能はざる所なるべしされど是れ中央及び西部印度に於ける今日の實況なり荒漠たる三十万方哩の地一粒の錢を以て米穀を他に求むべきなく土人皆な果實雜草を食とし甚しきは最愛の兒女を賣て僅に飢を醫するものあり目下政府の救助勞役に服するもの六百万に垂んとし且つその數每周二十万の割合を以て增加しつゝあれども猶ほ他に衰耗の餘步して其の場所に至るに及ばずして空しく路傍に斃るゝもの累々として擧げて數ふ可らず若し夫れ乾燥殊に甚しき地に於けるが如く牧牛の餓死するもの續々絕へざるは實に百尺の竿頭一步を進むるものなり官報に據れば或る地方にては其斃れしもの無慮一百万に逹せり印度農業の最も緊要にして一日も缺ぐべからざるものは牧牛なり然るに今此の如し是れ收穫の失敗よりも災禍の寧ろ更に大なるものなり印度國務秘書官ジヨーヂ、ハミルトン氏の頃日英國衆議院に報道する所によれば氣候の順和自今例へ數季に亘るとせんも中央印度人がその生活の常態を挽回すべきは凡そ六ケ年の後に在るべしと一千八百九十七年及び七十七年(死者六百万)に比すれば今回の饑饉の如きは遙に前者に軼ぎ將さに後者に及ばんとするの傾ありといふも不可なかるべし

印度は面積合衆國の半に足らざるも人口はその四倍にして大約三億万なり彼等は相對的に一も製造業の食を求むべきものを有せざるが故に專ら稼穡を以て其の生計を營まざるべからず地方によれば一方哩一千の人口を容るゝ處あれどもほかに東漂西泊一定の住所なく豐穰の年にありてすら殆んど名狀すべからざる生活をなすものもまた幾百万なるを知らず而して平年に在ては一般に眞に全國人を養ふに必要なるよりは稍多分の食料を得べしされど印度收穫の運命を決すべきものはモンスーンなり初夏の西南風の常に雨を帶べるものを濕モンスーンといひ冬期の東北風を乾

モンスーンといふ此等の定季雨にして若しその至ること晩きか或は量少なければ北部地方の冬春雨季に於ける大麥少麥及び豆類と南部の米及び稷との發育を妨ぐること尠少にあらざるなりモンスーン全く至らざれば其の害更に大なるべく或は至り或は至らず以て久しきに亘れば其の害最も大なるべし今年の饑饉は即ち第三者に由るなり最も古く記錄に存せるものは一千七百七十年の饑饉にして爾後殆んど十年毎に一回の出來を見ざることなし英國政府は九年毎に凡そ二回の旱魃を十一二年毎に一回の饑饉を一世紀毎に一回の現今の如き大饑饉を豫期せり

英國は此等の饑民を救濟し其をして糊口の道に就かしむるを以て其の政府事業として之を實施せんがため巨万の政府資本を積みて饑饉條例なるものを設けて之を處するの法を定め其の制度最も完備せり且つクルソンの如き義俠の士相繼て輩出し夙夜奔走して窮民の爲めに普く金を文明世界に醵しつゝあり然れども燎原の火を滅するに一勺の水を以てすべからず全然糧食の缺乏を訴ふるの地猶は數千方哩に及べるも在留英人の力獨り之を如何ともする能はざるは惟むに足らざるなり加ふるに土着官吏は大抵私利を計るに汲々たるもののみなれば還穀の救濟事業を作するは須らく之れを白人の手に委せざるべからず又階級的及び宗教的偏見と懶惰の餘風とにより敢て自活の策に出でず坐して死を待つは是れ印度饑民の習なり偶々數百哩の行程を冒して政府の救助を受けんとするも中途にして空しく斃るるもの其の大半を占めたり尤も現に政府の指命の下に道路を修め溝渠を穿ち灌漑を爲し其他諸般の勞役に就き毎日三セント許の賃銀を得以て僅に露命を繋ぐもの六百万に上れり政府は別に租稅及び義捐金よりなれる饑饉保險資本なるものを常備し以て虛弱にして勞働に堪えざる者に食料を給與する費用を辨ぜり米國にてはカンサス州先づ其の救濟事業に着手し穀類五千噸を漁船キトー號に搭載して去る五月十日航行の途に上れり次で加特利教會は華盛頓府下の有力者百名を委員に撰任して遍く救濟資金を國内に募集し其他の諸寺院も之に倣ふもの多し三セントを得れば印度人一日の生を保つべしとされば米國より寄送する金額のみにても猶は能く數百万人の急を救ふべきなり

●女子創造に關する印度の一傳說

米人カーチル、インガーソル氏嘗て『モーゼスの誤謬』と題する一場の講をなし東洋太古の人類創造傳說を述べ其の原人が女性を待つの溫柔優和なりしは聖書の首章ゼチシスの創造說に勝さること數十なりと論斷せり然れども下文の如き創造說は載せて頃日の發見に係る一梵書中にあり氏果して此の說に關して亦同樣の論法を用ふるや否や是れ吾人の疑ふ所なり該書は實に稀世の珍品にして命けて『「時」といふ太洋の澎湃』といひ末節を『夕日に彩どれる月神の指に就きて』と題し英人ベーン氏近ごろ下文をその中より譯出せり曰く

「時」始まるやトワシトリ(印度神話のバルカンと稱すべきもの)創めて世界を作れりされど彼れ女子を造らんとするに當り悉く其の材料を男子の創造に消費して復た一箇の固形元素を餘さゞるを知り昏惑苦慮之を久しくせしが遂に次に列擧せる如き諸多の材料を蒐め得たり曰く月の圓滿、蛇蟲の迂曲、蔓草の纏繞、草蕪の翻飄、薔薇の纖麗、花の色澤と葉の輕便、鹿兒の眼眸、日光の美、霧霞の淚、兎の怯懦と風の飄忽、孔雀の浮薄、燕の喉下に生ぜる細毛の柔軟、金剛石の堅牢、蜜の甘味虎の殘暴火の熱、雪の冷、鸚の喃々及び鳩の嚶々是れなりトワシトリ此等の諸物を綜合して一女子を作爲し尋て之を以て男子に贈與したり居ること八日

にして其人來てトヲシトリに謂て曰く

我が主よ主の賜へる物は我が生命を荼毒するものなり何事にも不平の言をなし未だ曾て一刻も默せず我をして空しく時を移せしむ而して渠れ常に病めり

トヲシトリ乃ち其の女を取戻したり然るに復た八日にして人再び來て曰く

主よ美きの物を返してよりこのかた我が生殊に孤獨なるを覺ゆ渠れ我が面前に歌舞し我に秋波を送り終に我を抱きしこと頃刻も忘るること能はず

トヲシトリ因てまた女を以て之に附與せしに僅かに三日にして人三たび來て訴て曰く

女我を樂ましむるよりは我を惱ますこと更に大なるは其の何の所たるを解せず願はくは我をしてこの苦痛を脱せしめよ

是に於てトヲシトリ呼で曰く

汝の意のまゝにせよ

人曰く

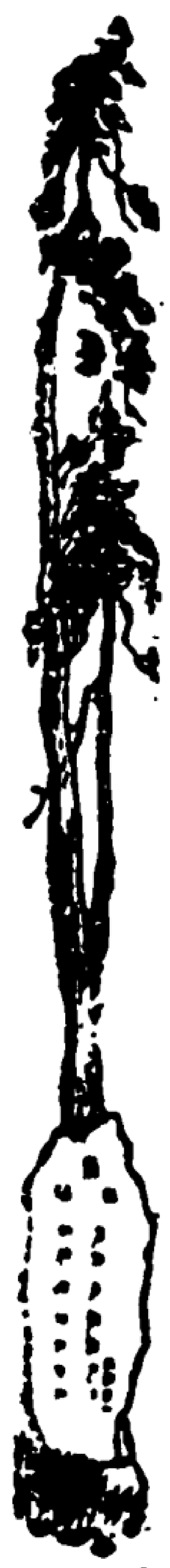
我れ女と同しく棲むこと能はず

トヲシトリ應して曰く

汝女なくして活くること能はず

人憂愁して措かず嘆して曰く

噫我女あるも女なきも竟に活くること能はずと



詩

醉中題壁　　高橋鐵骨

書劍十年遊四方。洛陽客舍夢茫茫。看雲掩卷憶諸弟。
對月倚欄望故鄉。狷介自憐安石志。頑愚未學接輿狂。
鴨東痛飮悲歌夜。却聽啼鵑恨轉長。

天王山頭吊十七烈士墓有感慨然而賦

荒草埋幽逕。墓畔起松風。憶昔艱虞日。投筆起英雄。
鋭氣空磅礴。欲奏竹帛功。天地皆否塞。鮮血迸地紅。
左方桂川走。右方殿水通。滿目好景色。却入感慨中。
憑吊恨無限。咏歌鬱蒼穹。方今乏俊傑。向誰語微衷。
綠樹幽鵑哭。憂心轉忉忡。

偶成

少壯誤懷時局憂。幽窓夜夜夢金州。賦詩半日拚清興。

按劍中宵憶遠遊。渤海灣邊怪風吼。天津橋上杜鵑愁。慨然把酒靑燈下。意氣軒昂犯斗牛。

疊　韵

時局艱難使我憂。何人崛起護神州。長江風月消深恨。大陸山川適壯遊。愁見朔陲雲色惡。悲聞西塞鼓聲愁。中宵倚劍觀天象。白氣如虹貫斗牛。

遣　興

壯士幾千眠鐵戈。北溟惡浪捲風沙。天涯遙想故人夢。禹域風雲又奈何。

遊清閑寺

欝欝竹林幽逕通。千年古刹颯松風。吟筇來訪清閑寺。方在鳥聲新綠中。

山倫村雜詠

止舟陳人

麴氣滿村薰。杜氏相成隣。芳辣欺丹釀。高豐豈等倫。法主賜佳句。花開酒國春。酒大佳◎高豐謂高松豐田兩村皆出酒第六句用常盤井法主所賜大矢知氏詩句

鋤盡荒蕪地。新茶綠作叢。采采百千筐。焙法菟裘同。一椀渴時喫。兩腋生清風。茶大佳

濺濺晁溪水。寒聲繞晴沙。輕柔而甘冷。明徹有光華。可以釀吾酒。可以烹吾茶。水大佳

八不精盧八首 錄五首

水寒魚不生。沙白苔微處。山僧寓舍邇。時洗禪衣去。水不太深

疎竹遶幽砌。清風有雪聲。時將舊枝洗。暮月惠然明。竹不太密

竹外二三本。松間四五枝。栽花何要密。蕭疎趣自奇。花不太繁

有客時相過。新句袖中携。芭蕉漸展葉。大筆任君題。客不太俗

槐陰轉幽徑。閑院漏聲遲。終日焚香讀。寒巖一部詩。主不太忙

天王山

孤峰突兀聳春晴。百里風煙脚底明。兩水合流通攝海。大郊遙拆接京城。縞軍唱義覇圖就。烈士成仁皇運亨。元治之亂眞木保臣等十七士燒營自殺其墓在山舊跡新蹤俱一夢。鼓聲繞麓萬蛙鳴。巓故第六及之

嚴　島

老禿威氛適感神。寶區焜耀海之濱。攀花猴隊嬌迎客。

蹴艸鹿群馴近人。寃恨千年平鬼餒。靈供廿軸妙經新。
賽祠候得晨潮進、八百廻廊歩碧淪。（祠庫藏金泥法華經廿八軸係平氏闔族所寫納）
一片東山乃祖墳。

夜歸

梅原大塊

婆娑扶醉夜深歸。樹色蒼蒼月照衣。滿陌黄塵風不動。
一聲杜宇掠人飛。

夜座

雨氣逼燈燈不明。繙將古卷過閑更。箇中自是警眠者。
點點黄標標地聲。

偶吟

江湖踏悉幾風波、書剣悔吾就笠簑。故苑風光猶歷歷。
四村煙雨挿秧歌。
漠々風塵一剣愁。飄零尚滯帝王州。借問南原舊耕侶。
挿了新秧到幾疇。

夢後

雲濤萬里望茫茫。跨去鯤魚度大洋。夢覺依然身在是。
月明如水滿虚堂。

寄姪春江在京都學林（先人墳墓在大谷句中故及）

大小金經五千卷。精研知爾幾辛勤。講餘勿忘掃苔事。

俳句

四方太撰

鮓

短夜や鮓桶洗ふ裏の川　とをる
四辻の柳の下や屋臺鮓　酔石
したゝかに鉢に盛りけり鮎の鮓　嚴子
鮓折と惠比須ビールを求めけり　吐霓
鮒鮓や障子開けは琵琶の湖　窮恨
鮓喰うて腹の痛や明易き　耕村
小女郎の鮓を貪る夜更哉　呼々
隣から貰ひし鮓のなれ加減　四五六
鮓桶を洗うて居るや雲の峯　六郎
鮒鮓の骨やゝ硬き口あたり　仝
鮓押して餘れる鮎を炙りけり　北斗星
洗ひ上けて笊に並べぬ鮓の魚　仝

夜半すぎて鮓賣りにくる揚屋町　啞子
凉しさや鮓屋の店の竹格子　仝
鮓の飯酢のきゝすぎし悔もあり　麥圃
手燭して蓋とる鮓のなれ加減　仝
此角にいつも出て居る鮓屋哉　稻青
鮓店の娘此頃見えずなり　仝
鮓押して鮓の句百句物しけり　柳家
きゝすぎし鮓の山葵を賞しけり　仝
鮓を押す朝の曇りや雨もよひ　江南
蓼の葉や洗ひ上けたる鮓の魚　仝
灯ともして探るや鮓の魚乏し　仝
鮓米を笊に盛りけり五合程　洋々
鮓店に鮓の殘りや夕日さす　仝
鮓桶を漬物桶に重ねけり　仝
なれもあへぬ鮓をめつるや酒の醉　古瓢
鮓桶の蓋のすき間や笹の色　仝
よき酒もすこし注くや鮓の桶　仝
鮓桶も漬物桶も洗ひけり　鬪堂

鮎を得て鮓を押さまく思ひけり　仝
凉しさの月や鮓屋の樓の上　仝
なれ過し鰯の鮓や宵の酒　はる子
すし飯の熱きを廣け青簾　仝
葛水や鮓も添へたる盆の上　仝
すし飯の冷たきまてに白き哉　天風
鮓くうて冷たき酒に醉心地　仝
すしを賣る若葉月夜となりにけり　仝
葉柳のかけの茶店や鮓を賣る　琶橋
笹の葉に鮓の香殘る小皿哉　仝
麥苅りし村の祭や稻荷ずし　仝
侘しさの一人鮓押す男哉　一村
橋際の柳の茶屋や鮎の鮓　仝
橋守の更けて鮓押す灯哉　仝
鮓の石の碌々として我老ひぬ　水屋
鮎鮓の其鮓飯を好みけり　仝
鮓の石のころ〳〵として落付かず　仝
鮒鮓の膳に上るや精進落　默々庵

蓼の葉の青きを賞す鮓の飯　仝
晝過ぎを鮓の石とるなれ加減　仝
鮓押すや曇りたる日の三時過　北迁
一夜鮓隣の人に分ちける　仝
ともし火や鮓の魚撰る臺所　仝
鮓飯や夫が好みの辛き物　天眼坊
心ゆく大きな石やすしを押す　仝
笹折に鮓を並べて詰めにけり　仝
なれすぎし鮓を貪る醉もあり　仝
早鮓の既になれたる宵の内　一堂
待宵のはかなき程や一夜鮓　仝
鮒鮓の殘り少なや桶の中　仝
飯鮓を一つ摘んで食ひけり　仝
鮓桶の重しの石を洗ひけり　孫悟空
撰りとりてよく揃へたり鮓の魚　仝
雨もりて鮓桶うつす夜半哉　仝
鮓桶に雨水たまる砌かな　仝

次號　秋涼し（八月五日まで）
次々號　小鳥渡（九月五日まで）

各題十句を限る

○淸渾來信

水之所以爲水山之所以爲山箇は是れ唐人の囈語なれども其囈語すら語り得ぬ獸的人間共が天下の勝地を占領して天が我に賜ふが如く心得横柄顏して居るに至ては如何に慈悲甚重（呵呵）の主人も鐵錫の頭にて一擊を試みたき位なり是れ私の爲ならず一切衆生の爲なり腦痛を醫せん爲に來れども中中に却て疳が起り餘計に痛を增す早早歸錫せんさす

○四五日の中に歸錫

犬吠灣即事書寄龍北老兄

芒鞋鐵錫此雲遊、　身在銚江江畵頭、　淸渾不學淸狂子、　復向人前說海防、

七月十六日　千葉銚江にて　大子吼林主人

評論

政治

●自由黨の失態

自由黨總務委員は五月三十一日を以て山縣首相と交渉を開きたり。之に對する首相の返答は如何、此の返答の結果は如何。是れ吾人が既に前號の紙上に報ぜし所なり。

首相は見事にも自由黨を翻弄し去れり。

彼は辭職に意あるか如く、意なきか如く、極めて曖昧模稜の言を以て總務委員に答へたり。彼れ迂愚なる怯懦なる總務委員は、直に評議員會を開きて交渉の結果を報告して曰く、首相は後任者だに在らば必ず辭職すべしと明言せりと。

既にして狡猾なる山縣は御用紙をして所謂會見顛末なるものを公にせしめて曰く、山縣は曾て辭職を明言せしことなしと。而して自由黨は之に對して斷乎たる抗議を試むる能はざりき。嗟自由黨は全く山縣に翻弄せられ了りぬ。何たる失態ぞや。

●所謂提携

嗚呼提携、政黨が提携を口實として藩閥內閣に盲從したること果して幾たびぞ。

自由黨が當初山縣內閣を援くるや、先つ提携てふ名の下に於てしたり。而かも提携以後に於ける彼黨の行動は絕對的盲從に外ならざりき。見よ、自由黨は山縣をして二たび無事に議會を通過せしめたるも、其報酬として得たる所は一も是れ無かりしに非ずや。第十三議會以後に於ては彼黨は何等の盲從料をも得ざりき。而して第十四議會以後に於ては却て文官任用分限令によりて一大打擊を被れり。故に今の政黨の所謂提携は盲從に外ならざるなり。既に是れ盲從ならば、政黨が元老內閣に蹂躙せられ、侮辱せられ、輕蔑せられて、毫も其頭を擡くる能はざる固に其所なり。

後の政黨なるもの、乞ふ自由黨今日の屈辱に鑑みて、決して元老政治家と提携する勿れ。只飽までも、己の主義綱領を標榜して、堂々として戰を藩閥內閣に挑まざるべからず。然り藩閥政治家が胄を脫し甲を解ひて政黨に降服するまでは決して之と提携すること勿れ。

●留任の大命首相に下る

自由黨が山縣に對して斷乎たる決心と勇氣とを示す能はざるや、彼は荏苒日を曠うして其の職に留まるの間に、留任の大命は端なくも(否彼が待設けたる如く)彼に下りぬ。

大命は六月十五日を以て下れり。詔に曰く、目下清國の動亂益々大ならんとするの形勢あり、汝夫れ現職に留まりて國務を處理せよと。山縣は此聖旨を奉躰して留任に決心せり。

是より先き、山縣が職を辭せんとするや、外交多難にして其任に堪へずと云ふを以て理由と爲せり。而かも大命の一たび下るや、彼は一身の進退を以て宸襟を惱まし奉るに忍びずと稱して、忽ち辭任の意を飜せり。借問す外交多難の局に當るの能力なき山縣の留任は、果して能く宸襟を安んじ奉るを得るか。山縣にして一念此に及ばゞ、豈に袞龍の御袖に隱るゝの罪極めて大なるを覺らざるを得んや。

●尾崎會見問題

進歩黨の領袖尾崎行雄は六月十八日を以て伊藤侯に靈南坂官邸に於て會見したり。此の事件は端なくも世人の耳目を聳動する一大問題となりぬ。

會見の眞相は固より明ならず。平生謹直寡默を以て稱せらるゝ尾崎は、深く此事件の眞相を秘して、何人にも之を漏さゞるなり。而かも彼が多年の政敵たる藩閥の巨魁に刺を通じたるは、豈に世人の猜疑を招くに足るなり。進歩黨が彼の會見に依りて間接に損害を被れると決して尠なからざるべし。果然黨中には物議百出し、就中舊革新派の人は尾崎の擧動を以て進歩黨の面目を毀損する者と爲し、之を除名すべしと主張せり。されど彼黨が七月九日評議員會を開き尾崎の處分を議するに及んで、過激なる除名論は終に成立せずして、尾崎問題は一に總務委員に委任することとなりぬ。想ふに、總務委員等と成るべく温和の處置に出てゝ、尾崎の自省を促さんとするの外なかるべし。而かも尾崎の決心と思慮とが今尚緘默せる彼の胸中に秘せらるゝの今日、此問題の成行は未た容易に知るべからず。若し尾崎にして眞個に伊藤と握手するの意ありとせば、彼は豈に天魔の魅入る所となりしなり。

●伊藤入黨問題

曩きに山縣が後任者だにあらば直に辭職すべしとの意を漏らせるや、自由黨總務委員は直に伊藤侯に泣付きて之を擁立せんと欲したり。而かも伊藤は久しく思はせ振りを爲して、容易に斷乎たる決答を爲さざりしが、總務委員か再三督促したる結果、彼は終に七月九日を以て總務委員を大磯に招き、入黨請求に對する一篇の返簡を交付せり。

返簡は伊藤の幕下が再三講究の餘に成りし者、其意義の曖昧模糊として毫も捕捉すべき點なく、而かも巧に自由黨を煽揚して、其感情を損せず、以て入黨を謝絶したるが如き、所謂八方美人的返答の好模範なり。

然り自由黨は實際に於て伊藤に謝絶せられたり。而かも總務委員等は猶且彼に未練を遺し、彼の後塵を趁はんと欲する者の如し。其の評議員會を開き事實を紛飾して會見始末を報告するや、滿塲一致決議して曰く「總務委員の勞を謝し尙將來我黨の希望の貫徹に勉められんとを望む」と。嗚何等の滑稽ぞ、何等の醜態ぞ。自由黨は全く血迷へ了りたるなり。

●韓京の事變

五月下旬韓廷は權榮鎭を拷問し、安駉壽を虐殺したり。安、權二人は亡命して久しく我國に止まれる者。其の歸國するや、朝鮮政府は決して危害を彼等に加へざるを我か林公使に約せり。而かも直に前約を破て安駉壽を殺したるは、是れ啻に我邦を侮辱したるのみならず、亦實に實際上の禮法を無視したる者なり。韓廷の無禮は玆に止まらず、我林公使が此事件に關して幾度か朝鮮國王に謁見を求めたるも毎々之を拒絶し、終に直接に我政府に向て、斷然林の謁見を許さずと通牒し來れり。嗚是れ何たる無禮ぞ、何たる驕慢ぞ。而かも我外務當局者の無能怯懦なる、之に對しは何等の措置する所なかりき。

既にして六月中旬林公使は英國公使の斡旋に依りて僅に韓帝に謁するを得たり。而かも韓帝が林に公言したる所は單に今回の事件の不法を悔ふと謂ふに過ぎざりき。嗚眇たる小弱國の非行を責むるに自國の力を以てする能はずして、却て他强國の周旋に依賴して、以て僅に悔悟の一言を其君主に得。我外交の萎靡せる豈怪むに足らんや。京城に於ける我邦の威信は全く地に墜ちたり、第二の安權事件は遠からずして續起せんなり。

●北清問題

五月下旬朝野の政客が正に政局展開問題に忙殺せらるゝの時義和團蜂起の報は突如として來りぬ。而かも當時に在りては何人も北清の動亂今日の如く甚しきに至るべきを想像せざりき。何ぞ圖らんや、爾來二月ならずして、北清の形勢は亂麻の如く、動もすれば支那全部の運命を玆に決するの勢を呈せんに至らんとは。

聯合軍が太沽砲臺を陷れて天津に進めるや、其軍氣甚た揮ふが如くなりしも、七月十日前後より清兵の勢漸く加り、聯合軍復び難地に陷れるが如し。此時に當りて我邦の當に爲すべき所は、斷乎として速に大兵を進むるに在るのみ。

兵は神速を尙ぶ。若し團匪と清兵との勢力未た加らざるに當て、我邦が速に大兵を出さば、戰局の困難決して此に到らざりしならん。吾人は我が交外の每々機宜を失せるを見て、轉た忸怩たらざる能はず。

若し夫れ清國の運命に至ては、聯合軍が未た北京に入る能はざるの今日に在て容易に判斷すべからざるなり。

（七月十五日稿）

經濟

●經濟時事

◎本年上半期外國貿易、之れを前年に比すれば輸出に於いて約六百七圓を增加し、輸入に於て約七千百萬圓を增加し、全計に於いて約七千七百万圓を增加す。即ち輸出九千四百九十八萬七千八百五十四圓、輸入二億五千八百十九萬六千六百六十一圓。而して輸入の輸出に超過するもの六千八百二十二萬〇九百五十三圓。

◎商品に於いて右の如き輸入超過を見る以上は金銀に於いて輸出超過を見るは餘儀なきことにして、上半期に於ける金銀の輸入高七百三十六萬千六百三十圓、輸出高三千三百三十八萬〇五百十二圓。即ち輸出の輸入に超過するもの二千六百〇一万八千八百八十二圓。

◎金銀に於いて右の如き輸出超過を見る以上は正貨準備の減少を見るも亦た餘儀なきことにして、昨年末約一億〇五百萬圓なりし正貨準備は昨今に至り七千七百萬圓臺に減縮す。而して正貨流出の勢は六月上半月に於いては多少減衰の狀を呈したるも清國事變の發生、南清地方の金融逼迫と共に其勢は再び增進し、殊に六月

末に於いては僅々數日の間に百萬圓内外の正貨流出を見るに至り、本月に入りて以來亦た十二日間に於いて流出高約三百萬圓に達せるを見る。於是乎正貨流出の防遏、正貨準備の擁護論は起る。

◎其第一策として目下問題となり居るは兌換手數料の制を設定するの一事にして、該問題は餘程進行し居るやに稱せらる。該記事の讀者の目に觸るゝ頃には既に事實となりて發表せられ居るやも知るべからず。

◎正貨流出必らずしも恐るべきにあらずと雖も、其流出激しくして兌換制度に危害に及ぼすの虞ある場合には當局者は多少配慮する所なかるべからず。然れども之れに處する自ら道あり。漫に小刀細工を弄して其流出を防止せんとす、角を矯めんと欲して却て牛を殺ろすが如きとなしと謂ふべからず。兌換手數料の制を設定するが如き蓋し其一なるべきか。

◎兌換手數料の例を設定せんか、第一に覺悟すべきは正貨と兌換券との間に夫れだけの價差を生ずることにして。正貨と兌換券との間に價差を生ずるに於いては、兌換券の相場は夫れだけ下落するものにして物品を所有するものは其財産に異同を生ずることなしと雖も兌換券を所有するものは其價差だけ損失を蒙らざるべからざることとなるべく。亦た兌換券の價格下落の結果貨物價は之れと共に騰貴することとなるべし。

◎之れによりて正貨の流出を防止することを得べくんば物價の騰貴位は忍ぶべしと雖も、正貨と兌換券との間に價差を生ぜんかグレシャは法の元則により正貨は市場より全く驅逐せらるゝに至るべく。加之、一度兌換に打歩を要することとなるに於ては、其打歩の將來益々騰貴せんことを恐れ兌換券所有者は多少の打歩は之れを忍び競ふて兌換券を請求するに至るべし。勢茲に至れば兌換手數料制の設定を兌換準備を擁護する所以にあらずして却て聯換準備を薄弱ならしむる所以にあらずや。

教育

●戰爭と教育

吾人は、戰爭と教育との關係につきて、最も新しき經驗を有するものなり。夫の明治廿七八年戰爭が、我國の教育に及ぼせる影響は何如なりしか、吾人、今これを繰返すの要を認めず。

義和團匪の暴擧は端なくも、北清の事をして、容易ならざるに至らしめき。公使殺されたりと報じ、公使館燒かれたりと傳へ、曰はく砲臺占領、曰はく將校戰死、曰はく聯合軍危し、曰はく大兵を派遣せよ。新聞紙上の二號活字は、能く國民の眼を射、街上『號外々々』の聲は、能く國民の耳を聾く。機に投ずるに巧なる書肆は、逆上せ易き國民の弱點を看破して、新に『東洋戰爭實記』を刊行し、射利に抜目なき奸商は、二十七八年戰爭當時の如き、甘い汁を吸はむがため、ソロ〳〵その運動に取りかゝれり。嗚呼、漸くにして廿七八年戰爭の疲勞を醫し、百事方に改善の道程に旅立ちせし時に當り、此くの如くにして、復び宗教も敎育も風紀も衞生も、共に國民意識の外に放逐せられむとす。

吾人は敢て、小學校設備完成の爲めに充てらるべき敎育基金一千萬圓と、その利子三千五百萬圓とが、軍艦水雷艇補充金、災害準備基金と共に、這般清國事件のために、使用せらるゝことゝなりしを遺憾とするものにあらず。たゞ國民の多くが、かばかりの事にさへ、浮き立ち逆上せあがりて愼重の態度を缺き、動もすれば、その本業に安じ得ざるが如きを悲しまざる能はず。殊にかばかりの事によりてさへ、我が敎育の事を頓挫せしめ弛廢せしめむとする、當局者の腑甲斐無さを悲しむなり。

●私立高等學校

中學校の增設せらるゝもの、近事に至りて殊に甚しきを加へ、その卒業生の數、年一年に多く、進みて大學に學ばむとするものを收容敎導すべき高等學校は、各校等しくその應募者の夥しきに困しみ、競爭試驗といふ一大難關を設けて、以て彼等を淘汰しつゝあるなり。是を以て彼等學生の中には、相當の實力を有しながら、落第に落第を重ね、曾て同時に中學を卒業せし友が、既に角帽に手の屆けるものあるにも拘らず、己は却ッて中學校に逆戾りして、再び高等學校入學の資格を作るに汲々たるものあり。或は數回の失敗に落膽し、當初大學に入りて、哲學の研究に從はむと欲せるものが、工業學校、商業學校、若しくはその他の私立專門學校に入り、必ならずも方角違の學科に、頭を痛めつゝあるものあるなり。甚だしきに至りては、絕望の極、謂はゆるヤケを起し、遂に魔界に墮落して、また救ふべからざるに至るものもあるなり。眞に憐むべ

からずや。而して是れ高等學校の數の、少きがためなるに外ならず。

事情既に此くの如し、國家は何故に速に高等學校を增設して、此等可憐の青年を救はざる。况や、長野縣の如き新潟縣の如きは、共に此の事のために、進で三十餘萬金を寄付せむとさへ、冀ひつゝあるに於てをや。又私に中學校を設立して、以て國家の事業を助けつゝあるものあるが如く、世人ば何故に私に高等學校を設立して、國家の事業を助けむとはせざる。吾人を以てこれを觀るに、世人は不急なる女子大學を創設するためにさへ、幾十万金の費を喜捨し、幾千坪の地を寄付し得る程の餘裕を有せるなり。何すれば、焦眉の急を感しつゝある此の高等學校增設のために、金を出し他を割くの餘裕なからざらむや。

若しそれ國家にして、高等學校增設に要する經費の支出に、困難なる事情存するありとならば、何故に長野新潟兩縣中、何れかの寄付を嘉納せむとはせざる。又若し、彼等長野縣の如き新潟縣の如き、眞に高等學校設立のために、三十餘萬金を喜捨する程の餘力あらば、何ぞ必すしも嘉納せむとせざる國家に寄付するを要せむ。各々自進んで

●縣立高等學校

を設立し、以て他の諸縣に好模範を示すもまた快ならずや。

然るに、頃者聞くが如くむば、故外山博士は、その生存中、私立高等學校設立の志ありて、病褥にありし時にも、此の事念頭を去らざりしと見え、特に正則中學校教員に屬託して、その設計案を求められしが、設計案未だ成らざるに、早く既に博士の長逝を見るに至りたりしかば、その囑を受けし人々は、是れ正しく博士の遺言とも見るへきものなれば、そのまゝに打捨て置くべからずとて、昨今その設計案につきて、專ら調查中なりと。吾人もとより未だその計畫の詳細を知らずと雖も、世人が此くの如き計畫を、馬耳東風に聞き流すことなく、設立者の容るゝ範圍內に於てこれを贊助せよ。又僅々七高等學校を有せるのみなる意氣地なき國家は、せめて、此くの如き計畫者を保護することだに怠らざれ。而して內外相呼應して、その成効を速ならしめむこと、吾人の切に希望するところなり。

●教師の待遇

凡そ事の何たるを問はず、その成ると成らざるとは、人その人を得ると得ざるとに在り。而してその人を得むと欲せば、これを殊遇優待せざるべからず。冷遇薄待、しかも爲す有るの人を得むこと、その能はざるや論なきなり。

曰はく學者優待、曰はく文士保護、曰はく監獄敎誨師を高等官待遇となすべし、曰はく敎師禮遇の道を啓くべし。嗚呼、待遇の論、囂々として喧しきこと、一に何ぞ此く如きや。請ふ吾人をして、敎師の待遇に關して、少しく語るところあらしめよ。

敎育の效果の甚だ少き所以は、他に種々の因由あるべしと雖も、敎師その人を得ざるにもより、敎師その人の誠實熱心ならざるにもよる。小學校敎師の中には、その月給實に紙屑拾の收入よりも少きものあり。中學校の敎員中にも、最も收入少き車夫のそれにだも如かざる程の薄給者多きなり。かゝる薄給にさへ甘じて、敎鞭を取るところの敎師、曷ぞ一人前の敎員（寧ろ人間）たることを得むや。曷ぞ人の子を敎育し得る程の、才學と德行とを有するものならむや。又一人前の才學と德行とを有せるもの、若しくはそれ以上のものにして、かゝる薄給に甘じつゝあるものあらば、それは必ず敎師を内職として、他に本業を有するものなり。有り躰に言へば、敎師といふ仕事を一時の踏臺として、他日それ以上の地位に上らむと欲しつゝあるなり。東京に於ける小學校の敎員中、法律學校に通學して、辨護士となり判檢事とならむと勵みつゝあるもの尠からず、銀行會社に入らむが爲め、義務年限の滿つるを一日千秋と待ちつゝあるもの多しと聞く。既に

●一人前の才學

と德行とを有せざるもの、既に敎育のために獻身せむとする念慮なきもの、此等のものに子弟の敎養を託して、その效果の擧がらざるを責むるは、その罪寧ろ責むるものにありて存するなり。

然らば、彼等を優待し殊遇すれば、以て相當の人物を得らるべく、また彼等の尻を落着かしむることを得べく、從つて敎育の效果大に擧るべきか。優待殊遇は、或は相當の人物を得らるべし、しかも彼等にして、誠實熱誠、敎育のために粉骨碎身せむと欲する底の精神これあるなくむば、敎育の效果擧がらざること、依然として舊の如けむのみ。即ち彼等をして、敎育は彼等の一大天職なることを、自覺せしめざるべからず。一

方既に自己の天職を知り、他方また彼等を優待して、その社會上の地位を高からしめ、その生活に心を勞せしむること無からしめば、即ちこゝに始めて眞の教育を施さしむることを得べく、謂はゆる教育の効果を收むることを得む。夫の猥りに優待禮遇の一面をのみ説きて、被待遇者それ自身の、性情手腕境遇等の方面を督査せざるもの丶如きは、即ち是れ擔板漢、吾人は同ずること能はざるなり。學者優待、文士保護、その他一切の待遇論、吾人は等しく此の意を以てこれを解釋せむと欲するもの。

●普通教育に於ける倫理教育

一言にしてこれを言へば、普通教育に於ける倫理教師は、常識の健全に且つ圓滿に發達せる人ならざるべからず。普通教育に於ける倫理教育は、徹頭徹尾常識的ならざるべからず、即ち被教育者をして、常識の健全に且つ圓滿に發達せるものたらしむると、是れ普通教育に於ける倫理教育の目的なり、(今は特殊教育及び高等專門の教育にまで論じ及ばず）吾人もとより、常識の絕對的價値を承認するものにあらずと雖も、しかも特に此の言を爲す所以のものは、普通教育に於て、その被教育者の日常の行動云爲を指示し教導するには、最も安全にして、且つ穩和なりと信ずればなり、近く加藤博士と福澤翁との上に見むか、普通教育に於ける倫理教育としては、加藤博士の哲學的なる功利主義を以てするよりも、福澤翁の常識的なる修身說を以てする方、遙に効果多きを認めざる能はざるなり。

言ふまでもなく、倫理教育の根本的目的は、實踐躬行にあり、言行一致にあり。語るもの語ると共に行はざるべからず、聽くもの聽くと共に爲さゞるべからず。語りて而して行はず。行ひて而して語るところと違ひ、聽いて而して爲さず、爲して而して聽けるところと合はずむば、是に於て倫理教育は實に毫末の價値これなきなり。故に普通教育に於ける倫理教育は、聽いて直に行ひ得べき事項を說かざるべからず、最も適切に日常の行爲を指導せざるべからず。敢へて日常の行爲を指導するなく、聽いて直に行ふ能はずむば、即ち是れ誤れる倫理教育なり。夫の機械的に教育勅語を暗誦し、絕えてその大精神を解せざること、恰も坊主が佛前に經を讀むも、其の何の謂たるかを知らざるが如くならしむるもの、是れ豈眞の倫理教育ならむや。徒に抽象的なる忠孝節義等の語を並べ來り、被教育者

をして、その實行の手の着けどころ無きに苦しましむるもの、是れ豈眞の倫理教育ならむや。教師の説話を記臆せしめて、學期學年の終りに試驗をなし、これによりて被教育者の道德的價値を上下せむとするが如きは、是れ豈眞の倫理教育ならむや。況や形式に重きを置くの極、生來吃にして言語不明瞭なるもの、若しくは跛にして姿勢正しからざるものを以て、そのもの、

●道德的價値

を減損するが如きに於てをや。

吾人は少しく、小中學校に於ける修身倫理科教授の現狀に就きて、學ぶところありたるなり。教育勅語を暗誦せしめ、以て倫理教育の能事終れりと信ぜるものはあり。言語姿勢等の形式の正整を以て、修身教授の目的は達せられたりと心得、吃者の言語明瞭を缺きたるため、跛者の姿勢正しからざりしがため、倫理の試驗に落第點を與へむとしたるものはあり。抽象的の理論をのみ說き列ねて、被教育者をしてその理會に苦しましむるものはあり。頻りに教師の言說の記臆を强ひて、絕えて日常の行爲を指導することなく、而かも被教育者が、實踐躬行の效を擧げざるを怪しむものはあり。倫理講堂を寄席の高坐と心得しにか、滑稽百出、たゞ被教育者の御機嫌にこれ適はむことを專一とするものはあり。第廿世紀の新天地を何時と思ひ違へしにか、陳々腐々、偏狹固陋、最も融通の利かぬヘッポコ儒者をして、論語の講義を爲さしめつゝあるものはあり。學校飛び出しのホヤ〳〵男、それ自身さへ未だ西とも東とも見當のつかぬもの、これに託するに人の子弟の行爲の指南車たらしむことを以てするものはあり。文部省の試驗を僥倖せしのみなる當世才子、ミルやベンザムや、カントやスペンサー、たゞ西洋倫理學史の棒讀みと、機械的記臆との外、未だ自ら何の得るところなきものをして、重要なる倫理教師の椅子を占めしめ、委ぬるに被教育者か云爲の羅針盤たらむことを以てするものはあり。而して吾人の謂はゆる、常識の健全に且つ圓滿に發達したる倫理教師は、不幸にして吾人の眼に映じ來らざるなり。噫、觀來れば、吾人は今日の倫理教育が、殆ど全く無效なる所以を解し得て、釋然たるものなからざるを得ず。

吾人は更に前記の條項に關して、一々その實例を列擧し來り、これを喝破し去らむと欲するの情、轉た禁す

る能はざるなり。しかも吾人の不文なる、筆端の迸るところ、或は人身攻擊の誹を蒙り、或はまた識らず知らずの間、先輩の士を傷るに至るあらむことを恐れ、そは一に賢明なる讀者の推量に一任し、こゝにはたゞ、世の倫理敎育に從事しつゝある人々に對し、吾人の希望の一端を開陳するにとゞむるのみ。

社會

●夏草と人生

盛夏は是を人性に比するに其最盛期にして、其壯齡𡾊强の姿とも見るべきか、而して其しかく盛大に壯麗なるは、烈々たる太陽の光輝のしかく雄壯に光大に、一年中に於ける最偉最烈に因ると雖とも、しかも其地上の光景は、萬物のよく敍暢せる、動物の目にふるものの尤も夥多なるより、草木の尤もよく繁茂鬱盛せる皆其最大現象の一たらずんばあらず、さらば其鬱々繁茂せるの狀をみんか、以て人間の壯麗なる功勳、人性の美麗雄偉なる大觀を想像すべし、しかも此念や卓爾として天に沖するの老木高樹に於てのみ想起すべくして、最盛最茂せる倭樹の青々としたる、新葉新芽相重なる灌木の綠滴たらんとする、平原青草の萋々たるを見るに於ては反て凄慘の感想を惹起するものあり、特に曠原平野殆んど眼界の極まる處を知らざるが如きの處に於て、青草萋々人を沒するが如きをみる、其草の高きだけそれだけ、悲愴感慨の狀の彌々增々高きを見るは何ぞや、これ夏草とし云へば直ちに芭蕉が兵士が夢の跡と云へるが如き、其反面の光景を聯想し來て、吾人が纍々たる墓墳の上青草の離々たるを想起し、盛壯の相は反て吾人に此裏面を映射するならずんばあらず、然れどもこれ畢竟古來より我國の文學に浸染薰受せし、皮相的厭世觀の賜にしてかくの如きは、吾人が斷じて除去すべき忘想にして、此悲愴の觀をして更らに希望光明平安慰愉の美想に轉化するの道を求めずんばあらざるなり、

●自然觀と內觀

人生は一個の旅行にして、即ち又一の學問なると同じく自然觀光の旅行も、亦一個の學問たらずんばあらず、故に吾人は消夏の第一法として、まづ旅行を勸むると共に、內觀眞修自心の修練を勸めんとす、頃日學生墮

落の救治策として盛に禪法の修練を勸むるものあり、これ大に吾人が賛ずる所にして、或はそれに依て起るべき多少の弊害は免るべからざるべしと雖も、內觀眞修して深く身己なる物の本源を究めんか、云ふべからざる破廉耻の行動、君子の正視すべからざる、不義不德の汚風は、或は以て其幾分を削除するをうべけんか、それに付ては、此夏期の休業を卜して、朝思暮想誠實に九旬の勞を積まば、蓋し其うる所や大なるべし、學校の夏期講習も可なり、朋黨相結んで自己專門以外の智識をうるに勤むるも可なり、然れども學校の制規の下に止むをえず顔のみを列ねて居睡りにふけらんよりも、徒らに法螺の種を作らんが爲めに、柄にもなきむつかしき講筵に列せんよりも、海水浴にもあらず、旅行にもあらず、唖然として木偶然として夏期學校に來らんよりも、むしろ身は塵境にあるも可なり、事にふれ時に應じて謹んで人道の徑路をたどりて、靜かに安心立命の歸着する所を極むるのよきにはしかず、熱時にはこれを熱殺し、寒時にはこれを寒殺す、眞正向上の眞味は江山破却底の所に存す、

●自然觀と旅行

銷夏の策として吾人は自然觀と內觀とを勸めたり、然して云ふ所の自然觀の大部分は旅行を以て上策となさゞるべからず、かく云はゞ或は夏期の旅行は、已に人の多くなす所にして今更ら說くの要なしと云ふものあらん、しかも尙ほ吾人の此に事新らしく辯ぜんとする所以のものは、決して自ら屋上屋を架せるの愚を學ばんとするものはあらず、大凡そ日本人の旅行たるや、海國の人民たるにもかゝはらず、常に陸上の小川小山探るのことをのみなして、波濤を越えて、海上の探險をなし、或は大陸を横斷縱行して、絕域險崖の勝を求めんとするが如きの大旅行を企つるものなきは、吾人の頗る遺憾とする所なり、日本內國の小山川を跋渉して、江山烟雲の美を極むるも、これを唯自家生地の小鄕關に屛息して、少しも他鄕の風光習俗を知らざるものに比すれば、甚だ可なりと雖とも、かの外國人が万里の險を冒かして、僻遠遼絕の究地を探るの壯事をなすと、吾人の先祖が南船北馬終生を通じて、遠征開拓の偉業に身命を賭したるものに比して、頗浩歎に堪へざる所なり、此に於て吾人は旅行殊に大陸の旅行を勸

誘せんと欲するものにして、其一歩としてを勸めんと欲するものなり、

●隣國大陸の跋渉

今や滿清の風雲は常に非ずして、四百州の山河まさに、昔時の觀を改めんとするの萠を致す、此時孤劍飄零、此老大國の風物を極めて、吊古の幽懐をやり、且つは文物刷新の標的を見出す、亦快ならずとせんや、吾人は特くに懇ろに所謂新躰詩人なる諸君に此行を勸めんとす、西詩の譯に巧みにして詩の定義を說くに詳密なるの詩人はあり、國語の陳列に巧みにして、綺麗絢爛なる詩を作くるの詩人はあり、戀なる題目を無上の寳珠として、ありもせぬ涙をにせ失戀の狂態にそゝぐの大詩人はあり、地上の一小草花、巷街の一小現象、唯狹き主觀の揣摩に人生の大義を誤解瞞着するの大々詩人はあり、しかも仰で天空の廣濶なると、俯して地上の壯嚴偉觀なるとに無限の幽懐を養ひ、更らに人事の紛糾せるに比して、万世に不朽なる神祕の鑰を解くの詩人は未だし、万里の海島に自然の顯はれざるを探り、遼遠の絕域に人事の更らに計り難きを求め、或は千年の古跡に深き歷史の趣味を味ひ、活きたる戰場の慘風に人間罪惡の根源を究むるが如きは未だし、アヽバイロンよ彼れは洛陽の子女ある父母をして其街頭を通過するをみて、窓を閉ざしめたる程の痴漢なりしも、尙ほかつ名をチルドハロルドにかくして、戰陣雲深き異域の鬼と化しヤイたりし、きけよ我が愛する明治の詩人諸君、諸君の題目は決して、島國の英雄のみにはあらざるなり、戀の痴狂のみにはあらざるなり、かの世人が卑む、淫賣婦は如何、かれ等は已に諸君に卒先して、世界のはてに足跡を印せり、かゝる輩の命運を描出するも亦一個の好題目にあらずや、隣國の頑民は戈を倒まにして、自家の腹を剝ぐる的の奇劇を演ぜんとして、尙ほかつ醒めざるなり、かくの如きの國民が末路を吊するも亦好個の詩題にあらずや、去て早く大陸旅行の途に上れ、而して其第一歩としてまづ隣國大陸の風雲にみる所あれ、若し夫れ幸にして鈍機翁ならね、空想實現し、異域に戀人の思ひ死でもし給ふはとあらば、これ實に足下逹が終生の本懐のみにはあらず、又以て大日本帝國の大慶事なり、

●懐ろ兒的國民

日本の國民はむかしは兎まれ、近古以來は、げに懐ろッ

見的國民なるかな、江戸ッ兒が伊勢參りするに、水盃にて別をつげ、關西の者善光寺詣でするも涙で送る、むかしの御大層なる旅立ちの話しは云はずもあれ、今も尙ほ御令息の海軍々人にならるゝを嫌ひ給ひ、若くは名譽ある海外への旅行を拒み給ふ母君の少なからぬ間は、日本國民は未だ乳臭き氣を離れざるなり、大國民の氣風を養成しえざるなり、されば吾人が前項に於ける大陸の旅行も、かゝる肝小さき國民には、旅費に事欠くとか、故鄕を立ち去ることの悲しとか、なんとかかんとか、或はとてもむつかしかるべけれ、そんな事にて、大日本國民ですのも口はゞたッき限りなり、いでや往けがし、徒歩旅行、無錢旅行、單騎旅行、單歩旅行、驚くことかは、氣車に滊船に、高館に大厦に費を盡くして旅行するは、まだ日本人のなすべきことにあらず、へたな紳士の猿まねせんよりは、寧ろやるべし世界の人民を驚かすべき獨立獨歩の單行遠征

●官設鐵道と私設鐵道

鐵道の國有と私有との可非は吾人の知る所にあらず、官設鐵道の設備の割合に不完全にして、十年何の改良する所なく、しかも旅客に不親切なるは、私有鐵道の漸次改良を加へつゝ、旅客になるたけ便利を與へんと勤むるに比しては、遂に齒ふべからざるの事實なるべし、夏期に際して思ふなり、私設の鐵道は各々其聯合組合に於て、官立の學生及び軍人等に向て其歸省、旅行等の便利のために、適要の割引をなすにもかゝはらず、官立はけろりとして、總てに於て常に知らざるまねす、何たる不都合なりとするぞ、私有鐵道は官立の學生を優待するの義務あれども、官は自己保護の下にある、官立學生、軍人等を待するに及ばずとするか、しかも尙は且つ、運賃を値上げして得たりとす、せめては以前の運賃にだけなりとも引き下げて、幾分の優遇をなさば如何に、事小に似たれども、設備の不完全にして、不便の他に比して勝れたる、日本官衙の施設程有難からぬものはなかるべし、

●海水浴場の風紀

海水浴場の風紀に付ては、吾人が每年口を酸くして論ずる所ありと雖とも、しかも世は吾人をして最早や今年は云ふの要なしと感ぜしむることなきは抑も何が故ぞ、吾人も水浴の經驗はあり、實を云へばうるさき「サルマタ」「シャツ」などのべと〳〵になれるを卷きつ

けて、潮をあびるよりも、寧ろ赤裸に、河童の如く漁夫の如く、波間に出沒するの快なるには若かず、しかも快なりとて、風紀は快なるに乘じて濫すべからず、人間自己の品格と、廉耻とを思はゞ、希くは吾人をして來らん年に再び此題目を掲げて、筆を呵するの煩を脱れしめよ、

●一年の回顧

以上の數項筆し訖て去年今月の本誌本欄をみる、最初に內地雜居の一項あり、あゝ思ひみれば去年今月はこれ初めて內地雜居を許せるの時にあらずや、多くの杞憂、多くの希望を以て、內地を開放せるの時に非ずや、今に於いて見る、杞憂は眞に憂ふべきものなりしか、希望はうまく實行されしか、眞に憂ふべき者は今も猶ほ實行されたるものなし、眞个に憂ふべきものは今後にあるべく、眞个に望むべき事は却つて多く今後に存す、今年東洋の風雲唯ならずして、列國呑噬の强慾はまさにこれより初まらんとの急に望めるにもかゝはらず、しかも人は去年の如く憂へざるあり、希望を述べざるなり、あゝ日東の大國民はしかく輕躁なるべきか、しかく忘れぽくあるべきか、思ひ來て又感慨に堪へざるものあり、

●去年今年の社會問題

吾人は更らに本欄の他の項をみる曰「僧侶を諭すべし」曰はく「華族問題」曰はく「位置爭ひの流行」曰はく「罪惡暴露の害」曰はく「慈善の性質と方法」曰はく「避暑の方法」曰はく「海水浴場の風紀」曰はく「茶代廢止の方法」見來れば去年の問題は、又又今年の問題にして、一歩も進捗せるものあることなし、吾人の絕糾して聲を絕つべからざる、又實に至要にあらずや、筆を擱て感慨すべからざるの感慨をもらすこと多時、

●結　婚　（七月課題）

○親の意仰一つで押し附ける結婚もあれば、親の意に背きて我儘な野合的結婚もある。深窓に育ち給ひし少女が、闇夜に乘じ、侍女の目を忍び、住み慣れし我家を脫け出でゝ、田舍に退隱せし乳母が家を便りに僅に身を忍んで居る中に、杖とも柱とも賴みし乳母が病死して、そが亭主か若しは悴の非道な振舞に遇ひ、泣きの涙に日を暮して、とゞのつまりは身を淵瀨に沈めて兩親に悲しき浮目を見せるに至るは、前者の結果である。身分相當の家を定めて媒妁人が奔走し、慈愛の親は何呉となく凡ての事に心を勞し、早く新嫁を向ひて、家督を子息に讓り、身は樂隱居の世を安らけく送らんものと思ふ慈心を顧みず、身分賤しき浮れ女や界限切ての

其連者にうつゝを抜かして、有金とらはるゝはまだしも、親の印形までも盗み出し偽證で負債を山の如くし、偶まく〳〵嚴父が逝き玉へば、ケックと幸ひの事と継母を欺き怪しき女を引き入れて、親戚縁者の意見も聽かず、主婦となし、家事萬端打ち任かし、日々浮かるゝ遊戯三昧に祖宗の遺産傾け盡くし、老ひ玉ひたる母の愁嘆をも意とも爲さず、家財道具を賣り拂ひ、涙々の身となり果てし其上げ句、遂に女に見捨てられ僅か斗りの身のもの迄も、皆な悉くさらはれて暫く家斷絶の有様となり、世の物笑の種となり終るは、是れ後者の結果である、二者の如く斯く極端にまで行かずとも前二つの者は决して良結婚とは云はれない

家に獨立すべき資産なく、戴星踏月の勞働は一日も休むことも得ず、加之老父永く病床に在りて費は多く、母は去年此世を去りて置き紀念の二才の乳呑子、殆んど貧の極に在るも誰ありて妻を向へて世話するものなく、今年十七になる妹の甲斐〳〵敷、共に父の世話やら日々の日雇ひ稼ぎ、偶同し長屋續きの饒舌女房が、隣りの娘をお嫁さんに世話仕様といふも、貧に似げなき美男に惚れてとの事で、聞くも忌ま〳〵敷く暮らす中世にも珍しき親切なる差配人の媒介で、働き一方の而も假名付新聞位讀める近在の中百姓の一人娘、孝行息子といふを見込んで呉れる先方の兩親、吉日を撰んでの引き越し、三々九度も形斗りの式を擧げ、夫婦共稼に、病父の看護に、余念なく目出度月日を送る中、嫁の里なる一人の子息に、妹が貰はれて、之も孝行の性心が箪笥長持よりも良き支度身の飾りなりと、近所に羨まるゝ程の結婚は、是ぞ千秋萬歳と壽くべきであらう。（吐霓）

○試に結婚の定義を下さうか、結婚とは男女の兩性がクッツキあふまでのことである。ソレは顔さへ氣にいつたらそれでいゝので中には只財産が慾しさに片輪娘の婿に行く者がある。ソシテあふ者ははなれ者とやらでイツ何時でも離婚する、再婚三婚または姦通これらは當り前のことと考へられてをる、或は兄が死んだとの故を以て嫂と夫婦になる弟がある、まだ〳〵娘の婿どのに秋波を送る親もあるげな。なんぼう昔しからの習慣が悪ひにせよ、男は女を翫ひとする者にせよ、また女は賣物であるにせよ人間らしくもない仕事ではあるまいか、況んや女は翫ひでも賣物でもない、いかにも不倫極まつた仕様ではないか、よしなみ〳〵の賣物であつても翫びかすを返して受取る商人はなかろう。いかにも不倫極まる結婚が我國民間に行はれて居る。之を矯めて眞に結婚らしくする方は幾つもあろうが藝者遊びと女郎買ひに無上の歡樂を覺ゆる國民には駄目だ、相成るべくは佛か神に誓ふことにしたいと云ふ者もあるが信仰を缺げる現下の國民に之を强ゆるは罪だ、彼等の眼中の佛や神は錢をもふけさしたり病ひを直して呉れるやうな者ばかりだ。か樣の譯であるから玆に大宗教家が出現せぬ巳上は法律で以て壓制するより仕方がない、彼は壓制が案外に能くきく國民だ、ソレデどんな事情があつても離婚を許さぬと、夫か婦かの一方が死んだのでなければ再婚を許さぬと、といふ工合にやりたい。ソウするとは餘儀なく兩方に於て十二分の注意を經て後結婚することになる、勿論之れには多くの弊害があろうけれど後々の爲めを思へば斷行せんければならぬ。自然之を犯す者が出來ようがその甚しきやつは打殺してしまつてよかろう、かゝる男は生きて居ても一向社會に用事のない方だから决して惜むに足らぬ。（獸王）

○僕は生れて始めてお寺樣の結婚なるものを見た、夫は先頃脚氣のため或處に轉地した時の事で、他に知るべもないから、其村の禪宗寺の客間を借りて靜養して居つたが、或晩庫裡の方で何かごた〳〵物音がするから不思議に思つてソツト戸の間から透視をした所が、胡麻鹽頭の男が五六人揃て二十歳前後の一人の女を連て來て何か喃々しやべつて居たが、

漉て酒が出る肴が出る、すると住持の和尚が先に飲で女にさす、女が飲で住持に返す、夫から順ながれにみんなが飲む、漉て油がのつて來ると一人の胡麻鹽頭が手拍子をかしく高砂やこの浦舟にと唸り出す、一同がめでたいとか安心だとかを幾度も繰返して歸てしまつた、然も其女を殘して――僕はまだ不思議の感に打たれて見て居つた――少間すると二人下床をのべて一所に寐てしまつた、僕も寐てしまつた、明くる朝起て見ると其女は襷がけの甲斐々々しいなりで働いて居た、和尚は少しきまりのわるさうな顏をしてかう云つた、男一人は萬事に不自由だから厄介を持つたと、僕はこの厄介の意味を解し得なかつた、併し此處に出入りする男の人はその女を妻君と呼び、女の客は御しんさんと呼び、小供はおばさんと呼び、そして陰ではみんながお大黒々々々と云つて居つた。(さをる)

○明治庚子五月東宮立妃の大典ありし日を以て結婚したる余は、中央公論子が募集せる『結婚』なる短文を草す、胸中に描ける理想の婦人と結婚することの難きは世間に通じたることにして緣は意外の邊にあり」たとい初めは只無意味の結婚も一たび結婚すれば愛情は濃厚となり決て前に描きし理想は愚の一つであると云ふことが了解せらる」妻をして家法を守らしめ命令に服從させんと思はゝ新婚の夜より兩三日の間に命令すべきである然れば彼の心に刻することの深き他日の數千言に勝ること幾千倍である孝は妻子に哀ふとは實に名言である自然と父母に對する隔意を設くるが如き感あり卽ち一種の心痛を增すことは未婚者には了解出來ぬ事である」妻なければ樂み少なし妻あれば憂多しとは實に單純なる言語の中に新婚の所感を摸して居る」結婚後一家の平和を保たんには林子平の『客に來りたる』の教訓盡して餘す所なし」實に結婚は幸不幸の分るゝ所最も平和なる家庭を造るの結婚が人世の最大幸福なると其の不平和なる家庭は悲慘なる人世の罪惡に處せられたるものと考ふ。(窮恨)

○男が女に遇ひ、女が男に適く、そこで夫婦ご云ふものが成り立つ、が人は單に男女相思ひ、相遇ふと云ふのみを以て結婚とは許さぬ、なぜに許さぬのであらうか、兩方の親と親とが相約して、結納を取り換はして、何月何日にお嫁樣がお輿入れになる、三々九度の盃がすむ、そこで始めて結婚と云ふ、さらは結婚とは、本人と本人とが相思ひ相遇ふて夫婦同居すると云ふの意味ではなくつて、男と女が夫婦となる、其儀式だけを、結婚と云ふのである、かう考へて見れば、天下の結婚なるものが大抵男女相愛の結果でなくつて、其兩親、々戚、家系、財產、地位の上に依てのみ定まるとすれば、時には結婚とは單に男子の骸骨と、女子の骸骨とが、花々敷式場の間中に、虛僞虛榮の結婚と云ふものをやつて居ると云ふ樣な結婚が、決してないとは限るまい、考へてみれば結婚と云ふもの程、無意味にして、哀れなものはあるまい。(古佛)

○何が嬉しいと云ふても、幼な馴見の中から結いなづけと定まりて居る者が、帝國大學を卒業して、文學士の名譽を肩に擔ひたる時、高等女學校を卒業して、淑良名高き人と結婚の式を擧ぐる時程、嬉しき事はなからう。(吐霓)

○外女掠奪が進化して、妻女買得となり、妻女買得、卽ち聘財が今の結納の典なりとすれば、吾人の結婚は總て買得結婚で、倫理的結婚ではなく、野蠻を去る事遠からずと云ふは非歟。(啞子)

○結婚は人間生活上の大事件である、是れの如何は直ちに社會の好尙に大なる影響を及ぼすもの。肉と肉とのクッキあうまでの結婚が行はれ居る我社會を見よ。(獸王)

○之を慮れば心樂しく、之を顧れば胸惡し、古より以て人世の大禮とするもの、蓋し喜怒愛樂の源泉たるの謂なるか、(登空生)

○結婚は善であるか、惡であるか、美であるか醜であるか、予はこれを疑問として天下後世の大學者に殘す。（白眼）

○結婚を樂しい、うるはしいなど云ふ奴は馬鹿だ、それを望む奴は氣違ひだ。（黒狸）

○結婚は罪惡なり、男女互ひに純潔を相ひ侵す。（古佛）

○日本の結婚は、野蠻の尤も甚しきものなり。（青顔）

○結婚は兩醜肉相合して、一美珠兩斷す。（斬虹）

次の課題は

衣服（八月五日〆切）

嫉妬（九月五日〆切）

宗教

●本願寺と各宗

宗教法案に意見を異にせしより西本願寺と各宗派即ち東本願寺との間兎角圓滑を缺き軋轢の矛鋒増鋭利を加ふと稱せらる、而して西本願寺がその掛け引きに於て常に劣敗の地に立てるは傍観者と雖も尚齒痒さを堪ゆる能はず、就中佛骨奉迎の如きくだらざる山師事業に對して大谷派の後塵を拜して遙る／＼使節を暹邏に送りたるが如き抑も氣の知れざる所にして、而も大菩提會の組織に對しては大なる異論を主唱しながら却て覺王殿の建築は二万圓を寄附して各宗の憤恨を和けんとするか如き吾人は遂に其意の存する所を知るに苦む、吾人は西本願寺が常に進歩主義を標榜して頑冥固陋の各宗本山に一頭地を抽んずんは頗る多とすべきを知ると共に論議者は必ず實行者たる能はず往々にして歩調の整はざるものあり、却て世の物笑となるは吾人が惜みても尚餘りある所となす。

●元老と老僧

政府に元老あるが如く各宗本山にも老僧あるなり、而して政府の元老は老たりと雖も尚用ゆ可きもの多く、伊藤の如き、山縣の如き、井上の如き、西郷の如きあり然るに本山の老僧輩は率ね思想陳腐にして局に當て事を視るの能力を有するもの、太だ其數多からず而も各宗本山は尚此の老僧の手中に在るもの多し、佛教界か世間に後るゝ尠くとも三十年なる所以即ち茲に在り。

●教界の參謀

僧侶の參謀としてその一言一行の各宗間に珍重せらるゝもの二人、曰く鳥尾得菴曰く三浦梧樓而して二人共に其陸軍中將の肩書を剝去る時に於ては現代の思想界實際界に於て何等の勢力をも有せざるものたり、而も僧侶輩動もすれば曰ふ鳥尾將軍の言是の如し、三浦中將の指圖是の如しと、佛教者が事毎に社會の後に落ちて増ゝ時代の精神を遠かるもの自ら偶然にあらず、彼の江原素六を有し、片岡謙吉を有し、島田三郎を有し、田口卯吉を有す基督教界に顧みて佛者たるもの抑も如何なる感をなせる。

●佛骨來

佛骨來る、佛骨は已に長崎に來る、各宗の僧侶門徒は將に之が歡迎に忙殺されんとす、事を經畫し、而も事に當れるものゝ得意亦想ふ可きかな、而して之を安置すべき覺王殿なるもの位置に於て、今や東京京都之が取り合に餘念なく鳥尾得菴の如きは之が調和の爲に殊に京都に出張せりと嗚呼太平吞氣なる佛教界なるかな。

●舊佛教徒と新佛教徒

佛教は古今に於て變せず何ぞ新といひ、舊といはん、已に舊といふも佛教に非ず、新といふも亦佛教に非ず、而して今日の佛教徒と稱するもの所謂舊佛教徒に非ずんば新佛教の徒也、而して共に眞佛教徒たらざるに於ては同類なりと云はざる可らず。

●土耳機と清國

西に土耳機あり、東に清國あり、土は希臘教を以て、清は天主教を以て常に禍亂の動機を絕せず、東西好個の一對、「三眼」記者等の好材料たらん。

●大學傳道

全國基督教徒は明年即ち二十世紀の劈頭を以て大學傳道をなし大に宗教的活光を全國に輝かさんと稱す、意氣の壯烈なり洵に欽すべし、而れとも大學傳道にして先づ自家心中の傳道に始まるにあらずんば大學傳道は單に大學傳道として大なる成果を見ずして已まん、吾人は刮目して今より基督教諸氏の活動に於て待つ所あるべし。

熱砂燒土　（長吁子）

○昔しは唐皇憲宗佛の指骨を迎へて、韓愈佛骨の表を上り、後世群議の端を開く、今は大俗徒らに佛骨を他國に受けて一人の佛骨表を作るものなし、佛骨果して眞か、骸骨を群臭に汚がされて佛心果して如何、佛骨遂に僞か、臭穢の馬骨を錦綉に包んで百世哲士の笑ひも云何、佛骨來るの日、友人の書をえて罵嘲の句を見、書を讀んで韓愈上表の章に及ぶ、胸を懷て空を望むこと半晌。

○上海販來の客あり、告けて曰はく、今年の四月九日午前九時より十時に至るの間、天急かに暗黑咫尺を辨ぜず、雨ふらず風ふらず、密雲の蠟の如きもの丶流れて西より東に至る、戸々爲めに燈を揭ぐるに至る、市民相告げて曰く、これ東洋暗黑の兆たるかと、果然月を越えて義和の拳匪起り、今や東洋の天地暗又濛、しかもこれを朝鮮及び日本の西部に於て質すに何の異ることなく、殊に日本に於ては佐世保に於て海軍大演習の軍艦まさに艤して、發せんとするの時にして、海上更ちに一點の雲を止めざりしと云ふ、あ丶それ一朶の密雲は遂に此讖をなせしか、膝を抱て暮山をみること多時。

○新紙の傳ふる所による、義和の拳匪又佛教の一部よりなれる妄信の一徒と、願ふに暹羅國王遠く贈て日本に佛骨奉迎の一黨たち、拳匪妄言を傳へて、淸國義和の匪徒起る、佛骨の奉迎は遂に雲門が千歲の嘲笑を買ひ、義和の團匪は、東西兩洋列國が不測の迷惑を釀す、今年十九世紀と廿世紀との界山は東洋に於ける佛教の當り年と見えたり、知らずこれ廿世紀に於ける佛教の命運をトせるものにはあらざるなきか、頭をか丶へ眼をとぢて、冥想すること數刻。

○淸國販來の客更らに各地別院なるもの丶狀態をきく、外國傳道の教師達が裕かなる給料を附與せられ、加之婢僕の手あてより新たに生れたる子供は云ふに及ばず、他より貰へる小供にまで月五圓ヅ丶手あてを送るに比して別院なるもの丶知堂輪番等が月給手あてを合して僅かに五六十圓にすぎず、其安閑呆然として別院ありと云ふも名のみにていつも〱心細き感と共に故鄕戀しき思ひにあくがる丶と云ふをき丶ては、由來本願寺なるものが維持と設計とに於て自己が有する資力如何を顧みざるか無燥の所爲に驚くと共に、內に山師的の仕事に日を消して弱肉强食的に唯自已の口腹のみを肥やすことの巧みなるを思ひて大口開て呆る丶ことまさに三時間半。

文學

●輕佻浮薄なる民衆

貳十七八年の戰役以來、我帝國の民衆ははなはだしくその性情を一變したるが如し。戰役以前にありては、民衆の性情、概して沈厚淳朴、事にあたる、豫めまづ精慮して而して後これに臨むの風あり。今よりしてこれを見る、や丶怯懦むみるの觀あるも、輕擧妄動、紙の如く浮泛するものに比すれば、その勝るやもとより多々、しかるに、今日にありては、この氣風やうやく滅盡して跡をと丶めず、輕佻浮薄の弊風、社會に瀰蔓

し、すべての階級、すべての方面、これに感染せられつゝあるを見る。人よく今日の我國を以て青年の時代と云ふ。すなはちこれを青年に譬へんか、年齡十七八、鄕中學を卒へて、初めて京に上る。四疊半の下宿屋樓上、終日屛居して、みだりに都人に接せず、他を見たら盜人と思への鄕父兄の言を服膺して、容易に他の言を聽るゝことなし。たま〳〵これを聽ることあるも、精思熟慮、しかうして後はじめてこれに從ふ。所謂遠慮がち的、引きこみ思案的、みづから進んで事にあたるが如きは決してあることなし。况んや、氣を負うて人を眼下に見くだし、或は小才をふりまはして世を欺くが如きに於てをや。しかるに、今に及んでは、この田舍者先生、たちまちにして天晴の東京通となり、輕薄才子の阿諂的口吻を以て、一時的、その場的の間に合せを云ひて、敢て顧みざるが如きの狀あり。すなはち輕佻浮薄、士君子の見て彈指する所となれる也。

けだし、我のさきに國を開いてはじめて交を五州に訂するや、西歐の文明、潮の如く國内に押し寄せ來りて、十九世紀の思想いたる所に横溢し、これをうくるものにありては、その勢の急激なるに眩目して、茫然殆どなす所を知らざらしめき。やうやく歲月を積むに從うて、やゝこれを咀嚼し得たるも、古印度、古支那、東亞の人文に化育せる頭腦は、一朝にして、數百年來、漸を逐うて發達したる西歐の文明を醇化すること難く、僅に門戶をうかゞうて、堂奥にいたる能はざりき。ずでにして二十七八年の戰役となり、遼東の野、砲火幾たびか交へたる後、戰は遂に我の利に歸し、歡呼の聲は六十州の山々に反響して、帝國萬歲の叫びは兒童走卒の口にすら上りぬ。思へらく、我すでに西歐の文明を醇化して剩ざず、列强と並び立つて敢て讓る所なしと。すなはち自負自誇の念大に萠し、ナショナル、プライドは盛に揚る。いづくんぞ圖らんや、三國の干涉突如として來り、血を以て得たるの地、ふたゝび他に附する所とならんとは。是れに於て、落膽失望、さきの自負自誇は自暴自棄となり、ナショナル、プライドは意氣の挫折となり、加ふるに、西歐諸州に比してみづからその力の深く及ばざるを覺るや、前の如く愼重にして、これを醇化せんとはせずして、一擧たちまちその文明を嚥下し了せんとす。しかうしてその能はざるや、自暴自棄は遂に變じて輕佻となり浮薄となるに至れり。

試に今日の社會を見る、滿眸の事物、一としてこの風を證するにあらざるはなし。この頃ビヤホールといふもの大に流行す。昨の夏、これのはじめて起るや、そのある所たゞ繁華の地に止る。今歲に入りて、一區一所かならずこれあらざるはなく、ある、必ず流行せざるはなし。曩日嘗てかくの如きものあることなし。二十年前後、歐化熱の盛なる、鹿鳴館裡舞踏大に行はるゝの時といへども、いまだかくの如き舶來的夜臺店の存在を認めざりし也。當時人の相會せんとするや、まづ植半、八百善を推す。しかるにやうやく近くに及び、植半、八百善は松田、雁鍋となり、しかうして松田雁鍋はおでん屋となり、しかうして、さらにおでんやはビヤホールとなる。世事繁忙にして人心簡便を尙ぶの余、これを致したりといふといへども、果して簡便を尙ぶとせば、十年以前歐化熱全盛の當時に於て、すべて流行したるべきもの、しかも當時流行せずして今日さかんに行はる、すなはち簡便なる好尙のいたす所にあらずして、輕佻浮薄なる性情の反映たる、知るべき也。

さらに、これを我文學界に見る。我文學界、今歲に入りて、大作跡をたち短篇すこぶる世に歡ばる。さきに一人の所作を以て全卷を滿たしたる『新小說』、今に在りては二人乃至三人四人の所作を收め、賞を懸けて小說を募るもの、みな長篇をもとめずして短篇を欲すと云ふ。所謂批評家先生の所論、長きも三四頁、短きは僅に十行二十行に過ぎず。かの鷗外氏の山房論文の如きは、見んと欲して見ること能はざる也。長篇必しも優れたるにあらず、短篇また必ずしも劣れるにあらず、文短ふして意長きを得ば、すなはちこれに勝るなしといへども、今の文家先生のお手際を以てして、かくの如くなるを得べきか、疑なき能はず、長篇衰へて短篇榮ふ。あゝ、これ文壇のため、慶すべしとなすか。

今や西鄰事あり。我國列强と軍を聯ねて北淸に戰ふ。帝國の民衆、禍機の迫るを恐れてはなはだ憂惧す。戰報至る每に魂を消し、語るに會ひてたちまち眉をひそむ。天津の包圍攻擊に驚き、公使の殺害に驚き、新聞紙の雜報に驚き、號外に驚き、風說に驚く、それ大國の民衆はすべからく襟度濶大、事に臨んで從容自若、慌忙中、綽々たる餘裕を存する所あらざるべからず。何爲ぞ紛々たる悲語に驚倒して身を忘れんとはする。戊辰の變、官軍東下して山王臺を圍むや、雪池先生、

砲聲を聞いて悠然、ホーセットの經濟學を講ぜしといふにあらずや。民衆はすべからく這般の襟度あるべし。鄰邦の變を聞て、たちまち恐懼し、狼狽し、驚倒し、文學を忘れ、美術を忘れ、宗教を忘れ、教育を忘れ、國を擧げて一切忘れ去るが如きは、決して偉大なる民衆の襟度といふを得ざる也。殊に來るべき將來に於て、大に盡すべき任務を負へる今の日本民衆にありては、決して稱すべきことにあらざる也。

請ふらくば、大なる地震あり、大なる海嘯あり、六十洲の山川を悉く壞裂して、四千万の民衆をすべて壓殺し了らんかな、民衆すでに亡ぶ、かの悪むべき輕佻浮薄の風、また地下に斂して、神洲の山河、こゝにはじめて洗發せらるゝを得ん。しかる後、吾人は次いで來る新代の民衆とともに、徐に帝國の國是を定め、執るべき方策を案じて、二千五百年來、外敵の侮を受けざる日東帝國をして、宇内邦國の第一位に進め、列强をして仰いで而して仕ふる所あらしめん也。

●文士優遇の議

文士優遇の議、この頃、文士の間に喧傳す。以あるかな、優遇論の起る。そも〳〵今代の我社會は、文士を遇することあまりに冷酷に過ぎたり。他にありては、大臣宰相の地位、待遇、報酬を得べきもの、文士としては判任相當の地位、待遇、報酬に居らざるべからず。彼をとらずして是を選ぶ、その罪もとより業を撰ぶものにありといへども、同一の勞力、同一の苦心を有して、かくの如く相懸隔する、むしろ憤慨の至にあらずや。文學に勞すること最も多くして、得ること最も少なき職業、文士は社會を感化すること最も烈うして、社會に疎んぜらるゝこと最もはなはだしき人物、職業としては最も廉に、人物として最も數奇なるもの也。これを西歐に見るに、ポエット、ローリエートの官職すでに存して、文士優遇の道、はなはだ備る。今代の我社會、組織いまだ整はずといへども、文士をして薄倖に泣かしむる、これ豈社會のために耻づべきことにあらずや。優遇論の起るは、まことに以あり。優遇論は文士の私憤にあらず、愚痴にあらず、天すなはち文士をして今日の社會を責めしむるなり。社會の上流にあるもの、容を正しうしてこの天意を聽かざるべからず。

◉綠雨氏の文壇保護說

齋藤綠雨氏、病に居て意氣ます〳〵旺盛、その吐く所の氣焔霽に依つて虹の如し。この頃『新小說』記者のために、文壇保護說を述べて、その方策を講ず。氏は嘗て文士の保護を以て宮內省に仰くべしといひたるの人、吾人の記憶する所を以てすれば、優遇論を唱ふるもの〻うちの嚆矢なり。吾人また氏の「帝室と文學」一篇を得て本誌に收めたり。『新小說』の所說、これと相關するを以て、すなはちその要を抄す。氏はまづ近時文壇不振の因を以て、社會が小說家を保護せざるに歸し、さらに進んで上流社會が趣味を解せざるを難じ、而して、その保護案を立て〻曰く、

其處で今の文壇の保護なり、奬勵なりの第一着手として、競爭製作をやらして見たいと思ふのです、畏れ多い事ですが、此計畵は帝室に仰ぎ奉りたいので、特に　皇后陛下の御名の下にやつて戴ければ、此の上もない事と思ひます。さてこれを募集するには、一般の人に賞を懸けて行ふと云ふのは普通でもあり、公平らしくもあるが、それでは實際くだらぬ物ばかり多く集つて、選評者が煩に堪へまいし、今の所で隱れて居る天才のあらうとも思はれませんし、猶一歩進めて論じつめれば、靑年を誤らすやうなことがないとも云へませんから、今は知名の作家を五人か七人指名して其の範圍でやつたら宜からうと思ふのです、

その期限は半年もしくは一年位にして、其の間は相當の手當を與へて、專心競爭製作に從事させる、出來あがつたら、審査を經て帝室から優等者の名譽を表彰し給はるといふやうな組織に願ひたいので、それで隔年位毎に三回程も擧行して戴けば其の先迄もとは申上げなくていゝと思ひます。

困難な事は選評とか、審査とか云ふ一件であらうけれど、宮內文部兩省に命ぜられて、朝野を通じて五人程の適任者を選擇して、選評委員を囑託すれば宜からう、審査の法には點數で極めると云ふ行方もあるが、五人の合議制を取つて、熟議の結果で優劣を定めるのが、是亦一番宜からうと思ふ。それで特に　帝室に對して此の事を乞ひ奉るといふのは、第一優等者の名譽を表彰するに十分なる事、第二募集命令の自由に行はれる事の爲で、若し　帝室で御聽許がないとすれば、皇族方を賴み奉つてもいゝ。又別に華族か富豪かの手でやるなら、是れは命令ができないから、懸賞と云ふ事にするが宜からう。何にしても、競爭製作と云ふ事は今の世には最も適當な文學の保護奬勵策だと考へる。

知名の作家を五七人指名して、競爭製作の應募範圍を限ると云ふのには、不平を鳴らす人もあらうが、極平かな心持で考へて見たらば、今の所で露伴、紅葉、四迷、柳浪の四君と一時新進作家と云はれた天外宙外の二君位を推薦するのには誰も別に故障はあるまい、更に此上に二人程も加へたらば、一向に差支へはなからう。

名譽を表彰する方法は、帝室から金牌、銀牌、銅牌を賜はると云ふ位の簡單な事でいゝが、願はくば優等の受賞者には拜謁を仰付けらるゝと云ふ所まで進めたい。

競争製作を撰評する審査員抔も森林太郎君とか、近頃は太變に小説が嫌ひになつて居られるやうではあるけれど、坪内雄藏君とか、看板の大きいのが入用なら、末松謙澄君とか云ふ所にして、是にもう二人もあれば、應募者に於ても異存はながりさうに考へる。應募小説の長短は隨意にして置きたい。

文士の優遇を唱ふるものは多し。しかれども、その策を講じたるものはいまだあることをなし。これあるは實に綠雨氏を以て首となす。保護案の一策、果して實行せらるべきか否かを知らずといへども、身病牀に伏してなほ文壇を忘れず、他に卒先して法を策したるにいたりては、その勞終に多とせざるを得ざる也。

●上田氏の文士優遇論

綠雨氏と時を同ふじて、上田萬年氏また文士の優遇を説く。説く所、敢て地を拔くの概あらざるも、この人にしてこの言ある、いたく喜ふべし。説に曰く、

我小説界不振の原因、其の罪一は文士彼自身に、一は社會にあり。社會の罪とは何ぞ、文士を遺却(ヂグレクテッド)することと之なり。往々傑作の出るあれは、讀書社會は口を極めて稱揚すると雖とも、彼等は單に稱揚するのみ、其の作家の地位を高めしめんとするが如きことあらず、則ち小説家は終生小説家の範圍に滿足せしめんと欲す。日本の讀書社會は彼のトルストイ伯に向つて平和會議の意見を聞かんとするが如き、或はドレフイス事件に關しゾラが重を爲せるが如き、類を我作家に向て望まざるなり。故に文界改良の一方法として余は社會は文士を優遇せんことを望む。其の方法としては公の集會ある毎に必ず文士を度外視せず、天長節の夜會の如き先づ小説家を招待して其の席に列せしむるを要す。

更に小説家の側より見るに彼等も亦委靡振はざるの觀あり。彼等は所謂小説家なる範圍を作り、其の以外には敢て出づることを希はざるの風あり。彼等の交際は那の邊に迄及びつゝあるか、教育界か、否ず、政治社界か、否ず、實業社界か、否ず、或は是等の社會の一端に觸れつゝあるべきも、其の内部に迄及べりとは云ふを得ず。彼等の描く所にして其の交際の範圍を示すものとせば、甚だ其の交際社會の低さを笑はざる能はざるなり。

氏は現に專門學務局長なり、政府と文士の間を周旋するに、すこぶる便利の位地にあり。その主義にして、すでに這般思想を懷かば、何ぞ進んで兩者の間を周旋せんとは力めざる。

通信

●入峽紀行

菅 眞 海

拜申着後小信差上候儘疎濶打過候段御宥赦可被下候其後不相變無事消光罷在候條御懸念被下間敷大兄も御無異愈々健勝と遙祝罷在申候偖何

から申上候て宜敷や順序も立ち不申候得共來途の狀況略報致候て後ち當地の模樣に覗及可仕御存之通り今回の旅行は三峽の險を通過候故隨分危險も有之候得共其風景の絕奇に至ては世界有數と持囃さるゝだけありて只々雄壯大觀と申外無之實に久しぶりに此かる奇景壯觀に對し胸中を一洗したるの心地致候三峽とは黃牛峽巫山峽瞿唐峽にして宜昌より一日程の處に黃牛あり二三日目には巫山に至り五六日目には瞿唐峽を出でし處は夔州府と申し江の左岸に白帝城墟及孔明八陣布石の名所有之三峽共今回旅途の半分よりは下流に相成候峽と申は兩崖高く聳へ江流渾を爲して相迫り候處にて灘と申は江心段を作り甚だしきは瀑布の如きものを申候兩者共頗る危嶮に候へ共此を通過する際は其風景を見んとして何も打忘れ候有樣實に筆紙の盡す所に無之候小生の日記を略して左に途中狀況尊覽に供し候」

○三月十二日晴身は宜昌に在り下午城壁散策有名なる關帝廟に詣す夜は東肥支店の饗應にあづかる余等傭ひし小舟來る所謂五板(ウーメン)なるものにて慾懦の設なく起臥頗る窮屈外に劃子(コワツー)なる客船あれども舟脚遲々故に此分を擇びしなり長六間巾一間許り舟子八名其六は柴を操り其一は舵を管す老板(ラオパン)(船頭)年紀廿二容貌醜周旋尤も勗む大概月餘の舟住なるを以て寢食に必要なるもの皆積込みボーイ一名傭ふて炊事を爲さしむ

○十三日準備完了午後一時解纜天氣平靜暄暖適體遠征の門出吉と祝盃を擧ぐ宜昌を去る僅かに數里(以下皆淸里)兩岸窮聳身は已に万峯層重の裡に入る危崖絕壁河身を壓して欹立し仰ひで天半を望めば崖上崖を積み壁頭壁を蔽ひ奇峰怪嶺攢簇峙聳す斯に至るもの先づ荒膽を挫かれざるはなし而も是れ三峽の入口のみ日暮平善坦に著す此夜月色如晝遠近山影濃淡色を分ち犬聲人語幽かに峽間に湧く半夜舟を出て岩上を步す

○十四日未明開紫天候陰澁風力威あり帆腹滿飽舟飛ぶかと疑はる行く四十五里黃陵廟に達す人家一帶山腹に沿ひ林樹點々風景不凡茲にて幾條の竹繩を購ひ急灘を溯る用意を爲す已にして塔洞(ダートン)灘を過ぐ舟子他の村民と曳々聲を發して小舟を引き漸くにして通過するを得たり晚に馬肝峽を過ぎ新灘に泊す時に雲脚矢の如く忽ちにして雨滴篷背を撲つ衆一縮みとなり寢に就く

○十五日曉起すれば昨來の雨は雪と變じ沙岸白皚然此日は新灘の一急湍を過ぎ巖陰に維纜す

○十六日天未だ晴れず層巒複嶺雲霧の間に隱見し奇景云ふべからず數灘を過ぎ歸州縣に至る(左岸)此は有名の酢甕さて夏時水漲れば巨渦盤旋尤も危險なれども今は江心に亂石の累々たるを見るのみ午後洩灘大八斗灘牛口灘を過ぎ巴東(メートン)縣に達す此日寒氣猶嚴然れ共兩岸の麥畦綠を染め李桃亂發春色已に峽中に入るを見る(巴東縣にて一奇談あり小舟纜を維ぎしは晚暮なりしが余二三の舟子と上陸街市を通行せしに舟子は喫烟店に入り余一人猶も奧深く進みし際忽ち數百の市民に圍まれ洋鬼子の聲諸共四五の小石頭上を飛去り箇は珍事よと這々の躰にて皈舟せしが先づ事無を得て目出度かりし此より怖氣立ち夜間は決して上陸せざりし)

○十七日巴東出發廣東沱を經て巫山峽に入る左右絕壁之を仰げば頭腦を紋せらるゝの感あり皮石(ピーシー)は南岸の小村にして即胡北四川兩省の分かるゝ處なり此邊に鐵棺峽の名を得し鐵棺に似たる奇巖あれ共想ひし程のものにあらず舟行里餘所謂巫山十二峰を認む峰膚潔白恰も拭くが如く蟲きの黃牛馬肝と趣を異にし矗々亭々天表に聳立す巫山縣の上流數里の處に停船す

○十八日曇にして風あり帆走最も快下午一點鐘瞿唐峽に入る斷岸千尺直に水際より峙立ち大斧削成轉た造化の快腕を賞せしむ只惜む此峽延長僅かに里餘なるを加之他の二峽に比し壯偉或は勝るも風致足らざるを殊に

崖際茅屋草舍の點在せるは其尤も俗なるものなり峽を出で右手に白帝城墟を望み猶進みて孔明八陣圖を設けし河磧を過ぐ大石小石數十塊碁布せるものゝ由なれ共深く沙底に沒し見るを得ず此處臭鹽磧さて砂岸に小井を穿ち食鹽を製造す白烟幾抹初めて見るものをして奇異の想あらしむ聞く四川一省食鹽の產出最も多く就中富順縣近傍は其中心なりさ午後三時夔洲府に着し三峽通過の祝宴を張る府は左岸の一大市にして船舶湊至す
○十九日未明出帆午前は風ありしも午後不然纔かに百十里を過ぎ廟基子に泊す夔州を過ぎ眺望稍豁兩岸田園相連らなる而も急灘激湍猶少なからず操舟の難思ふべし夜風邪發熱す雞卵を啜りアンチヘブリンを頓服して寢に就く石塚野邊亦時氣に冒さる此日偶然詩を得たり十五六年來の珍事さす

幾嘗辛酸氣更雄　區々何必說窮通
長江棹上三千里　身在淒煙苦雨中

○二十日雨ふる逆風なるを以て終日曳船午前十時雲楊（ウヰンヤン）縣を過ぐ家屋整齊晩に新々灘に碇泊す昨日來詩思浮び又一詩を得

竹樹叢々村又村　纔過峽國別乾坤
山維溫秀水清冽　風景依稀似故園

頃日多少の難破船を見ざるなし處々に紅船さて紅色の兵船碇泊す舷頭に大砲を設け夜中時々放發して賊難に備ふ
○廿一日彼岸中日なり我國なれば士女綺羅を飾り徘徊旁午するを見るも千里異鄕の客は孤蓬窓下に灘聲の鑿々たるを聞くのみ朝新々灘を溯る激流急駛殆んど近づくべからず不得已荷物を上陸し漸く通過す
○廿二日晴なるも濃霧深く罩む午後二時予等步して万縣に入る万縣は重慶宜昌間第一の都會にして市街は丘腹に連り小溪其間を劃して細流を通ず市の背後は奇巖怪峰聳立し風景絕無余等市內を通行せしに外人は猶珍らしきにや市民尾し來り喧囂比なし夜に入り知縣の使者來訪す此夜同行の沖長松舟中より沙岸に上らんさして誤て足を滑らし河中に落つ余等雞然の聲に驚かされ蓬外を見れは暗中聲ありしきりに助を呼ぶ即曳き揚ぐれば濡鼠の如く帽子の何も皆流失せしめたり
○廿三日昨日有詩

朱欄粉壁幾樓臺　城市半傍丘腹間
別有詩人看不飽　奇峰當面極崔嵬

此日煙霧濛々終日逆風なるを以て帆を掛くる能はず六十里を經て讓渡（ラントー）場（チャン）に至り泊す
○廿四日瘴靄濃密昨日に異ならず舟武林關（ウーシンクワン）に停り桒肉を購ふ米價は一斗(六升位)六百文なり陳豆腐（チャントウフ）さて味噌を塗りたる如き豆腐を買ふ初めて支那に入るもの食ふ能はず而も余の大好物なり西界陀に至り日暮る
○廿五日拂曉雨ふる暫くして歇む江霧未だ晴れず解纜間もなく右手に石堡塞を見る原野の中央に巨巖高さ三十余丈のもの亭然さして天半に屹立し十二層の樓閣趾より起り以て巖頭に至る奇觀さ云ふべし

巨巖屹向半空衝　巓有梵宮層幾重
奇境比來耶馬溪　恍聽羅漢寺中鐘

晩に連子磧に碇泊行程八十里
○廿六日雨ふるこさ昨日に異ならず出船間もなく忠州を北岸に認む白堊樹間に隱見し美景畵も若かず白樂天等の流滴せられし處さ聞く此邊河幅濶大十餘町に及ぶ

長江入峽幾縈彎　舟向千峰万嶽間
見至忠州天漸豁　巨浸一碧大於灣

余等舟中の日課は語學にして原田井戶川教習の任に當る井戶川又英語を學ぶ

○廿七日天稍晴る終日舟を曳く余等亦崖邊を歩す長江の左右岡塲遥々さして連續し麥圃一望青氈を敷くか如し四川の豐饒一端を見るべし豐都縣夜泊此地は道家の稱して冥獄所在地さするさころ有名の老子廟あり

○廿八日江流稍緩舟行快小蕪（シャヴエン）停泊

○廿九日雨ふる午後五時涪州城を過ぎ李渡に泊す李渡夜泊の詩に曰く

一穗殘燈夜意幽　酒醒蓬底易催愁
嗟吁未就平生志　人在長江万里舟」
客愁牽夢々難成　欲喚棹郎飛巨觥
宿霧更闌催雨意　灘聲枕上聽分明

○三十日夜來猶雨午前十一時寧石（コンスー）を右岸に認む一大石橋を以て名あり此邊田野愈々開らけ岡丘林樹多し晩に一艢舟の西洋宣教師を載せたるを認む長壽縣に停機

○三十一日大霧四塞咫尺を辨せす午餐後余等扇背沱（シャンペイダ）にて下舟沿岸を歩す村落の風致我邦さ酷似す只滿目の罌粟花時漸く開花の節に向ひ紅白赤紫相競ふて美を呈す四川に鴉片の産出夥しく謗に「四川に行きて喫烟を見習へ」さいふ位なれば栽培の盛想ふべし此夜下洛磧（シャローチー）に泊す舟子喫煙の爲め上陸舟中隻影なし

驚看僻地亦華奢　日暮維舟感慨加
人語幽邊燈影小　隔江箇々賣烟家

○四月一日始めて放晴木洞鎭（ムートウ）に至り順風を得布帆一幅風を孕みて駛走晩に唐家沱に着す税關あり關人駐在す此地重慶を去る三十里長の旅行も今夜限りさ衆意欣然此日亦詩あり

本洞西去近渝城（重慶）　水碧沙明送又迎
認得巖眉一奇寺　喚來舟子問其名

○二日未明舟子を喚起し開纜行く十五里大佛寺を過ぐ一大石佛の金碧燦々なるを認む已にして帽子山あり已にして江北の風水塔あり舟漸く重慶城下に至り嘉陵江に沿ひ朝天門外に着す于時大雨滂沱午後三時一行無事領事館に入る

新刊批評

●東洋倫理學史　上

木村鷹太郎氏著
松榮堂發行

木村鷹太郎氏が十年間に亘れる大著述にして一千余ペーヂに上れる彪然たる大部一見人を驚かさんはかりの美裝をなせり本書は第一部支那の部にのみ止りたるものにして總論に次て第一編に於て支那倫理學の萌芽を二章に分ちて論叙し第二編に於て周末倫理學說を管子より老子孔子子思李斯始皇帝等十五章に分ち歷說し附錄さして「倫理學は實踐學に非す」の一文を附せり氏が學說上の論斷に至ては雜駁さか輕卒さか兎角の批評を免れざれども東洋倫理學史さしては未だ完全の編述を試みたるものなきの今日獨力以て是の如き大業に從ふ氏の膽勇を賞せざる可らす文章亦明快にして讀み來て活氣の自ち紙上に横逸するを覺ゆ而して本書の如き餘り賣れそふにもなき者に向て斯く迄美裝を附して世間に紹介したる書籍店松榮堂の篤志の如きは尤も感ぜさる可らす（定價金貳圓八十錢）

●心理學教科書

牧瀨五一郎氏著
大坂三木書店發行

大坂三木書店より發行せる二十世紀教科叢書の心理學編さして文學士牧瀨氏の著述せしものにして約略簡易を旨さしたれば初學者に於ては尙一層の詳說を求むるものあるべしさ云へども心理學なる者を概知するに於ては素より遺憾あるなし、本書總說心理學の定義より心理學の分科に及

び各論第一知識第二意志第三感情に及び各論各章を分ち之を叙說し讀み來て頗る著者の新意見を窺ふに足るものあり附錄として精神病學哲學小辭典を附せり辭典の如きものは尤も珍とすべきものといふべし

（定價金五十錢）

●倫理初步

元田作之進氏譯
警醒社發行

右はピー、ビー、コメキース氏の著したる「プライマー、オブ、エシックス」を譯したるものにして眞實、服從、勤勉、正直、忠實、正義、禮義等十數項に分ちて尤も簡明に說き及ぼされたり、原著者は米國の實業界に重要の地位を有し青年教育に於て尤も熱心なる人なりと云へは一讀の間青年品性の治鎔に於て尤も力を致したる迹を見るべし

●中江藤樹

得能新海二氏合著
裳華房發兌

偉人史叢第二輯第五卷として得能文、新海正行二氏の合著に成れるもの中江藤樹の吾國道學界の偉人たるは何人も知る處なれども之を史的に論評したるは本書より始る總して九章藤樹已前の儒教より次第に藤樹の性行經歷地位に及び藤樹の一生及び其前後の吾國の思想界の趨勢を評叙して亦憾なし附錄藤樹の詩歌を收む

（定價金三十五錢）

●支那文明史

白河國府二氏合著
博文館發行

帝國百科全書第五十二編として出づ支那文明の源泉及び支那民族學術宗教政治文學歷史地理建築土木文學繪畫音樂戲劇等に至るまで四千年の古國か進步發展し來れる道程を歷叙したるものにして詳細に評批せんと欲せば素より本書の如きものの能くすべき所にあらずと雖も支那文明史のスケッチとしては稍成效したるものといふべし

（定價三十五錢）

●海舟遺稿

龜谷馨氏編
東京鴻盟社發行

東久世竹亭先生の校閱にして、天尊龜谷氏の編する所漢文あり和歌あり近躰文あり俳諧あり、朗々誦し來ていつもながら偉人の溫容の彷彿として顯はれ來るが如きものあり、つまらなき雜誌の詩文を讀むよりも幾倍の益あるや言を俟たず、口繪に東久世伯自筆の海舟翁の肖像ありて目錄のなきは遺憾なり

（定價參拾錢）

●孔明

安東俊明氏著
博文館發行

世界歷史譚の十四編である、紙數はいつもより多けれど挿畫は少く、中身は三國史の抜書き、叙事奇もなく變もなく尤もまづき抜き書きとみれば大なる間違ひはない

（定價拾三錢）

●漕艇教範

日本體育會發行

讀んで表題の如く、伊東海軍大將の題字あり、玉利海軍大佐、小笠原海原少佐の序文あり、海國男兒必讀の書

（定價金貳拾錢）

●國語漢語類語作文錦囊

井上敏夫氏編
博文館發行

部類天象、地理、四季、人事、災害、動植、財貨、叙事、叙情、形容等の十編に分ちて更らに小部に分ち各部國、漢、類の三語類を揭ぐ同種類の書にしてはや〻趣構の異なれるもの

（參拾五錢）

●晋其角　雨華抱一

岡野知十氏著
裳華房發行

文藝叢書の第一編と第二編なり、前者讀みたれども後者は未だの讀まず、筆を取て紹介せんとす、偶々二編の緒言を見れば、

しかもし之を讀みて萬が一にもこの著略ぼ期せしところを領略せりといふものあらば、そは例の豬冒をのぞきて早く合點し、筆をとりて匆々紹介を作らるゝの親切に過ぎざらむ

と評者も亦此類、しかも、他に通讀せるものあり告げて曰はく二者共に批評精緻、着眼警奇、近來の好著、特に晉其角は尤も面白く讀まれたりと、客あり告げて曰はく、氏はもと農科大學にありし人にして頗る科學的智識に富める人、人の思惟するが如き老朽俳人等の群にあらざるの人ありと以て氏の造詣を見るべし、即ち記して讀者に紹介す（價十五錢）

●偉人源信

舟橋水哉氏著
京都法藏館發行

家庭歷史譚と云ふものの第一編にして源平時代に於ける高僧源信和尙の傳記なり、家庭に於ける佛教趣味の好讀本なるべし　（價十五錢）

●會話活法

イーストレーキ氏著
大日本英語學會發行

イーストレーキ氏の會話書は頗る多けれども本書は其最新のものにして結構題目共に頗る斬新例ずれば、甘口（第一）變な臭氣（第四）お饒舌り（第五）宛外れ（第六）彼れでも學者か（第十）聞きたがり（第十六）混返し（第十九）おふとさん（第廿三）等にして各章の下別に「ノート」を付して初學者にとりては頗る有益のものなるべし　（價四十錢）

●西伯利亞蒙古旅行
金剛石の原野

長田秋濤氏譯
春陽堂發行

何れも秋濤氏が大著譯の十二大奇書の一なり、一は北方寒地の紀行、一は南方熱地の記事、以て寒殺すべく以て熱殺すべし、雪と金剛石共に眺むれば蓋し銷夏好伴侶ならんか　（價各參拾錢）

●七寸鞋

久保天隨氏著
內外出版會社

旅行と紀行文と、詩人と健筆家とを以て名高き小僊公子靑琴久保天隨君の紀行文集の一なり、えせ遍路、故國の風色、三河北部の勝地、妙義山の秋、等を收む、附錄に遊船獄記、孤劍飄零集を附す、何れも二度の務めとおぼし殊に可笑しきは題目なり客あり日はく書店前に立て「七寸鞋」くれと云はゞなんだか變にあらずや、天隨君も古鞋なげ出す樣ではもー種がなさそうだと呵々　（價參拾五錢）

●金字塔

高安月郊氏作
著者發行

劇詩重盛の著者高安月郊君の新著なり、標して社會小說と云ひ、維新以來社會の變遷を景として朝河光世が一編の夢物語、記者は未だ精讀せず判斷は讀む人に委す　（價四十錢）

●諸國小觀

浩々歌客著
大坂金尾文淵堂

角田君浩々歌客が詩、文集なり、愛すべき小册子之を繙けば氏が文才と批評眼を併せみるべし、但し詩國小觀と云ふ詩の國への旅行記と云ふの意味にはあらず　（價四十錢）

●佛教心學人のゆく道

佐竹智應氏編
京都顯道書院

佛教によつて人道を說くことと表題の如き實に有難き小册子なり、信者への贈物などには恰好ならん

●七里恒順師言行遺錄

三原雪濤氏編
教學報知社

偉人德者の言行を傳ふるや可なり、然れども偉人德者の言行は唯に筆に

依てのみ傳へらるゝものにあらず、徒らに模糊塗抹して却て其人の徳を損ずるが如きは其人を敬するにあらずして孔子の所謂褻天と一般吾人其何の益なきを知る、此書廣く大部をなせるやよしと雖ともしかもこれを以て七里恒順師を盡せるものにあらざるは著者が異論なき處なる可く且つ材料の尤もありふれたるもののみなるが如きは著者の勞を謝すると共に尙物足らぬ心地す

●新佛教　第一號　佛敎淸徒同志會發行

新佛教を主唱する一部の有志者の發行せるものにして本號には「我徒の宣言」と題したる同雜誌の主義抱負を告白したる論說を收む尤も讀むべきもの也

（定價金七錢）

●名物男　小栗風葉氏著　春陽堂發行

風葉氏の處女作、涙六もの丶流行をあて込んで作れる俠客物、開卷まづ序文の長々しきに膽をつぶし、次で口繪のあだつぽきに二度吃驚す。春陽堂もこんなものを出版するやうにては余程の文壇不振と見えたり。たゞし序文の一章は新作家初めて出づるの時の苦衷思はれて同情に堪えず小說家にならんと欲する年少は、まづこの序文を讀んで思案をしなほすべし

（定價參拾錢、吐虹生）

●新小說（第五年第八卷）　春陽堂發行

島村抱月氏の待問あはれ、山峯荷葉氏の裁縫指南所、廣津柳涙氏の目黑小町、市川雨聲の意地がらみ、幸田露伴氏の當流人名辭書、後藤宙外氏の文士と長壽、島崎藤村氏の海草、齋藤綠雨氏の文壇保護說等

（定價二十錢）

●太陽　第六卷第八號　博文館發行

十九世紀と題して太陽の臨時增刊として發行したるものにして論說に大隈伯加藤博士等十數家の十九世紀に關したるものあり、次は所謂「十九世紀」にして高山文學士の總論あり上編第一部歐羅巴史は幸田文學士第二部亞米利加政治史矢野文學士第三部產業史河津法學士第四部學術界佐藤螢江笹川諸學士第五部文藝史上田文學士第六部敎育史熊谷學士第七部宗敎史眞岡學士下編第一東大陸諸國笹川學士第二木寺學士等也口繪の寫眞銅版尤も美麗也

（定價五十錢）

●ほとゝぎす　第三卷第八號　ほとゝぎす發行所發行

俳諧雜誌ほとゝぎすの臨時增刊として發行せるもの鼠骨の「放免」虛子の「丸の內」碧梧桐の「肴屋」例の子規派の寫實的筆鋒に成るもの各篇皆面白く讀まる殊に鼠骨の文尤も上乘なり

（定價金十錢）

報　道

時事日鈔

六月二日　皇太子同妃殿下京都御出發還啓の途に即かせらる

四日　伊藤侯松方伯前後して新內閣組織の勅命を辭したりとの說あり

五日　淸國派遣軍艦笠置號乘組士官水兵上陸の電報天津より着

十一日　各大臣及び伊東軍令部長寺內參謀次長等首相邸に參集し淸國

暴動問題に關し凝議す

十五日　德大寺侍從長大命を帶して首相邸に臨み現職に留るべき旨を傳達す

十七日　福島少將渡淸の爲め西下す

廿二日　肥後丸服部中佐以下の屍躰及び負傷兵を載せて佐世保に着す

廿六日　樞密院會議を開き淸國事件に關し償金五千萬圓流用の件を可決す

三十日　名國公使尙北京に在るの報到る

教育彙報

○全國聯合敎育會議案　帝國教育會より明年開會する第三回全國聯合教育會に提出する議案として決したるものといふは左の如し

第三回全國聯合教育會議案

(一)國民學校制度の要領を左の如く定むること

一、小學校を國民學校と改稱し國民の義務教育を施す所とすること

二、國民學校の修業年限を六ヶ年とすること

三、國民學校の必須教科目は修身、國語(讀書、作文、習字)算術、躰操の四科とすること

四、國民學校の授業時間は一日四時間とすること但し一時間を增減することを得

五、國民學校は土地の狀况により半日學校の制を取り同一校舍を午前午後の二回を使用して教授するを得るものとすること

六、國民學校の外に市町村は中等以上の教育を受けんとするものゝ爲に特に國民學校同等以上の豫修の學校を設置することを得るものとすること

但し豫修の學校卒業者は就學義務を完了したるものと認むること

七、國民學校の學校長及び教員は國の官吏となし其俸給は府縣稅を以て支辨し國庫より其幾分を補助するものとすること

八、國民學校は授業料を徵集せざる者とすること

但豫修學校に於ては此限に非ざるものとすること

(二)中學校を普通及び豫修學校の二種となすこと

(三)小學校に於ける書簡文は候文躰を廢して普通文躰となすこと

(四)中央に中央視學局を置き又全國を若干の視學區に分ち地方視學局を置くこと

○文部省の海外留學生　今度左の數十名を海外留學生に任命したり

△鐵道に關する事項(三年)米佛英伊　服部鹿次郎△經濟學(三年)獨　河津暹△製藥學(三年)獨　丹羽藤吉郎△外交史(三年)佛獨英　立作太郎△生理學(二年)獨　後藤元之助△衞生學(三年)獨　横手千代之助△圖按科(三年)英獨佛　武田五一△獸醫學及馬學(二年)獨　今井吉平△土木工學(二年)獨　那波光雄△耳鼻咽喉科學(三年)獨　木原岩太郎△審美學(三年)獨佛伊　高山林次郎△數學(二年)獨　河合十太郎△精神病學(三年)獨墺　今村新吉△體操(一年)佛獨英　坪井玄道△農學(三年)獨　稻垣乙丙△農業經濟及農政(三年)獨　高岡熊雄△獨語(二年)獨　藤禎禎輔△病理解剖學(二年)獨　柏村貞一△英語(二年)英　夏目金之助△化學工業(一年)英獨米　守屋物四郎△工場管理法(二年)英獨米　齋藤孝△獨語(二年)獨　山口小太郎△ピアノ及作曲(三年)獨　瀧廉太郎△應用化學(二年)英獨　蜂屋貞興△機械工學(三年)英獨　岩根友愛

○關西敎育大會　富山市に於て去月開かれたる同會討論の問題等は左の如しと

▲討論問題

一、小學校女教員の服制を定むる可否果して可とせば其程度並に品質如何

二、高等小學校並に中學校に於て毛筆鉛筆何れを可とすべきか（以上西礪波郡提出）

三、小學校に於ける一學級の兒童數を五十名以內となすの可否

四、就學義務を履行せざる者に制裁を加ふる可否（以上新川郡提出）

五、小學校教員をして直ちに中學校並に高等女學校の教員たるを得ることを主務大臣へ建議するの可否

六、平假名に於ける從來のいろは的讀方を廢し五十音の讀方に變更するの可否（以上富山市提出）

▲建議問題

一、明治三十三年一月勅令第二號に定められたる小學校教員給料市町村義務金額を增加せられんことを其筋へ建議すること（島根縣提出）

二、小學校教員俸給を縣稅支辨になすことを文部大臣に建議すること

三、小學校正教員の免許狀を全國に通し有効ならしむることを文部大臣へ建議すること

四、教科書審査委員に小學校教員を加ふることを文部大臣に建議すること（以上上新川郡提出）

五、小學校教員判任待遇廢止を文部大臣へ建議するの議（富山市提出）

六、道廳府縣に學務部を設置し學事の振興を圖られんことを主務省及貴衆兩院に建議すること（廣島縣提出）

▲協議問題

一、教員補充の方法

二、學校基本財產蓄積に付最も行はれ易き方法如何

三、一般國民に教育勅語の主旨を徹底せしむるの方法（以上上新川郡提出）

四、關西府縣聯合私立教育會を常設し每年一回其大會を各地に開くの議

五、學校外に於ける生徒監督の良法如何（以上富山市提出）

○國語漢文科の合併に就て　今回改正せられたる師範學校、中學校、高等學校教員檢定試驗は從來別科なりし國語漢文を合して一科となしたるに付き其理由とする處を聞くに本來國語科の旨趣は日常普通の國語漢文に付き檢定する筈なりしが國語と云へば現今既に死語に屬したる古文の鑿穿實際に遠き文法を喋々するものを以て國語の能事となし漢文に於ても同一の傾向あり兩々益々相反馳して究極する處なきを以て今回の改正檢定法は之を一括して一科となし成るべく日常普通の漢文に就て檢定する方針を執る筈なり。（兒童研究）

○帝國大學の卒業生　本年東京大學を出でたる學生は總計三百七十九人にして各科に分てば左の如し

一法科大學（一百廿九人）

法律學科　七十三人　政治學科　五十六人

一醫科大學（三十四人）

醫學科　廿九人　藥學科　五人

一工科大學（百四人）

土木工學科　廿九人　機械工學科　十二人　同船用機械學專修　十二人　造船學科　十人　造兵學科　四人　電氣工學科　十二人　建築學科　九人　火學々科　一人　採鑛及冶金學科　十一人　土木工學科

一人

（明治卅三年三月卒業）

一文科大學（七十八人）

哲學科　二十三人　國文學科　九人　漢學科　八人　國史科　七人
史學科　十四人　言語學科　三人　英文學科　七人　獨逸文學科　四人　佛蘭西文學科　二人　國史科　一人

（三十二年十一月卒業）

一理科大學（二十一人）

數學科　一人　物理學科　十人　化學科　三人　動物學科　一人　植物學科　二人　地質學科　四人

一農科大學（十三人）

農學科　八人　農藝化學科　五人

而して左の諸氏は學力優等生として天皇陛下より懷中銀時計を御下賜あらせられしものなりと

東京帝國大學法科大學法律學科英吉利法を兼修する者　蠟山長治郎
同　獨逸法を兼修する者　松本烝治
同　政治學科　松岡均平
同　醫科大學醫學科　稻田龍吉
同　藥學科　近藤平三郎
同　工科大學土木工學科　金森鍬太郎
同　機械工學科、船用機關學專修　齋藤眞
同　電氣工學科　荒川文六
同　採鑛冶金學科　舟橋了助
同　文科大學哲學科　吉田熊次
同　漢學科　宇野哲人
同　言語學科　八杉貞利
同　獨逸文學科　武內六造
同　理科大學化學科　片山正夫
同　動物學科　谷津直秀
同　農科大學農學科　岩住良治
同　農藝化學科　鈴木重禮

計　十七人

○新博士　木村孝藏、瀨川昌耆の二氏は論文を提出して醫學博士となり大西祝、白鳥庫吉の二氏は學士會の推薦にて文學博士を授けらる

宗敎斷信

○大谷派の諭達　大谷派本願寺に於ては日本大菩提會々則に基き同派僧俗一般へ左の如き諭達を發したり

明治卅三年六月八日各宗派管長聯合大會に於て　釋尊御遺形奉迎の紀念として日本大菩提會を創立し今般同會本部より會則第三條及施行細則第三條に依り奉迎事務總理兼日本大菩提會理事長の囑托狀を携帶せし勸誘員を全國各地へ派遣せられ候條派內僧俗一般此際護國扶宗の赤誠を以て同會設立の趣旨を翼贊し佛徒たるの本分を盡すべし

明治三十三年六月二十二日　總務　大谷勝縁

○清國宣敎會　曹洞宗僧侶桑原道琳外數氏の同會は頃日趣意書を發し事業を分ちて左の數項とせり

一、明治三十四年九月を期し清國の南部に恰當の地を撰び寺院を借り入れて學黌を開き。清國の兒童を敎育し、兼ねて佛敎の敎義を宣揚

することゝ、
一、本會の資金は假に金壹萬圓となし、全國同志者の寄附を仰ぎて募集するものとす、
一、本會の主旨を賛するものにして金十錢以上を寄附するものは、之を會員と爲す、
但し會員特待に關する規定は別に之を定む
一、募集金額は凡て確實なる銀行に保管を依囑し收支決算は、時々會員に報告することゝ、
一、寄附金者の姓名等は時々適當の雜誌を以て之を報告し、且つ本會の記録に登録して永く紀念となすものとす、
一、本會事務所は當分の內東京麻布區櫻田町五十番地に設置す、

○護法會發起人會　鳥尾得庵居士の主唱なる護法會發起人松本鼎林誠一、池田清助、中井三郎兵衛等の人々は先日高齋寺內一得庵に會合し同會創設に關する協議を爲したる上松本、林、池田、內貴、中井外二氏に幹事を囑托する事を決し正午過ぎ散會し鳥尾子より夫々囑托したりと

○東本願寺の債劵　財政整理の爲め告達十二號を以て債劵規則を發布せりその第一條二條三條は左の如し
第一條　債劵は百五拾萬圓を限り財政の便宜を計り之を發行するものとす
第二條　債劵は無記名利札附にして貳拾五圓五拾圓百圓千圓の四種とす其樣式は會計局長之を定む
第三條　利息は年八分とし拂込の翌月より償還の月まで月割を以て每年一月七月の兩度に之を支拂ふべし

○西本願寺の會衆　總撰擧已に畢り三十四名の會衆それ〲當撰せらる中に八淵蟠龍、本田弘道、一二三盡演、藤井正眞、岡道亮、藤井界雄等の諸氏を見る開會當日には定めて面白き相撲を見物するを得べし

○養育院內兒童の唱歌　例會講話の後、院內兒童は起立して、一齊に唱ふるものは左の唱歌にして、大內居士の作歌にかゝれるものなりと、可憐の兒童、親を知ず、兄を見ざる、世にたつきなき少年が、哀婉凄凉の聲を絞りて、唱へ出す折は、如何なる猛者も、時ならぬ時雨に袖を濕ほすばかりなりといふ、其唱歌する意は、講師の有難き法音に接し、感謝の念を表する、御禮の爲なりとぞ、（政教時報）

甘露の法雨はふりかゝり、　蓮の花は今ぞさく、
微妙の鳥はこゝに啼き、　福聚の海は曇りなし、
上は至尊の御身より、　下は貧しき賤が男も、
誰か佛のみめぐみに、　救はれざらんものやある、
我等衆生も諸ともに、　皆この德を具ふれど、
あはれ凡夫の悲しさは、　無明の雲にとざゝれて、
いよ〱たどる愚痴の道、　たゞありがたや御佛の、
光は我等を導きて、　光明世界にめし玉ふ、

○佛教雜誌記者協議會　印度飢饉義捐金募集方法協議の爲め佛教清徒同志會佛教學會及び本社發起して都下の各佛教主義雜誌記者の會合を去る十一日午後上野三宜亭に開き左の條項を決せり
第一、演說會舉行の件
一、輿論を喚起する爲め來る十五日（淺草傳法院）十六日（芝彌生館）十七日（本郷湯島麟祥院）の三日間演說を開くこと
第二、各社募金の件

一、各雜誌上に聯合會の名を以て廣く義捐金を募集し各社其取次を作すこと

一、義捐金は金四錢已上とし八月三十一日迄に各社にて募集し九月一日事務所に於て結算をなし工科大學の印度人に贈附すること

一、各宗本山及び大菩提會に建議して救濟の爲に大に力を致さんことを勸告すること等

同日會したりし各社の代表者は十六名なりし、

○本願寺內事局　は大洲順道氏入局已來着々大刷洗を施し從來の役員を總免職し熱心剛直なりし秦法勵氏の如きを贊事としたれば今後大に見る可きものあらんといふ

○能海寬氏　一昨年入藏の志を齎らして渡淸し路を四川に取り千辛万苦殆んど目的を遂せんとして能はず途中より引返して打箭爐に在りたる同氏の事に關し在成都の中島裁之氏より在重慶の菅眞海氏へ宛たる書信と云へる中に曰ふ

今回能海寬氏は道を轉して入藏せんとてヒソかに打箭爐を脫し五月二十七日夜成都に入り廿八日敝校を訪はれ候へば十二年ぶり而も異域の地に同窓之友同信なる徒と相會合する事の嬉しさに每日の餘暇は談話に費やし居候處六月一日早朝起程玄奘歸路の道に向ふて前進され候發程に臨て官衙の耳目を避くへき事情あり生は氏を反對の方向に導き東門より出てゝ城壁に沿ひ成都の東北方に至り堀河を渡り、避難渡などゝ命名し無事對岸に上陸し田畝を橫ぎり漸く道を得て相分れ後影より氏の大志の成就せんことを祈りつゝ歸校致候而して校友一人の之を知るものなく今に能海氏は重慶へ向へりとのみ申居候云々

と而して菅氏之に附記して申來り曰く

能海が孤影蕭然万里の異域に向ひし心情被想申候乍而彼は眞に大決心を有し居候由にて當地にても領事館員を初め賞讃せざるものなし彼の苦辛慘憺に對し小生共は只々慚愧の外なく候在京諸友に已上能海の消息御傳言被下候

と眞に然り吾人も亦慚愧の至に堪へず唯同君が恙かなく入藏の目的を達して世界の至寶を得來らんことを祈るのみ

○武田篤初、櫻井義肇二氏　昨年本願寺新法主に隨て歐洲に遊びたる氏等は去月二十五日歸朝したり、

○二雜誌の廢刊　耶蘇攻擊を以て專門となして起りたりし『三眼』は日東新報たるものと合併し內村鑑三氏主幹として一方の噴火山たりし『獨立雜誌』は社員間の紛紜とかにて廢刊せり惜しみても尙餘りあり但し舊獨立社員たりし坂井、西川、安孫子、中村等の諸氏は別に新進社なるものを起し雜誌『東京評論』を發行するといふ、

○佛敎圖書館　播州姬路に見出の如き經營あり盛に贊成者を募集し居れり吾人はかゝる有益なる事業は愈盛大發達せんことを祈るもの也

社會雜事

○本年の夏期講習會

▲帝國教育會夏季講習時間割は概れ左の如し

一國語學	八月一日より仝十一日まで
一教育學	八月一日より仝十一日まで
一地質鑛物學	八月十三日より仝二十三日まで
一社會學	八月十五日より仝二十五日まで

但この時間外一回だけ田端、王子村等に實地探撿をなす

一植　物　學　　八月十七日より仝二十六日まで

以　上

科外講演　尙同會は例年の如く講習の餘科さして高等師範學校教授黑田定治東京盲唖學校々長小西信八文學士芳賀矢一、織田得能(佛教さ國文さの關係)ドクトル藏原惟郭(教育制度論)照井萬湖(書法講話)の諸氏に科外講演を委囑せり

▲國學院夏期講習會　私立國學院にては、來八月一日より三週間、夏期講習會を開き、男女さも入會を許し、歌文解釋(木村正辭、井上賴國、畠山健)文學史(武島羽衣)文法(三矢重松)制度史(松本愛重、熊谷直一郞)等の講演を行ふさいふ。

○學生墮落の原因其救濟法　感化事業を以て職分さする富岡幸助氏は、都下學生墮落の原因及其の救濟方に就て研究の結果、最近の社會に於て左の如く言へり。

(一)書生中墮落したる種類は私塾及び中學程度の十六七歲までの靑年に多し、犯罪上習慣犯の多數さなるは十八九歲頃の墮落より來る者なれば此際に於て改善の道を設けば大に犯罪を減じ得ん

(二)學生墮落の直接原因

(イ)下宿屋の不完全にして飲酒の自由なるこさ、(ロ)高利貸業者が證人さへあれば漫に貸與するこさ、(ハ)骨牌の游戯、(ニ)女義太夫、(ホ)不健全不潔の文學、(ヘ)下宿屋の下女、

(三)同間接原因

(イ)紳士の不德不義、(ロ)師弟の情誼失して學問が買賣的さなれるこさ、(ハ)看護婦會中に書生墮落の誘因あり、(ニ)下宿住居の女學生、

(四)同救濟法

(イ)地方より中學程度の書生を東京へ送らざるこさ、(ロ)東京に家庭的寄宿舍を設け主婦之を監理すべし、今日の下宿屋に快樂の要素少なきは書生墮落の最大原因なり、又た食物の不充分は書生不平の萠芽なり、而して家庭的寄宿舍は舊藩主たる者慈善的精神もて計畫すべし、(ハ)警視廳は取締を嚴重にし放蕩學生の月表を作りて各學校へ延送すべし、(ニ)書生をして敎會又は學會に關係を付けしむべし、

○比日谷公園の設　東京市の日比谷ヶ原を一大公園させんさするの計畫は曾てより委員にて調査中なりしが此程漸く結了し本月初旬に東京市長に差出せりさ云ふ今其大要をきくに左の如し

(一)公園の周圍に六個の大門を設け、一定の時間を以て開閉せしめ、各門を通ずる大道を幅員十間さなし、其兩側に適當の下水道を作り、且つ下水の排出を便にし、巡視員をして時々之を掃除せしむ。

(二)西北隅には小山を築き頂上には二百餘坪の平地を設け、四阿屋數個をしつらへ、其附近には松、熊笹、楓、合歡木、槐等を植付け、其中央には一條の瀑布を懸け、其山麓より少し隔りて大池を穿ち、池邊の岩石樹木に佳趣を添へ、池中には種々の川魚を放ち、處々に八ッ橋を架して、風光を增し、更に池水を南に引きて川さなし、道路さ相交叉する所には土橋若くは石橋を架す。

(三)西南部には隨圓形の芝生を造り、特別の散歩場さなし、東部には完全なる運動場を設け、あらゆる運動機械を設備し、更に此運動場さ右芝生さの中間には櫻樹を植ゆ。

(四)東北部には小丘を築き小亭を散置して遊人の休憩所さなし、梅、熊笹等を以て地を蔽はしめ、北部の一區劃は特に紀念美術館の建築預定地さなす。

(五)中央部は尤も意匠を凝らして設計する由にて、未だ調査の完了を見ざれ共、大要は松、柏、柳等を植へ、其西北に小丘を作り、東南には共同椅子を置き、共同給水栓を備へ、夜は電燈を點ずるに在り。是れ尙委員の設計に留まれ共、吾人は東京市の修飾の爲に一日も早く之が實現を見んと欲す。

○娼妓營業に關する制限　其筋にて兼てより風紀取締上娼妓の年限に制限を附したるが更に人身保護、傳染病豫防其他廢業後に於ける授產の目的にて其營業上にも制限を附し一日二人以上の客に接する事を禁じ尙一日二三時間宛雇主をして裁縫其他の實業を修めしめんとて昨今種々取調中なりと云ふ

○東京人の躰格　昨三十二年東京市徵兵適齡者四千五百六十三人中、甲種合格者の百分比例は左の如し。

馬夫	六十七人	舶乘業	六十六人
僧侶	五十八人	農夫	五十二人
職工(石工木工等勞働者)	五十一人	雜業	四十九人
脚夫	四十七人	商人	四十人
職工(料理人理髮者等家居者)	三十七人	職工(裁縫師靴師等の居職者)	三十四人
無職業	三十六人	職員	三十五人
藝人	一人	學生	一人

依是觀之、四肢の勞働激しき者は其躰格何れも上等に屬するが、一見異樣の觀あるは僧侶の第三位にあるとなり、座業者と頭腦を過度に働かすものは共に下等に屬せり。學生の百人中僅かに一人の割合を呈するに至りては驚かざるを得ず。

○義和團——淸國事變　五月末淸國義和團の匪徒蜂起の報あり六月の初めに至り彌々猖獗を致し天津北京の間連絡絶へて北京に於ける列國公使の運命も獨公使は全く殺され其他の公使未だ確たる消息をえずそれに關して團匪蜂起以來の消息を列擧すれば六月十二日には居留民保護のため軍艦吉野等數隻の派遣あり十三日には北京にて日本公使館書記生杉山彬氏の殺害さるゝあり十七日には各國の連合軍淸國太沽砲臺を陷落せしも天津北京間の連絡一綫一斷し未だ北京に於ける事の眞相を知らす其間團匪は淸國の各地に蜂び起りて事態彌々穩かならず端郡王獨り權を弄し頻りに排外的行動を擅にするの事實眞なり、

○帝國艦艇の類別　今回左の通り改定せられたり

艦種類別標準

戰艦	一等	一萬噸以上	二等	一萬噸未滿				
巡洋艦	一等	七千噸以上	二等	七千噸以下三千五百噸以上	三等	三千五百噸未滿		
海防艦	一等、二等、三等	巡洋艦に同じ						
砲艦	一等	千噸以上	二等	千噸未滿				
水雷艇	一等	百二十噸	二等	百二十噸未滿七十噸以上	三等	七十噸未滿廿噸以上	四等	二十噸未滿

軍艦

▲戰艦(八隻)一等富士、八島、敷島、朝日、初瀨、三笠(六隻)◎二等扶桑、鎭遠(二隻)　巡洋艦(二十隻)一等(裝甲)淺間、常磐、八雲、吾妻、磐手、出雲(六隻)◎二等高砂、笠置、千歲、吉野、浪速、高千穗、嚴島、松島、橋立(九隻)◎三等秋津洲、須磨、明石、千代田、和泉(五隻)　▲海防艦(十隻)現在海防艦の中には一等二等なし◎三等比叡、金剛、高雄、武藏、葛城、大和、天龍、海門、筑波、濟遠　▲砲艦(十五隻)◎一等筑紫、平遠(二隻)二等愛宕、赤城、大島、鳥海、摩耶、天城、操江、鎭東、鎭西、鎭南、鎭北、鎭中、鎭邊(十三隻)　▲通報艦(四隻)千早、宮古、八重山、龍田　▲水雷母艦(一隻)豐橋　▲水雷驅逐艦(十二隻)東雲、叢雲、陽炎、夕霧、不知火、(六隻)雷、電、霓、朧、曙、漣(六隻)以上總計七十艇(內軍艦十七隻)驅逐

艇十二隻、水雷母艦一隻） ▲水雷艇一等（百二十噸）小鷹、福龍、隼、白鷹、鵠、眞鶴、千鳥（七隻）◎二等第廿一號乃至第廿五號、第廿九號乃至第四十九號、第六十號乃至第六十六號（三十一隻）◎三等第五號乃至第二十號、第廿六號、第廿七號乃至第五十號第五十九號（廿七隻）◎四等第廿八號及び艦船に搭載せるもの若干隻あり

●**訃音** 後備陸軍中將大築尙志氏は十三日、貴族院議員水野遵は十四日、舊加賀金澤藩主前田利嗣氏は同日何れも逝去したり

○**印度飢饉** の慘狀を訴へて同國人にして吾大學に留學し居るライ及びシングの二氏は左の檄文を諸方に發して義捐を請へり

印度飢饉の慘狀に付き江湖慈善家の同情に訴ふ

人道の大本は淸淨無緣の慈悲に在り、今や印度の母國は恐るべき一大飢饉に遭遇し、幾十萬の生靈は天を仰ひで飢餓に泣き、死地に瀕して粱餌を呼ぶ、政府の救濟宜しきを得ざるに非ず、民間の慈善至らざるに非ず、されども其の猖獗の勢、災害の甚しき、又如何ともすべからざるなり、この時に於て、日本慈善家の眼底に泛べる一點同情の淚は、彼に在りては、亦幾多生靈の壽命を死窟より救ひ得らるべきや知るべからず、

抑も印度人民の主業は耕農にして、彼等生平の願望は、唯々風雨時を得て、五穀豐熟し、收穫常に超ゆるの一事あるのみ、而るに一千八百九十七年（明治三十年）に於ける風害不作の結果は、幾萬の生靈、家に一碗の炊ぐべきなく、村に一家の寄るべきなく、空しく飢渴を天に訴へ、他界の鬼と化し去るの悲境に陷りたり、而して彼の飢饉の餘殃、尙未全く去らず、民尙菜色あるの今日に於て、再びこの大飢饉に逢ふ、厄運何ぞわが母國にのみ酷なるや、嗚呼試みに思へ、骨と皮とに化したる愛兒を抱き悲める慈母の苦境、顏色衰へて幽靈の如く、身は唯だ一片の破布その醜形を掩ひ、相見て死を竢つもの、人の淚に生死すべき孤兒の寄るべきなくして街頭に彷徨たる、稚兒の死母を呼べる、愛妻の夫の死に赴く能はざる、餓莩相枕し、一族皆去りて、送終一遍の供養だに行ふものなきに至る、此の如きもの幾萬、嗚呼亦憐むべきの至りならずや、

夫れ最勝無上の愛は、無緣の衆生に及ぶを以て、その極度となす、是れ實に淸淨の慈悲にして、その宗教の何如に係らず、その信仰の有無に係らず、倶に遵奉すべき人道の大本なり、大方の志士、江湖の慈善家よ、我々の微衷を察し玉ひ、若しその至情に出るを看破し玉はゞ、その多寡の如何に係らず、印度飢餓の人命を救はん爲に喜捨し玉はんことを懇願の至りに耐へざるなり、

四錢を寄附し玉はゞ以て一日一人の命を救ひ得べく、壹圓にて一ヶ月間一人を救ふべし、貳圓の高は一人を次期の收穫時まで救ひ、拾圓は夫妻及その兒を秋まで救ひ、貳拾圓は一家を悉く死地より助け百圓は五家族を全く救助し得べし、

些少の高なりとも、人々皆寄附あらんことを希望す、

印度飢饉救助金募集發起人

在工科大學　ロマカント、ライ

プラン、シング

右贊成發起人　理學博士菊池大麓　手島精一　工學博士辰野金吾　工學博士渡邊渡　法學博士和田垣謙三　法學博士戸水寬人　醫學博士片山國嘉　理學博士神保小虎　文學博士高楠順次郞　理學士中村恭平

寄附金は總て左記名の人に宛送附ありたし

本鄕元富士町一番敎師館内學士會事務所にて　荒尾　邦雄

○**英國短信** 六月二日附在英國社友の許より送り越したる書信のは

しに左の如く見えり
前略小生は嗣法猊下に扈してブリッチッシユ、アイルスに漫遊いたし居候中旬には倫敦へ歸着いたすべきが當地方は英國中にて風光絶佳の境に有之目下永日のことゝて日沒は午後十時過に御座候氣候は冷氣にて日本の四月上旬の如く極暑の時とても現今と格別の相異なきものゝ由に御座候
當地インバーネスは倫敦より約六百哩許り北方に位いたし候得共滊車にて僅に十五時間にて到着いたされ申候近傍湖水多く湖光山色蒼翠、人家の樹林の間に點綴せる態など悉く詩料畵材たらざるなくスコットのレヂーオブジーレーキの作ある偶然ならざる處に御座候一行極めて健在云々

○布哇より　在布哇今村惠猛氏よりの通信の中に曰ふ

今回當地に於て青年佛教徒を集め青年會を組織し其機關として粗末なる雜誌發刊致度經畫仕居候當地青年佛教徒と申すは大概勞働者にて教育あるもの尠く執筆者なきには閉口桑港とは大に事情を異にし居候
現今内地に於ける佛教の勢力(表面のみにても)を當地の在留者に知らせ度彼等は長く外國に在り内地宗教上の事は少しも知らす宗教と云へば唯キリスト教とのみ思ひ昨年藤田順道君が軍艦に便乘して渡來の時などは本願寺が海軍布教を爲し軍人が佛教を聞くとは意外と申候程に御座候
建築事業の始末觀教等のみに日を消し時々西洋人來訪ブロークンの會話にて相手に成居候松本豐隆君渡來ノ筈日々屈指仕居候(六月廿九日)

社告

節正に長夏を迎へ天地稍ゝ熱せんとす茲に謹て讀者諸君の健康を祈る

編集員一同